

第三十條 此規則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ不諭罪及ヒ減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス
 第三十一條 醬油製造人ノ家族雇人コシテ其營業ニ係リ此規則ヲ犯シタル者ハ其營業者ヲ處罰ス

○明治十八年七月六日太政官第貳拾貳號布告

本年(五月)第拾號布告醬油稅則第十二條ニ據リ外國ニ輸出スル醬油ニ對シ造石稅金ノ下戻手續左ノ通相定ム

第一項 外國輸出ニ係ル醬油ノ稅金ト下戻ヲ請ハントスル者ハ甲號書式ノ願書ニ通シ輸

出港稅關ニ差出シ其現品ノ檢査ヲ經テ檢査濟ノ證明書ヲ受クヘシ

第二項 造石稅金ノ下戻ヲ請フコトハ乙號書式ノ願書ニ輸入港在留領事ノ檢印ヲ受ケタル陸揚免狀若クハ其他ノ書類(領事不在ノ港ニ於テハ該港稅關ノ通關證書若クハ其陸揚

セシ證憑トナルヘキ書類)及當初輸出港稅關ノ證明書ヲ添ヘ該稅關ヘ差出スヘシ

第三條 外國ニ輸出シ造石稅金ノ下戻ヲ受タル醬油ヲ更ニ輸入スルトキハ丙號書式ノ屆書ヲ稅關ニ差出シ現品ノ檢査ヲ受ケ其造石稅ヲ納ムヘシ

右布達候事

甲號書式

檢査願書

一 醬油

記號

筒數

石數

造石稅金

製造地

右ハ何國何船ヲ以テ何國何港ニ輸出致候ニ付御檢査相願候也

輸入人住所

年 月 日

姓 名

某稅關長宛

乙號書式

造石税金下戻願書

一 醬油 何石

此造石税金 何圓

右ハ明治何年何月何日何國何港へ輸入致候ニ付該造石税金御下戻有之度因テ輸入陸揚免狀(或ハ陸揚ノ証憑書)及檢査濟御證明書共相添此段相願候也

輸出人住所

年 月 日

姓 名

某稅關長宛

丙號書式

造石税金上納書

一 醬造 何石

此造石税金 何圓

記號

箇數

造石税金下戻年月日

當初輸出港

仕出港

右再輸入致候ニ付書面ノ通造石税金上納仕候也

輸入人住所

年 月 日

姓 名

某稅關長宛

○明治十八年九月十九日大藏省第六十七號達

醬油醱ノミ貯藏場所等ノ件今自左ノ通り相心得ヘシ

一 醬油醱ノミ貯藏スル場所ハ製造場區外ト雖正稅則取扱心得書第三項但書ニ準據スヘシ

一 營業中都合ニ依リ醬油醱ヲ營業者ニ賣渡スハ差支ナシ

但本文ノ場合ニ於テハ賣渡人ヨリ其趣届出シメ檢査員ノ證明書ヲ添付シ更ニ買受人ヨ

醬油條例

リ其地ノ検査員ニ申出検査ヲ受ケシムヘシ
右相違候事

醬油稅則終

菓子稅則

○明治十八年五月八日太政官第拾壹號布告

菓子稅則別紙ノ通制定シ明治十八年七月一日ヨリ施行ス

但東京府管轄伊豆七嶋小笠原島函館縣沖繩縣札幌縣根室縣ハ當分之ヲ施行セズ
右奉 勅旨布告候事

(別紙)

第一條

菓子營業者ヲ分テ左ノ三種トス

菓子製造人

(菓子ヲ製造シ之ヲ菓子營業者ニ賣渡ス者ヲ云フ)

菓子卸賣人

(菓子ヲ買入レ之ヲ菓子營業者ニ賣渡ス者ヲ云フ)

菓子小賣人

(菓子ヲ需用人ニ賣渡ス者ヲ云フ)

第二條

菓子營業ヲ爲サントスル者ハ管轄ニ願出營業無札ヲ受クヘシ但一人ニテ二箇以上ノ營業場

菓子稅則

菓子税則

設クル者又ハ二種以上ノ營業ヲ兼ヌル者ハ各別ニ營業鑑札ヲ受ケヘシ

第三條

菓子營業者自己又ハ家族雇人ヲ以テ仕入又ハ出賣ヲ爲サントスルトキハ管廳ニ願出仕入鑑札又ハ出賣鑑札ヲ受ケ各自之ヲ携帯スヘシ

第四條

鑑札ヲ受クルトキハ左ノ鑑札料ヲ納ムヘシ

營業鑑札料

一枚ニ付金貳拾錢

仕入鑑札料

一枚ニ付金拾錢

出賣鑑札料

一枚ニ付金拾錢

第五條

鑑札ヲ失却毀損又ハ代替改名轉居セシトキハ管廳ニ届出其再渡又ハ書換ヲ請フヘシ但前條ノ鑑札料ヲ納ムヘシ

第六條

菓子營業者廢業スルトキハ管廳ニ届出鑑札ヲ還納スヘシ

第七條

鑑札ハ貸借買賣又ハ譲受讓渡ヲ爲スコトヲ得ス

第八條

菓子營業者ハ左ノ區別ニ從ヒ營業稅ヲ納ムヘシ但二種以上ノ營業ヲ兼ヌル者ハ其稅額ノ多キモノニ就キ納稅スヘシ

製造營業稅

雇人十人以上アル者

一箇年 金貳拾圓

雇人六人以上アル者

一箇年 金拾五圓

雇人三人以上アル者

一箇年 金拾圓

雇人二人以下アル者

一箇年 金五圓

雇人ナキ者

一箇年 金壹圓

卸賣營業稅

菓子税則

雇人十人以上アル者

一箇年 金貳拾圓

雇人六人以上アル者

一箇年 金拾五圓

雇人三人以上アル者

一箇年 金拾圓

雇人二人以下アル者

一箇年 金五圓

雇人ナキ者

一箇年 金壹圓

小賣營業税

雇人三人以上アル者

一箇年 金七圓

雇人二人以下アル者

一箇年 金三圓

雇人ナキ者

一箇年 金壹圓

二種以上ヲ兼タル營業者ノ雇人ハ各種ヲ別タス之ヲ合算スルモノトス
露店又ハ呼賣ヲ業ト爲ス者ハ其營業税ヲ免除ス

第九條

營業税ハ一箇年ヲ二期ニ分テ前半年分ハ其年一月三十一日限後半年分ハ同ク七月三十一日

限之ヲ納ムヘシ但新ニ開業スル者ハ營業鑑札ヲ受クルトキ其半年分ノ營業税ヲ納ムヘシ

第十條

營業税前半年分ハ其年一月一日後半年分ハ同ク七月一日ノ雇人ノ現員又新ニ開業スル者ハ其營業鑑札ヲ受クルトキノ現員ニ據リ定ムヘシ但雇人増加スルトキハ該期ノ増税ヲ納ムヘシ

第十一條

菓子製造人ハ製造税トシテ菓子賣上金高百分ノ五ヲ左ノ期限ニ從ヒ納ムヘシ

第一期 (一月一日ヨリ六月三十日迄賣上金高ニ係ル分)

其年八月三十一日限

第二期 (七月一日ヨリ十二月三十一日迄賣上金高ニ係ル分)

翌年二月二十八日限

半年分ノ賣上金高三拾圓未滿ノ者及ヒ露店又ハ呼賣ヲ業ト爲ス者ハ其製造税ヲ免除ス

第十二條

菓子營業者ハ毎年一月一日七月一日現在雇人ノ員數氏名ヲ取調其月十五日限又新ニ開業スル者ハ出願ノトキ管廳ニ届出ヘシ但増員アルトキハ其時々之ヲ届出ヘシ

第十三條

菓子製造人ハ毎年其製造高及ヒ賣上金高ヲ左ノ通管廳ニ届出ヘシ但露店又ハ呼賣ヲ業ト爲ス者ハ此限ニアラス

一月一日ヨリ六月三十日迄ノ分 其年七月十五日限

七月一日ヨリ十二月三十一日迄ノ分 翌年一月十五日限

第十四條

菓子製造人ハ菓子并ニ其製造原品ノ賣買ヲ帳簿ニ記載シ置ヘシ但露店又ハ呼賣ヲ業ト爲ス者ハ此限ニアラス

第十五條

菓子營業者ノ帳簿倉庫營業場及ヒ營業物品ハ主任官隨時之ヲ検査スルコトアルニシ

第十六條

主任官ニ於テ此規則ニ關シ犯罪アリト認知シ又ハ思料スルトキハ其場所ニ立入り證憑取調ヲ處分シ爲メコトヲ得但主任官ノ證票ヲ携帯スヘシ

第十七條

第二條ニ違ヒ營業鑑札ヲ受ケヌシテ菓子營業ヲ爲シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ菓子及ヒ製造器械ヲ沒收ス既ニ賣捌キタル者ハ其代金ヲ追徴ス

第十八條

第十二條第十三條ノ届書又ハ第十四條ノ帳簿ニ詐僞ノ記載ヲ爲シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十九條

第三條ニ違ヒ鑑札ヲ携帯セヌシテ仕入又ハ出賣ヲ爲シタル者及ヒ第七條ニ違ヒ鑑札ヲ貸借賣買又ハ讓受讓渡シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十條

第五條第六條第十二條第十三條ノ届出ヲ怠リタル者及ヒ第十四條ノ帳簿ニ記載ヲ怠リタル者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第二十一條

此規則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ不諭罪及ヒ減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第二十二條

菓子營業者ノ家族雇人ニシテ其營業ニ係リ此規則ヲ犯シタルトキハ其營業者ヲ處罰ス

菓子税則終

烟草税則

○明治十五年十二月二十七日太政官第六拾三號布告

明治十八年(十月)第百五拾號布告烟草税則別紙ノ通改定シ來十六年七月一日ヨリ施行ス
但明治十年(二月)第拾四號布告第一項ハ廢止ス

第一章 烟草營業

第一條 烟草營業者ヲ分テ左ノ三種トス

烟草製造人 烟草仲買人 烟草小賣人

第二條 刻烟草又ハ卷烟草等ヲ製造スル者ヲ烟草製造人トス
但實銀ヲ受ケテ他ノ製造人ノ烟草ヲ製造スル者ハ此限ニアラス

第三條 未製造ノ烟草ヲ買入レ之ヲ製造人又ハ同業者へ賣渡シ及製造烟草ヲ買入レ之ヲ小賣人又ハ同業者へ賣渡ス者ヲ烟草仲買人トス

第四條 製造烟草ヲ自用者へ賣捌ク者ヲ烟草小賣人トス

第二章 營業鑑札

烟草稅則

第五條 煙草營業者ハ管轄廳へ願出營業鑑札ヲ受ク可シ但製造仲買及小賣ヲ兼用スル者ハ各共營業鑑札ヲ受ク可シ

第六條 煙草營業者自己又ハ家族雇人ヲ以テ仕入又ハ出賣ヲ爲ストキハ管轄廳ニ願出仕入又ハ出賣鑑札ヲ受ク各自之ヲ携帶スヘシ

第七條 煙草營業者ハ鑑札ヲ受クルトキ左ノ通鑑札料ヲ納ム可シ

煙草營業鑑札料 壹枚ニ付金貳拾錢

煙草仕入鑑札料 壹枚ニ付金拾錢

煙草出賣鑑札料 壹枚ニ付金拾錢

第八條 鑑札ヲ失却毀損シ又ハ代替改名轉居セシトキハ之ヲ管轄廳ニ届出其再渡又ハ書換ヲ請フ可シ但前條ノ通鑑札料ヲ納ム可シ

第九條 營業人廢業スルトキハ管轄廳へ届出鑑札ヲ還納ス可シ

第十條 鑑札ハ貸借賣買及ヒ讓渡ヲ爲スルコトヲ得ス

第三章 營業稅

第十一條 煙草營業者ハ左ノ通營業稅ヲ納ム可シ但兼業スル者ハ各共營業稅ヲ納ム可シ

煙草製造營業稅 壹ケ年 金拾五圓

煙草仲買營業稅 壹ケ年 金拾五圓

煙草小賣營業稅 壹ケ年 金五圓

第十二條 營業鑑札稅ハ年々兩度ニ區分シ前半年分ハ一月三十一日限後半年分ハ七月三十一日限管轄廳ニ納ム可シ但新ニ開業スル者ハ營業鑑札ヲ受ル節其半年分ノ營業稅ヲ納ム

第四章 印稅

第十三條 煙草製造人刻煙草ヲ製造スルトキハ左ノ量目ニ從ヒ玉包紙包又ハ箱詰ニ裝置シ

和當ノ印紙ヲ用フ可シ

量目 印稅 卸賣定價百匁ニ付同錢以上五拾錢未滿ノ分 同 卸賣定價百匁ニ付同 五拾錢以上ノ分

五匁 貳厘 三厘 四厘 八厘

十匁 四厘 六厘

十五匁 六厘 壹錢貳厘
 廿匁 八厘 壹錢貳厘
 三十匁 壹錢貳厘 壹錢八厘 貳錢四厘
 ○明治十六年十二月十二日太政官第四拾壹號布告ヲ以テ本條中四十匁及ヒ八十匁ノ二項ヲ
 追加ス

四十匁 壹錢六厘 貳錢四厘 三錢貳厘
 五十匁 貳錢 三錢 四錢
 八十匁 三錢貳厘 四錢八厘 六錢四厘
 百匁 四錢 六錢 八錢

第十四條 刻煙草ヲ玉包ニ爲ストキハ帶印紙ヲ以テ結束シ其封緘ノ箇所及印紙ノ彩紋ヘカ
 ケ製造人ノ印章ヲ以テ消印シ箱詰及ハ紙包ハ封緘ノ要部ニ印紙ヲ貼用シ製造人ノ印章ヲ
 以テ之ニ消印ス可シ

第十五條 刻煙草ヲ五匁以下崩シ賣コ爲ストキハ貳厘ノ帶印紙ヲ以テ結束ス可シ

第十六條 刻煙草玉包又ハ崩シ賣ニ爲ストキハ帶印紙ノ外他ノ印類ヲ以テ之ヲ結束スルコ
 トヲ得ス

第十七條 外國へ輸出スル煙草ニ限リ輸出ノ節稅關ニ於テ戻稅トシテ印稅相當ノ金額ヲ輸
 出人へ下付ス可シ

第十八條 煙草印紙ノ種類價格左ノ如シ

帶印紙 黑色	一枚	貳厘
同 淡赭色	同	三厘
同 黃色	同	四厘
同 赭色	同	六厘
同 萌黃色	同	八厘
同 淡青色	同	九厘
同 茶褐色	同	壹錢貳厘
同 淡紅色	同	壹錢六厘

同	桔梗色	同	壹錢八厘
同	橙黃色	同	貳錢
同	老綠色	同	貳錢四厘
同	濃青色	同	三錢
○明治十六年十二月十二日第四拾壹號布告ヲ以テ本條中淡黑色嬌栗色朱色ノ三項ヲ追加ス			
同	淡黑色	同	三錢貳厘
同	黃綠色	同	四錢
同	嬌栗色	同	四錢八厘
同	紫色	同	六錢
同	朱色	同	六錢四厘
同	赤色	同	八錢
第十九條 煙草印紙ハ管轄廳ノ許可ヲ得タル賣捌所ニ於テ發賣セシム其他ニ於テ賣買スルコトヲ得ズ			

第二十條 印紙貼用ノ細則ハ布達ヲ以テ定ムル所ニ從フ可シ

第五章 雜則

第二十一條 刻煙草ハ每個必ス製造人ノ氏名住所ヲ附記ス可シ

第二十二條 煙草營業者ハ無印紙又ハ不足印紙ノ刻煙草ヲ所持スルコトヲ得ズ仕入出賣ヲ爲ス者モ亦同シ

第二十三條 煙草營業者ハ左ノ帳簿ヲ調製ス可シ其記載方ハ布達ヲ以テ定ムル所ニ從フ可シ

煙草製造人

煙草製造帳

煙草仲買人

煙草買入帳

煙草賣買帳

煙草小賣人

煙草買入帳

煙草稅則

第二十四條 煙草營業者ハ管轄廳ニ願出印紙ヲ買入鑑札ヲ受ケ印紙買入ヲ爲ス爲ニ其鑑札ヲ携帶シ印紙賣捌人ニ示ス可シ

第二十五條 印紙賣捌人ハ印紙買受人ノ鑑札ヲ照査シテ其賣渡高及買受人ノ氏名住所賣渡ノ年月日ヲ帳簿ニ登記スヘシ

第二十六條 煙草營業者ハ煙草印紙ノ買受高其買入場所及使用高ヲ帳簿ニ登記ス可シ

第二十七條 煙草營業者ハ前年七月一日ヨリ其年六月三十日迄ノ煙草買入高賣捌高並印紙買入高及六月三十日ノ煙草並印紙ノ現在高ヲ取調七月三十一限管轄廳ニ届出ツ可シ

第二十八條 印紙賣捌人ハ前年七月一日ヨリ其年六月三十日迄ノ印紙賣捌高并買受人ノ氏名住所ヲ取調七月三十一日限管轄廳ニ届出ツ可シ

第二十九條 煙草營業者ハ營業ノ鑑札ヲ戶外ニ掲出ス可シ但舊式ハ布達ヲ以テ定ムル所ニ從フ可シ

第三十條 印紙買入鑑札ハ貸借賣買及讓渡ヲ爲スコトヲ得ス

第三十一條 未製造ノ煙草ハ煙草營業者ニアラザル者ニ賣渡スコトヲ得ス但貸與讓與ノ名

義ヲ以テスルモ亦同シ

第六章 検査

第三十二條 煙草營業者ノ帳簿及其所持ノ煙草ハ主任官隨時之ヲ検査ス可シ

第三十三條 検査官吏ハ検査ノ時官ノ印章ヲ携帶シ營業者ノ求ニ應ヰテ之ヲ示ス可シ

第七章 罰則

第三十四條 營業鑑札ヲ受ケスシテ煙草營業ヲ爲ス者ハ營業稅通脫ニ係ル金高三倍ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ煙草ヲ沒收シ之ヲ賣捌キタル者ハ其代價ヲ追徵ス

第三十五條 煙草營業者ニシテ無印紙又ハ不足印紙ノ刻煙草ヲ所持シ又ハ賣渡シタル者ハ拾圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ其賣渡代價ヲ追徵ス之ヲ貸與讓與シタル者モ同ク其罪ヲ論ス

第三十六條 帳簿ノ登記ヲ詐テ脱稅ヲ謀リ若クハ脱稅ノ便ヲ與ヘタル者又ハ届書ニ詐偽ノ記載ヲ爲シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十七條 煙草營業者ニシテ無印紙又ハ不足印紙ノ刻煙草ヲ買受ケタル者ハ五圓以上五

拾圓以下ノ罰金ニ處ス之ヲ借受讓受ケタル者モ同ク其罪ヲ論ス

第三十八條 第六條第十四條第十五條第二十一條第二十四條ニ違犯シタル者及第二十三條

ニ違犯シテ帳簿ノ調製ヲ怠ル者ハ五圓以上五拾圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ犯罪ニ係ル煙草
ハ之ヲ沒收シ之ヲ賣捌キタル者ハ其代價ヲ追徴ス

第三十九條 管轄廳ノ許可ヲ得スシテ印紙ヲ發賣スル者ハ五圓以上五拾圓以下ノ罰金ニ處

シ仍ホ其印紙ヲ沒收ス之ヲ買受ケタル者ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十條 未製造ノ煙草ヲ煙草營業者ニアラサル者ニ賣渡シタル者ハ三圓以上三拾圓以下
ノ罰金ニ處ス

第四十一條 第十三條ノ煙草裝置區分ニ違フ者ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ其
犯罪ニ係ル印紙ヲ沒收ス

第四十二條 鑑札ヲ買貸借又ハ讓受讓渡シタル者及第二十五條第二十六條ニ違犯シタル
者ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十三條 煙草自用者ニシテ未製造ノ煙草又ハ無印紙ノ刻煙草ヲ買受タル者ハ壹圓以上

壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス

第四十四條 第八條第九條第二十七條第二十八條ノ届出ヲ怠リタル者及第二十九條ニ違犯

シタル者ハ壹圓以上壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス

第四十五條 第二十條第二十三條第二十九條ニ依リ定メタル布達ニ違犯シタル者ハ壹圓以
上壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス

第四十六條 此規則ヲ犯シタル者ハ刑法ノ不諭罪及減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第四十七條 煙草營業者ノ家族雇人ニシテ其營業ニ係リ此規則ヲ犯シタル者ハ其營業者ヲ
處罰ス

○明治十六年六月四日太政官第拾八號布達

明治十五年(十二月)第六十三號布告煙草稅則本年七月一日ヨリ施行候ニ付左ノ通心得ヘシ
煙草仲買人小賣人ニシテ稅則施行前ヨリ製造煙草ヲ所持スル者ハ本年限リ其所持人ニ於テ
稅則第十三條ニ據リ印紙ヲ貼用スルヲ得但シ此場合ニ於テハ所持人ハ稅則第二十一條ノ製
造人ニ準シ自己ノ氏名住所ヲ附記スヘシ

稅則施行前既ニ裝置セル製造煙草ハ本年限リ其裝置ノ儘賣捌ヲ得尤稅則第十三條ニ照ラシ不足ニ係ル印紙ハ增加貼用スヘシ

印紙ハ舊長印紙及ヒ拾錢印紙ヲ除クノ外當分新舊取交セ使用スヘシ
舊長印紙及ヒ拾錢印紙ハ賣捌所ニ就テ引換ヲ乞フヘシ

○明治十六年六月(十一日)太政官第貳拾號布達

明治十五年(十二月)第六十三號布告煙草稅則中左ノ通り心得ヘシ

第一項 稅則第二條製造人ハ未製造ノ煙草ヲ耕作人又ハ仲買人ヨリ買入レ之ヲ製造シ仲買人又ハ小賣人ヘ賣渡セタマフ

第二項 稅則第三十一條煙草(營業者)トアルハ製造人仲買人ノミチ云フ

第三項 稅則第二十條煙草印紙ノ貼用ハ第一號離形ノ通り之ヲ貼用シ其價格及ヒ量目ヲ付記スヘシ帶印紙ハ結束ノ上兩端ニ余印アルモ之ヲ截斷スヘカラス

第四項 稅則第廿一條製造人ノ氏名住所ハ箱詰紙包ハ其見易キ個所帶印紙ハ其印紙彩紋ノ側面ニ記載スヘシ

第五項 稅則第十四條煙草印紙ノ消印ハ七分已上ノモノヲ用井墨肉ヲ以テ押捺スヘシ

第六項 稅則第十七條ニ據リ輸出煙草ノ戻稅ヲ請フ者ハ第十三條ノ印稅區別ニ依リ裝置種類ヲ分チ個數量目及ヒ印紙稅金額ヲ仕譯ケタル書面ヲ以テ其輸出港ノ稅關ヘ出願シ檢査ヲ受ケヘシ

第七項 稅則第廿三條ノ帳簿ニハ左ノ件ヲ記載スヘシ

製造人

煙草製造帳 年月日種類及ヒ未製造煙草何程ヲ何某ヨリ買入レ何程ニ製造シ其裝置種類定價區別量目個數代價及ヒ賣渡ノ數等ヲ記スヘシ

仲買人

煙草買入帳 年月日種類價格量目及ヒ賣主ノ氏名住所ヲ記スヘシ但未製造煙草ト製造煙草トハ帳簿若シハ記入口譯ヲ異ニスヘシ以下之ニ準ス

同

煙草賣渡帳 年月日種類價格量目及ヒ買主ノ氏名住所ヲ記スヘシ但書前ニ同シ

小賣人

煙草買入帳 未製造品買入ノ帳簿ト同シ
外總テ仲買人ノ帳簿ト同シ

第八項 稅則第二十七條第二十八條ノ届出ヲ爲スルハ第二號離形ニ倣ヒ之ヲ調製スヘシ

第九項 稅則第二十九條營業人ノ標札ハ第三號離形ニ倣ヒ各自之ヲ調製スヘシ

第十項 煙草製造人ハ其製造所及ヒ器械ノ員數増減共其時々管轄廳へ届出ヘシ但シ賃切リ

ニ付スルモノハ其賃切氏名住所并使用スル器械ノ員數及ヒ増減トモ其時々管轄廳へ届出ヘシ

第十一項 仲買人小賣人コソテ裝置煙草ヲ五匁以下崩賣ニ爲スルハ稅則第十五條ニ據リ結

束スヘシ但此場合ニ於テハ仲買人小賣人ハ第四項第五項ニ據リ自己ノ氏名住所ヲ附記ス

ヘシ

(離形略ス)

煙草(仕入出賣印紙買入)鑑札下渡高計算表 第五號離形

(離形ハ略ス)

煙草稅則終

醫藥衛生諸規則

第一章 賣藥規則

○明治十年一月二十日大政官第七號布告

第一章

第一條 (明治十年十二月二十八日太政官第八拾九號布告ヲ以テ左ノ如ク改正ス)

此規則ニ稱スル處ノ賣藥トハ丸藥膏藥煉藥水藥浴劑散藥煎藥等ヲ調製シ効能書ヲ附シ販

賣スルモノヲ云フ

第二條 (明治十一年九月十九日太政官第廿七號布告ヲ以テ左ノ如ク改正ス)

此賣藥營業者藥味分量用法服量功能ヲ詳記シシテシテニ族籍氏名ヲ記シ其管轄廳ニ願出免

許鑑札ヲ受ケヘシ

○明治十五年十月廿七日太政官第五拾貳號布告ヲ以テ左ノ通り但書ヲ追加ス)

但免許ヲ受ケタル者ニテ以上ニ決テ之ヲ調製スル時ハ其箇所毎ニ免許鑑札ヲ受ケヘ

醫藥衛生諸規則

醫藥衛生諸規則

第三條 (明治十一年九月十九日太政官第廿七號布告ヲ以テ左ノ如ク改正ス)

管轄廳ニ於テハ願書ヲ檢査シ其製藥配伍ノ藥品劇毒微毒ニ拘ラス取扱上失誤ヲ生シ易キモノ及ヒ毒藥劇藥取締ニ關係スルモノハ之ヲ許サル、可シ

第四條 第八條ニ記シクル期限中藥味分量用法服量能書ヲ改正セント欲スル者其由テ届出舊鑑札ヲ返納シ更ニ新鑑札ヲ願受クヘシ

第五條 (明治十一年九月十九日太政官第廿七號布告ヲ以テ左ノ如ク改正ス)

賣藥ヲ請賣セント欲シ其營業者ノ許諾ヲ得タルモノハ族籍氏名ヲ記シタル願書ニ營業者所持スル官許公文ノ寫及ヒ營業者ト取結ヒタル約定書トヲ添ヘ其管轄廳へ願出内務省ノ免許鑑札ヲ受クヘシ

第六條 賣藥營業者及ヒ請賣者共必ス免許ノ看板ヲ掲クヘシ

第七條 賣藥營業者及請賣者ニ於テ自ラ行商シ又ハ賣子ヲ派出シテ行商ヲ爲サシメント欲スルハ其由テ管轄廳へ届出行商鑑札ヲ願受ケ行商スルハ必ス之ヲ所持ス可シ

第八條 營業鑑札請賣鑑札行商鑑札ハ其鑑札記載月ノヨリ滿五年ヲ以テ免許ノ期限トス此

期限ヲ過キ尙免許ヲ得ント欲スルモノハ舊鑑札ヲ返納シ更ニ新鑑札ヲ願受クヘシ

第九條 第八條ニ記シタル期限中第四條ノ改正發賣ヲ願出之ヲ免許スルハ新鑑札記載ノ月ヲ以テ一期ノ初月ト爲スヘシ

第十條 免許期限内ト雖モ其製藥第三條ニ掲クル處ノ有害(明治十一年九月十九日太政官第貳拾七號布告ヲ以テ「有害」ヲ「有害」ニ改ム第)品ナルヲ更ニ發見スル時或ハ營業者製藥ヲ粗惡ニスル等ノ下アル時ハ直ニ鑑札ヲ取上ケ發賣ヲ禁止スルコアル可シ

第十一條 營業者廢業スルカ又ハ禁止セラル、其ハ其請賣者及ヒ賣子共其販賣ヲ許サス

第十二條 諸鑑札ヲ遺失シ又ハ水火盜難ニ因テ毀失シタルハ其仔細ヲ詳記シテ管轄廳へ届ケ出再ヒ之ヲ願受クヘシ

第十三條 免許鑑札ヲ他人ニ讓渡サン欲トスル者ハ雙方連印ノ願書ヲ管轄廳ニ差出シ名前書換ヲ請フヘシ

第十四條 (明治十年十二月廿八日太政官第八拾九號布告ヲ以テ左ノ如ク改正ス) 賣藥營業者及ヒ請賣者免許期限中其相續人ニ於テ之ヲ相續スル時其由ヲ記シ管轄廳へ鑑

醫藥衛生諸規則

札名前書換ヲ請フヘシ

第十五條 賣藥營業者廢業シ若クハ禁止セラレタルキハ營業者ハ勿論其請賣者ニ於テモ總テ諸鑑札ヲ返納ス可シ

第二章

第十六條 (明治十四年四月二十六日大政官第貳拾八號布告ヲ以テ左ノ如ク改正ス)

賣藥營業者ハ左ノ通税金並ニ鑑札料ヲ上納ス可シ

賣藥營業稅 藥劑一方ニ付一ケ年 金貳圓

右鑑札料 藥劑一方ニ付一枚 金貳拾錢

○明治十五年十月廿七日太政官第五拾貳號布告ヲ以テ鑑札料云々ノ項ヘ左ノ通り但書ヲ追加ス

但第二但書ニ依リ免許鑑札ヲ受クル者ハ其箇所毎々本文ノ税金並鑑札料ヲ納ム可シ

第十七條 水火盜難ニ因リ鑑札ヲ毀失シ更ニ新鑑札ヲ願受クルキハ其鑑札料ノ半高ヲ納ム

第十八條 税金ハ毎年兩度ニ區分シ前半年分ハ七月三十一日限り後半年分ハ翌年一月三十一日限り鑑札料ハ其都度ニ管轄廳ヘ上納ス可シ

第十九條 税金ハ六月以前免許ノ者ハ前半年分七月以後ハ半年分廢業ノ者ハ七月以後ハ前

年分六月以前ハ半年分ヲ納ムヘシ

但第十條ノ有害品ナルヲ更ニ發見セシ時ニ限り月割ヲ以テ税金ヲ納メシムヘシ

第三章

第二十條 無鑑札又ハ鑑札ヲ借受ケ自ラ行商シ又ハ行商セシムル者及ヒ之ヲ貸ス者又ハ期限過タル鑑札ヲ以テ自ラ行商シ又ハ行商セシムル者ハ其鑑札ヲ取上ケ藥劑一方ニ付五圓ノ罰金ヲ科スヘシ

第二十一條 無鑑札又ハ鑑札ヲ借受ケ又ハ期限過キタル鑑札ヲ以テ請賣スル者及ヒ無鑑札ノ者ヲシテ請賣セシメ又ハ鑑札ヲ貸ス者ハ其鑑札ヲ取上ケ製藥ヲ没入シ藥劑一方ニ付拾圓ノ罰金ヲ科スヘシ

第二十二條 免許ヲ受ケヌシテ私ニ藥味分量用法服量能書等ヲ改更シ又ハ許可ヲ經ズシテ

無稽ノ妄説ヲ記載シ世人ヲ誑惑スル者ハ其藥札ヲ取上ケ製藥ヲ没入シ藥劑一方ヲ付キ拾圓以上貳拾五圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ

第二十三條 (明治十四年四月二十六日太政官第貳拾六號布告ヲ以テ左ノ如ク改正ス)

無鑑札ニテ營業スル者又ハ營業者ニシテ私ニ請賣者ニ藥劑ヲ調製セシムル者又ハ請賣者自ラ之ヲ調製スル者ハ其製藥及ヒ賣得金ヲ没入シ藥劑一方ニ付五圓以上貳拾五圓以下ノ罰金ヲ科ス可シ

第二十四條 諸鑑札ヲ偽造シ又ハ他人ノ鑑札ヲ贋造シテ發賣スル者ハ其製藥及ヒ其賣得金

ヲ没入シ藥劑一方ニ付キ五拾圓以上百圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ

第二十五條 私ニ有毒藥ヲ配伍スル者ハ其鑑札ヲ取上ケ製藥及其賣得金ヲ没入シ藥劑一方

ニ付百圓以上四百圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ

第二十六條 以上ノ犯則者ヲ見届ケ訴出ル者アル時ハ事實取組ノ上相違ナキニ於テハ其賞

トシテ其罰金ノ半高チ與フヘシ

◎第二章 藥品取扱規則

○明治十三年一月十七日太政官第壹號布告

第一條 凡ソ藥品中最モ注意シテ精撰スヘキモノヲ第一類(注意藥)トシ其性効峻烈ニシテ僅少ノ分量ト雖モ直チニ生命ヲ傷害スルニ足ル可キ者ヲ第二類(毒藥)トシ其性効第二類ノ如ク峻烈ナラサルモ用量ニ因テ容易ニ危害ヲ來スヘキ者ヲ第三類(劇藥)トス其類目別表ノ如シ

但新タニ發見及ヒ舶來シタル藥品ハ先ツ最寄司藥場ニ出シテ試験ヲ受ケ其告示スル所ニ從フヘシ

第二條 第一類製藥ハ其性効ノ緩劇ニ拘ハラズ若シ精良ナラサルモハ醫師ノ目的ヲ誤リ以テ人命ヲ危フスルカ故ニ其粗製藥ヲ(故意ニ他物ヲ混シタルコト非ス全ク化學製造上或ハ採收ノ際其法粗漏ニシテ純精ナラサルモノ、類ヲ云フ)ハ之ヲ藥用トシテ販賣スヘカラズ

但藥師ニ於テ自ラ其良否ヲ鑑別シ能ハサルモハ最寄司藥場ニ請ヒ試験ヲ受クルヲ得

第三條 第一類中ノ粗製品ト雖モ仍ホ學術上工職上等ノ用ニ供スルニ足ルモノハ粗製ノ字

其器ニ明記シ之ヲ販賣スルヲ得

第四條 第二類第三類ノ藥品ハ醫師ノ處方書ニ據テ調査スルノ外醫師藥舖化學者工職者等

ヨリ品名量數需用ノ目的年月日及ヒ住所姓名ヲ詳記シタル證書ヲ以テスルニアラサレハ

決シテ販賣或ハ授與スヘカラス

但證書處方書ハ之ヲ保存シ臨時ノ點檢ニ供メ可シ且本條ノ手續ニ依ルモノト雖も幼稚

ノモノ其他不安心ト認ムルモノニハ一切交付スヘカラス

第五條 第二類第三類ノ藥品ヲ販賣スルルハ其器若クハ包紙へ必ス普通ノ名稱ヲ記シ且第

二類ハ毒ノ字第三類ハ劇ノ字ヲ明書スヘシ

但醫師ノ處方書ニ據ラスシテ封緘ヲ開キタル第二類第三類ノ藥品ヲ小賣若クハ授與ス

ルルハ本文ノ外更ニ適應ノ器ニ入レ密閉封緘ス可シ

第六條 第二條第四條本文ニ背戾シ又ハ贗品(故意ニ他ノ物品ヲ本品ニ混合シテ其容量重

量ヲ増スモノ若クハ他ノ物品ヲ以テ本品ニ擬シ或ハ名箋ヲ變換スルモノ、類ヲ云フ)販

賣品總テ酸敗、風化、或ハ潮解シ若クハ黴菌ヲ生シ陳敗ニ傾ク等ニ因リ其藥品本性ノ効力

ヲ變シ或ハ其効力ヲ失スルモノ、類ヲ云フ)ヲ販賣スルモノハ其贗敗品ヲ没入シ三十拾圓

以上五百圓以下ノ罰金若クハ一月以上一年半以下ノ懲役第一條但書第四條但書及第三條

第五條ニ背戾スルモノハ壹圓以上貳拾五圓以下ノ罰金若クハ一日以上二十五日以下ノ懲

役ヲ科シ又ハ罰金懲役ヲ併セ科スヘシ

第七條 右ノ罰則ヲ再犯スルモノハ其本罪ノ最多数ニ貳倍以下ノ罰ヲ科シ三犯スルモノハ

本罰ノ最多数ニ三倍以下ノ罰ヲ科スヘシ

(類目表ハ略ス)

○明治十三年五月十五日太政官第貳拾三號布告

石炭酸其他劇藥ハ本年一月第壹號布告藥品取扱規則第四條ニ照テシ可取扱ノ處傳染病流行

ノ際ハ内務省布達ニ從ヒ消毒藥ニ調製候分ニ限り藥舖ニ於テ販賣差許候條販賣望ノ者ハ

其管轄廳ニ可願出此旨布告候事

◎第三章 藥用阿片賣買并製造規則

○明治十一年八月九日太政官第貳拾壹號布告

第一條 阿片ノ賣買及製造ハ藥用品ニ限り此規則ニ依テ之ヲ許可ス

第二條 藥用阿片ハ其内國産若クハ外國産ヲ論セス總テ内務省ニ其品位ヲ定メテ之ヲ買上ケ然ル後チ各司藥場ヨリ阿片卸シ賣特許藥舖ニ拂下ケ之ヲ賣捌カシムヘシ

但司藥場ヲ置カサル地方ニ於テハ該地方廳ヨリ之ヲ拂下クヘシ

第三條 各司藥場ヨリ拂下クル所ノ阿片ハ量目一ヲ以テ一器トシ每器司藥場ノ印紙ヲ貼付ス可シ

第四條 地方廳ハ土地ノ廣狹位置ヲ量リ一管内相當ノ人員ヲ限り藥舖ノ身元人物ヲ選ミテ

内務省ニ稟議シ鑑定ヲ受ケテ之ヲ本人ニ交付スヘシ

但廢業ノ者アル節ハ其鑑札ヲ内務省ニ返納ス可シ

第五條 特許管轄ヲ受ケタル藥舖ノ住所姓名ハ該管轄廳ヨリ管内ノ公私病院醫師藥舖一般ニ報告ス可シ

但廢業ノ者アル節モ本文ニ準シ速カニ報告スヘシ

第六條 特許管轄ヲ受ケタル藥舖ハ其店頭ニ特許藥用阿片賣捌所ト大書シタル看板ヲ掲ケ

置ク可シ

第七條 特許ヲ受ケタル藥舖ハ半年分賣捌ノ高ヲ豫算シ毎年兩度最寄司藥場(司藥場ナキ地方ハ該地方廳)ニ申立テ其拂下ヲ請フヘシ

但缺乏ノ節ハ臨時拂下ケヲ請フヲ得

第八條 凡ソ醫師病院及ヒ一般藥舖等ニ於テ藥用阿片ヲ要スルトハ其量目并ニ其住所姓名及ヒ年月日(病院ハ其名稱及ヒ院長若クハ副長ノ姓名)ヲ記シ調印シタル證書ヲ以テ特許藥舖ニ就キ之ヲ購求スヘシ特許藥舖ニ於テハ之ヲ賣渡スル其量目一度ニ四十匁ヲ超ユヘカラス

但病院及ヒ醫師等ニ於テ便宜ニ依リ一般藥舖ニ就キ之ヲ購求スルト一般藥舖相互ニ賣買スルトハ妨ケスト雖モ必ス本條ノ證書ヲ以テスヘシ且其量目一度ニ八匁ヲ超ユヘカラス

第九條 凡テ内外國人共醫師ノ處方箋ヲ持參シタル者ノ外ハ特許藥舖并一般藥舖ニ於テ一切之ヲ賣渡スヘカラス

第十條 特許藥舖ハ每半年分阿片拂受弁ニ一匁以上賣捌ノ高及ヒ買入ノ住所姓名弁ニ一匁以下賣捌ノ總高等明細表正副二通ヲ造リ其管轄廳ニ差出スヘシ尤モ一匁以下ノ分ハ平常其明細簿ニ記シ置キ臨時取調ノ用ニ供ス可シ
但管轄廳ハ其一通ヲ内務省ニ進達スヘシ

第十一條 醫師病院一般藥舖ニ於テハ每半年必スシモ前條明細表ヲ差出スヲ要セスト雖也平常其明細簿ヲ簿記シ置キ臨時取調ノ用ニ供スヘシ

第十二條 藥用阿片ヲ製造セント欲スル者ハ罌粟ノ種類及培養採收製造ノ方法ヲ記シ管轄廳ヲ經由シテ内務省ノ免許鑑札ヲ受クヘシ

第十三條 阿片製造人ハ其製造シタル阿片ノ量目ヲ記シ署名調印シタル願書ヲ以テ地方廳ヲ經由シ内務省ノ買上ケヲ願フヘシ右買上ケヲ受クルノ外決シテ内外人民ニ販賣スルヲ許サス

但司藥場ニ於テ其品位藥用ニ適セサル者トスルハ地方廳ヨリ其旨製造人ニ通知シ其阿片ハ其廳ニ預リ置クヘシ

第十四條 阿片買上ケ及ヒ拂下ケノ代價ハ歲ノ豐凶及ヒ外國一般ノ相場等ニ因テ高低アルヘシト雖也其品位ニ應シテ價格ヲ定ムルハ該藥主用ノ性分即チ「モルヒ子」ノ多少ニ因ルヘシ

第十五條 内務省ニ買上ケ及ヒ拂下クル所ノ阿片ハ百分中ニ「モルヒ子」六分以上十一分ニ至ルマテヲ含有スルモノニ限ル可シ

第十六條 此規則ニ違反スル者ハ其犯情ニ從ヒ阿片賣買若クハ製造ヲ禁シ其所有ノ阿片ヲ沒收シ百五十圓ヨリ五百圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ

◎第四章 火藥取扱規則

○明治十七年十二月二十七日太政官第三拾壹號布告

火藥取締規則別冊ノ通制定ス

但従前ノ成規中此規則ニ矛盾スルモノハ總テ廢止ス

右奉 勅旨布告候事

第一章 總則

第一條 凡火藥劇發火藥（棉火藥、ナイトログリセリン、ダイナマイト、雷汞、其他劇發質ノ物品）ハ人民ニ於テ製造スルヲ禁ス但烟火マツチノ類ハ此限ニ在ラス

第二條 火藥類（火藥劇發火藥ヲ云フ）ノ賣買營業ヲ爲サントスル者ハ管轄廳（東京府ハ警視廳）ニ願出免許鑑札ヲ受ク可シ但營業者ハ一管内ニ十五人以内トス

第三條 火藥類ハ營業者ニ限り陸軍海軍兩省ヨリ其貯藏品ヲ拂下ク可キモノトス

第四條 管轄廳（東京府ハ警視廳）ニ於テ火藥類ノ檢査ヲ必要ト認ムル時ハ營業者メルト否トヲ問ハス警察官ヲシテ之ヲ檢査セシムルコトアル可シ

第五條 戰時若クハ事變ニ際シテハ陸軍卿海軍卿ハ火藥類ノ拂下ケヲ停止シ内務卿ハ其賣買運搬ヲ停止スルコトアル可シ

第六條 火藥類ハ官許ヲ得ルニ非サレハ日出前日没後ニ於テ賣買運搬其他荷造等ヲ爲ス可

カラス

第二章 賣買

第七條 營業者ハ毎月買受ケタル火藥類ノ種類數量ヲ記シ（證書アレハ之ヲ添ヘ）翌月十日迄ニ所轄警察署ニ届出可シ

第八條 營業者ニ非スシテ所有ノ火藥類ヲ賣ラントスル者ハ營業者ニ之ヲ賣渡ス可シ營業者ハ其賣渡證書ヲ取り置ク取シ

第九條 營業者ハ銃砲用又ハ坑業土工烟火其他職業用ニ限り火藥類ヲ賣渡ス可キモノトス但十六歳未満若クハ白痴風癪ノ者ニハ賣渡スコトヲ許サス

第十條 火藥類ヲ買受ントスル時銃職若クハ烟火製造ノ免許ヲ得タル者ハ其免狀ヲ營業者ニ示シ銃砲用ノ爲メニスル者ハ所轄警察署ノ許可證ヲ受ケ之ヲ營業者ニ渡シ陸海軍軍人ノ射的用品ニ供スル者ハ其省ノ許可證ヲ受ケ之ヲ營業者ニ渡ス可シ但一回ニ左ノ數量ヲ超ルヲ許サス

小銃用

火藥

三百目

雷管

五百個

船舶設備銃砲用

大

一門ニ付

火藥 五十發分

導火管類

七十個

小 一挺ニ付

火藥 百發分

雷管

百五十個

烟火製造用

火藥

五貫目

坑業土工其他職業用ニ供スル火藥類ヲ買受ケントスル者ハ其旨趣及種類數量並ニ使用ノ場所ヲ記シ所轄警察署ノ許可證ヲ受ケ之ヲ營業者ニ渡ス可シ

第十一條 營業者ハ買受人ノ免狀ヲ檢シ細クハ許可證ヲ受取り火藥類ヲ賣渡ス可シ但第十條ノ數量ヲ超ルコトヲ許サス

第十二條 營業者ハ毎月火藥類買受人ノ住所姓名及其賣渡シタル種類數量年月日ヲ記シ證書アレハ之ヲ添ヘ一翌月十日迄ニ所轄警察署ニ届出可シ

第三章 貯藏

第十三條 火藥類ハ火藥三百目雷管導火管類五百個迄ハ安全ナル場所ニ之ヲ貯藏スルコト得テ

營業者ハ前項制限ノ外火藥拾貫目劇發火藥壹貫目雷管導火管類壹萬個迄烟火製造人ハ火藥五貫目劇發火藥五百目迄ハ管轄廳(東京府ハ警視廳)ノ許可ヲ受ケ倉庫ニ之ヲ貯藏スルコトヲ得其數量ヲ超ル時ハ火藥庫ノ外之ヲ貯藏スルコトヲ許サス火藥五百貫目以上劇發

火藥五拾貫目以上ハ火藥庫ト雖ヒ之ヲ貯藏スルコトヲ許サス

第十四條 火藥類ヲ一庫内ニ貯藏スル時ハ其種類毎ニ可燃質物ヲ以テ之ヲ區畫ス可シ

第十五條 火藥庫ヲ建設セントスル者ハ其位置并ニ建設ノ方法書及近傍ノ地圖ヲ添ヘ管轄廳(東京府ハ警視廳)ニ願出許可ヲ受ケ可シ

第十六條 火藥庫ハ皇居離宮ノ區域ヲ距ル十町以内ノ地ニ建設スルコトヲ許サス

第十七條 火藥庫ハ皇陵社寺公園家屋火ヲ取扱フ場所宅地國道縣道鐵道電信柱漁船ノ通スヘキ河湖及他ノ火藥庫境界トノ中間ニ五十間以上ノ距離ヲ有ツ可シ

第十八條 火藥庫ハ土藏又ハ煉瓦造ニシテ家根ハ輕量ノ不燃質物ヲ用ヒ内部ニハ鐵釘石瓦

チ露ハサス窓ニハ透明ノ硝子ヲ用フ可カラヌ又避雷針ヲ設ケ庫外ノ周圍ニ二間以上ヲ隔テ、高サ六尺以上ノ土提ヲ築キ其入口ニ火藥庫ト書シタル標木(曲尺六尺以上ニシテ五寸角以上ノモノ)ヲ建ツ可シ

第十九條 火藥庫ヨリ十四間以内ノ地ニ材本草秣其他燃質物ヲ蓄積ス可カラヌ又五十間以内ニ於テ火ヲ取扱フ建藏物ヲ設ケ若クハ瓦斯ノ傳送管ヲ施シ若クハ發火質ノ物品ヲ蓄積ス可カラヌ

第二十條 坑業土工其他多量ノ火藥類ヲ要スル爲メ其事業中假貯藏所ヲ設ケントスル者ハ第十七條ニ掲ケタル距離ヲ二倍シ第十五條ニ據リ管轄廳(東京府ハ警視廳)ニ願出許可ヲ受ク可シ但貯藏ノ數量ハ火藥貳百貫目劇發火藥三拾貫目ヲ起ルコトヲ許サス

第二十一條 烟火製造所ハ家屋若クハ火ヲ取扱フ場所ヨリ十間以上ノ距離ヲ有ツ可シ又五貫目以上ノ火藥類ヲ置ク可カラヌ

第四章 運搬

第二十二條 五貫目以上ノ火藥類ヲ運搬セントスル時ハ其種類數量運搬ノ日時場所及水陸

通路ノ名稱ヲ記シ所轄警察署ノ許可證ヲ受ケ之ヲ携帶シ運搬畢ラハ直ニ之ヲ返納ス可シ

若シ其警察署管轄外ノ地ニ運搬スル時ハ其地ノ警察署ニ之ヲ納ム可シ

第二十三條 五貫目以上ノ火藥類ヲ運搬スル時ハ鉄釘鉄輪ヲ用ヒサル木製銅製若クハ亞鉛製ノ器ニ入レ其外部ハ筵包若クハ繩卷ト爲シ毛布類ヲ以テ之ヲ覆ヒ赤地ニ火藥ノ二字ヲ

白書シタル小旗(陸路ニハ曲尺縱二尺横二尺五寸水路ノ小船ニハ曲尺縱三尺五寸横五尺)

ヲ建テ護送人ヲ附ス可シ但船積スル時ハ明治六年(八月)第貳百九拾貳號布告危害品船積法ニ從フ可シ

第二十四條 火藥類ヲ運搬スルニハ火氣ニ注意シ休泊ノ時ハ安全ナル場所ヲ撰ヒ看守人ヲ附ス可シ

第五章 罰則

第二十五條 私ニ火藥類ヲ製造シ若クハ販賣シタル者ハ軍用品ニアラスト雖モ刑法第百五十七條ヲ適用シ私ニ之ヲ所有シタル者ハ刑法第百六十條ヲ適用ス

第二十六條 刑法第百五十八條第百五十九條第百六十一條ハ前條ノ犯罪ニ關シタル者ニモ

亦之ヲ適用ス

第二十七條 私ニ火藥庫又ハ假貯藏所ヲ建設シタル者ハ拾圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十八條 第四條ノ検査ヲ拒ミ又ハ第五條ノ停止ヲ犯シテ賣買運搬シ第九條第十條第十

一條第十三條第十九條ニ違犯シ又ハ第二十條ノ制限ヲ超テ貯藏シ又ハ第二十一條ニ違犯

シタル者又ハ營業者賣買ヲ除クノ外火藥類ヲ讓受若クハ讓渡シタル者ハ貳圓以上五拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十九條 第六條第七條第八條第十二條第十四條第十八條第二十二條第二十三條第二十

四條ニ違犯シタル者ハ壹圓以上壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス

第三十條 營業者此規則ニ違犯シタル時ハ其情狀ニ因リ行政ノ處分ヲ以テ營業ヲ禁止シ又ハ停止スルヲ得

附 則

一 従前免許ヲ得タル火藥製造人ハ來ル明治十八年二月二十八日迄其營業ヲ差許シ又同日迄

ニ火藥製造器機及火藥類ノ現貯藏數量ヲ記シ管轄廳(東京府ハ警視廳)ニ届出ルニ於テ

ハ相當ノ代價ヲ以テ之ヲ買上ク可シ

一 従前免許ヲ得タル火藥免許商人ハ來ル明治十八年二月廿八日迄火藥賣買免許ヲ差許シ從

前免許ヲ得タル烟火製造所ハ右同日迄其製造ヲ差許ス又従前火藥類ヲ貯藏シタル者ハ來ル明治十八年一月三十一日迄其貯藏ヲ差許ス其日限ヲ過スルトキハ總テ此規則ニ從フヘ

◎第五章 爆發物取締罰則

○明治十七年十二月二十七日太政官第貳拾貳號布告

爆發物取締罰則別冊ノ通制定ス

右奉 勅旨布告候事

第一條 安治ヲ妨ケ又ハ人ノ身體財產ヲ害セントスルノ目的ヲ以テ爆發物ヲ使用シタル者及ヒ人ヲシテ之ヲ使用セシメタル者ハ死刑ニ處ス

第二條 前條ノ目的ヲ以テ爆發物ヲ使用セントスルノ際發覺シタル者ハ無期徒刑又ハ有期徒刑ニ處ス

第三條 第一條ノ目的ヲ以テ爆發物若クハ其使用ニ供ス可キ器具ヲ製造輸入所持シ又ハ注文ヲ爲シタル者ハ重懲役ニ處ス

第四條 第一條ノ罪ヲ犯サントシテ脅迫教唆煽動ニ止ル者及ヒ共謀ニ止マル者ハ重懲役ニ處ス

第五條 第一條ニ記載シタル犯罪者ノ爲メ情ヲ知テ爆發物若クハ其使用ニ供ス可キ器具ヲ製造輸入販賣譲與寄藏シ及ヒ其約束ヲ爲シタル者ハ重懲役ニ處ス

第六條 爆發物ヲ製造輸入所持シ又ハ注文ヲ爲シタル者第一條ニ記載シタル犯罪ノ目的ニアツサルコトヲ證明スルコト能ハサル時ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ貳拾圓以上貳百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第七條 爆發物ヲ發見シタル者ハ直ニ警察官吏ニ告知ス可シ違フ者ハ五圓以上五拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第八條 本則ニ記載シタル重罪犯アルヲ知シタル時ハ直ニ警察官吏若クハ危害ヲ被ムラントスル人ニ告知ス可シ違フ者ハ六月以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第九條 本則ニ記載シタル重罪ノ犯人ヲ藏匿シ若クハ隠避セシメ又ハ其罪證ヲ湮滅シタル者ハ正犯ノ刑ニ一等又ハ二等ヲ減ス

第十條 本則ニ記載シタル重罪ヲ犯シタル者ニハ刑法第八十條及ヒ第八十一條ノ例ヲ用ヒス但十六歳未満ニシテ是非ノ辨別ナキ者ハ刑法ニ從フ

第十一條 第一條ニ記載シタル犯罪ノ豫備陰謀ヲ爲シタル者ト雖モ未ダ其事ヲ行ハサル前ニ於テ官ニ自首シ因テ危害ヲ爲スニ至ラサル時ハ本刑ヲ免シ六月以上三年以下ノ監視ニ付ス第五條ニ記載シタル犯罪者モ亦同シ

◎第六章 火藥類鐵道運送條規

○明治十八年四月十日工部省第拾四號告示

明治五年(五月)第四百六號公布鐵道略則第十六條ニ依リ火藥類鐵道運送條規左ノ通相定ム但此條規ハ私設鐵道ニモ適用スルモノトス
右告示候事

第一條 火藥類ハ鐵道局ノ都合ヲ以テ之ヲ運送スルコトアルヘシ

第二條 火藥類ハ別仕立列車或ハ旅客車ヲ連續セサル普通ノ貨物列車ヲ以テ運送スヘシ但兵員乘車ノ時其攜帶スル火藥ハ此限ニアラス

第三條 火藥類ヲ運送スルノ賃金ハ百斤ニ付一哩金壹錢貳厘ト定ム但三千五百斤以下及二十哩以內ト雖モ猶本數本哩ニ當ル金額即チ金八圓四拾錢ヲ徵スヘシ

第四條 火藥類ヲ運送セントスル者ハ其名稱種類量數及送受人ノ氏名住所ヲ記載シタル書面ヲ四拾八時間以前ニ鐵道局ニ差出シ其承諾ノ證ヲ領受スヘシ其證ナキトキハ之ヲ運送セサルモノトス但非常急劇ノ際ハ此時間ノ限コアラテス

第五條 火藥類ノ受渡ヲ爲スハ鐵道局員ニ限ルヘシ且其時間ハ日出後日没前ニシテ鐵道局ニ於テ特ニ指定スル日時ヲ限ルヘシ

第六條 火藥類ノ受渡庫入荷揚荷積ヲ爲ストキハ其桶箱等ハ成ルヘク互ニ手渡ヲ爲シ決シテ地上ニ投下シ又ハ輾轉セシムヘカラス若シ輾轉セサルヲ得サルトキハ必ス草布木綿等ヲ以テ其經過スヘキ地上ヲ蔽フヘシ

第七條 火藥類ノ受渡庫入荷揚荷積ヲ爲ス者ハ鋼鐵或ハ釘ヲ附シタル靴類ヲ穿チ又ハ摺附木等ノ發火質アル器具ヲ携ヘ又ハ吸烟スルヲ許サス

第八條 藥火類ノ受渡庫入荷揚荷積ヲ始ムルトキハ之ヲ終ルマテ少時間ト雖モ猶豫スヘカラス又其事ニ預ラサル他人ノ其場ニ近クテ妨クヘシ

第九條 藥火類停車場若クハ鐵道ノ倉庫ニ到着シタルトキハ六時間以內ニ其受取方ヲ爲スヘシ此時間ヲ過クレハ一時間毎ニ一噸ニ付金貳圓ノ遲滯料ヲ徵スヘシ

第十條 鐵道局ハ藥火類ノ受渡庫入運送荷揚荷積ノ爲メ藥火類ニ生シタル損害并ニ之ニ原因シテ他ノ及ヒタル損害ハ勿論其他何等ノ事アルモ其責ニ任セサルモノトス但鐵道局員ノ過失ニ因テ起ルモノハ此限ニアラス

第十一條 藥火類ヲ運送シ委託スル者ハ前ニ列記シタル條規ヲ承認シタル證トシテ鐵道局ヨリ下付シタル條規寫書ノ端末ニ署名捺印スヘシ

第七章 傳染病豫防規則

○明治十三年七月九日太政官第三拾四號布告

總則

第一條 此規則ニ稱スル傳染病トハ虎刺刺、腸室扶私、赤痢、實布埤利亞、發疹室扶私及痘瘡ノ六病ヲ云フ

但六病ノ外流行病アリテ其勢盛ナルノ兆アルハ地方長官ハ内務省ニ具申シ豫防法ヲ施行スヘシ

第二條 醫師ノ傳染病ヲ診斷スル者ハ運クニ二十四時間コ之ヲ患者所在ノ町村戸長（固ト衛生委員トアリシヲ明治十八年八月十二日太政官第貳拾四號布告ヲ以テ戸長ニ改正ス以下戸長トアルモ人皆然リ）ニ通知スルヲ要スハ速ニ之ヲ郡區長及ヒ最寄警察署ニ通知シ郡區長ハ速ニ之ヲ地方廳（東京府下ハ府廳及ヒ警視本署）ニ届出ツヘシ

但土地ノ便宜ニ依リ醫師ヨリ直チニ警察署ニ届出警察署ヨリ戸長ニ通知スルモ妨ケナシ

○明治十三年十二月十四日太政官第五拾四號布告ヲ以テ左ノ一項ヲ增加ス
地方廳ハ一週間毎ニ新舊患者及治癒死亡ノ數ヲ内務省ニ申報スヘシ

第三條 地方長官ハ管内ニ傳染病流行ノ兆アリト認ムルハ其性狀ヲ記シテ速カニ之ヲ内務省ニ申報シ且ツ其管内及ヒ隣接若クハ船舶交通ノ府縣最寄兵營其地碇泊ノ軍艦等ニ報告スヘシ

但（明治十三年十二月十四日太政官第五拾四號布告ヲ以テ但書ヲ削除ス故ニ略ス）

第四條 （明治十三年十二月十四日太政官第五拾四號布告ヲ以テ削除ス故ニ略ス）

第五條 諸官廳、兵營、軍艦、監獄及ヒ官立ノ學校、病院、製作所等ニ於テ傳染病者アルハ其

主長ハ該地方官ト協議シ此規則ニ從ヒ豫防法ヲ施行スヘシ

第六條 虎刺刺、赤痢、發疹室扶私、痘瘡ノ流行ニ際シ地方長官ニ於テ豫防ノ爲メ避病院ヲ要スヘキト認ムルハ内務省ニ具狀シテ之ヲ設クルヲ得

但人民協議ヲ以テ避病院ヲ設クルハ地方長官ノ許可ヲ請フ可シ

第七條 醫師並ニ戸長ニ於テ傳染病者ノ看護行届カス若クハ病毒ノ傳播ヲ防キ難シト認ムル者ハ避病院ニ入ラシム可シ

第八條 批リ官吏ハ傳染病者アル家ニハ其姓名ヲ書シテ門戸ニ貼付シ要用ノ外他人ト交通

ヲ絶タシムヘシ
但患者治癒死亡又ハ避病院ニ入りタル後チ相當ノ消毒法チ行ハサルノ間ハ仍ホ本條ヲ遵守セシムヘシ

虎列刺病

第九條 虎列刺病者ノ排泄物及ヒ汚穢物ハ其運搬夫ヲ設ク一定ノ場所ニ運輸シ燒棄若クハ埋却セシム可シ

第十條 虎列刺病者ノ死屍ハ其埋葬地ニ區劃シ濫リニ雜葬セシムヘカラス且他ニ改葬スルヲ許サス

但火葬ハ尋常ノ燒場ニ於テシ其遺骨ハ改葬スルモ妨ケナシ

第十一條 虎列刺病者ニ用ヒタル既具衣服具及ヒ病室船室等ハ消毒法チ行フニアラサレハ再ヒ之ヲ用ヒ又ハ受授賣買スルヲ許サス

第十二條 虎列刺流行ノ際ニハ井泉、河流、水道及ヒ厠圍、芥溜、下水、溝渠等總テ病毒萌生ノ因トナルヘキ場所ニ注意シ掃除清潔ノ法ヲ設クヘシ

第十三條 虎列刺流行スル時ハ船舶交通ノ地方ニ於テ流行地ヨリ來ル所ノ船舶ヲ検査シ患者若クハ死者アルキハ此規則ニ從フテ處分スヘシ

第十四條 虎列刺流行ノ勢猛烈ナルキハ地方長官ハ内務卿ニ具狀シ其許可ヲ得テ醫師衛生官吏警察官吏郡區町村吏等ヨリ適當ノ人員ヲ撰ヒ檢疫委員ト爲シ豫防消毒ノ事務ヲ擔任セシムルヲ得

○明治十五年九月一日太政官第四拾八號布告ヲ以テ左ノ一項ヲ追加ス
此場合ニ於テハ醫師タル者吐瀉ノ二症ヲ兼備スル病ヲ診斷スルキハ總テ檢疫委員ニ届出ツヘシ但本項施行ノ終始ハ地方廳ヨリ之ヲ管内ニ告示シ内務省ニ申報スヘシ

第十五條 前條ノ場合ニ於テハ地方長官ハ祭禮劇場等人民ノ群集ヲ差止ルヲ得

○明治十四年十月七日太政官第五拾八號布告ヲ以テ左ノ一項ヲ追加ス

虎列刺已ニ市街村落ノ全部若クハ一部分ニ於テ蔓延ノ兆候ヲ顯ハシ其他ノ部分ニ及ボサル機遮斷シ得ヘキモノト見認ムルキハ地方官ヨリ内務卿ニ稟議シ交通ヲ絶タシムルノ處分ヲ爲スヲ得

但要用ノ者ハ掛官吏檢察ノ上交通ヲ許スヲ得

腸窒扶私病

第十六條 腸窒扶私病流行ノ際ハ第九條第十一條及ヒ第十二條ヲ適用スヘシ

赤痢病

第十七條 赤痢病流行ノ際ハ第九條第十一條及ヒ第十二條ヲ適用スヘシ

實布埴里亞病

第十八條 實布埴里亞病流行ノ際ハ第十一條ヲ適用シ患者ノ痰唾及ヒ之ニ汚穢スル物ハ燒

棄若シハ埋却セシムヘシ

發疹窒扶私病

第十九條(明治十三年十二月十四日太政官第五拾四號布告ヲ以テ左ノ如ク改正ス)

發疹窒扶私病者アリトキハ第十條第十一條ヲ適用シ其流行ノ際ニハ第十二條第十三條第十四條及ヒ第十五條ヲ適用スヘシ

第二十條 發疹窒扶私病者若クハ其死屍ヲ糞セムル車輿等ハ毎回消毒法ヲ行フコトヲサレ

ハ他用ニ供スヘカラス

痘瘡病

第二十一條(明治十五年九月一日太政官第四拾八號布告ヲ以テ左ノ如ク改正ス)

痘瘡病者アルキハ第十條第十一條及ヒ第二十條ヲ適用シ患者ニ未痘者ヲ接近セシムヘカ
ラス其流行ノ際ニハ第十二條ヲ適用スヘシ

罰則

第二十二條 醫師戶長此ノ規則ニ違背シタルキハ五拾圓以内ノ罰金ニ處ス

第二十三條 官吏其管掌ノ事務ニ於テ此規則ニ違背シタルキハ百圓以内ノ罰金ニ處ス

第二十四條 人民此規則ニ違背シタルキハ壹圓五拾錢以内ノ科料ニ處ス

○明治十五年八月二十六日太政官第四拾七號布告

明治十三年(七月)第三拾四號布告傳染病豫防規則第八條中病名票貼付ノ備當分之ヲ施行セ

○明治十六年二月十四日太政官第八號達

明治十四年(四月)第三拾號達左ノ通改正候條此旨相達候事

傳染病ニ罹リタル者身元赤貧ニシテ資力ナキハ本籍寄留旅行ヲ問ハス其費ハ總テ發病地ノ地方稅中衛生費ヲ以テ支辨スヘシ

但流行ノ勢盛ナルハ時宜ニ依リ官費支給スルコアルヘシ

◎第八章 醫師免許規則

○明治十六年十月廿三日太政官第三拾五號布告

醫師免許規則別冊ノ通制定シ明治十七年一月一日ヨリ施行ス

但明治十五年(二月)第四號布達同年(八月)第三拾九號布告ハ此規則施行ノ日ヨリ廢止ス

第一條 醫師ハ醫術開業試驗ヲ受ケ内務卿ヨリ開業免狀ヲ得タル者トス

但此規則施行以前ニ於テ受ケタル醫術開業ノ証ハ仍ホ其効アリトス

第二條 開業免狀ヲ得ントスル者ハ試驗及第證書ヲ以テ地方廳ヲ經由シテ内務省ニ願出ツヘシ

第三條 官立及府縣立學校ノ卒業證書ヲ得タル者證書ヲ以テ開業免狀ヲ得ンコト願出ツル

キハ内務卿ハ試驗ヲ要セスシテ免狀ヲ授與スルコアルヘシ

第四條 外國ノ大學醫學部若クハ醫學校ニ於テ卒業シタル者或ハ外國ニ於テ醫術開業免許

ヲ得タル者其卒業證書又ハ開業證書ヲ以テ開業免狀ヲ得ンコト願出ツルキハ内務卿ハ其

證書ヲ審査シ試驗ヲ要セスシテ免狀ヲ授與スルコアルヘシ

第五條 醫師ニ乏キ地ニ於テハ府知事縣令ノ其狀ニヨリ内務卿ハ醫術開業試驗ヲ經サル者

ト雖モ其履歷ニヨリ假開業免狀ヲ授與スルコアル可シ

第六條 開業免狀ヲ得ル者ハ免狀下付ノ節手数料金三圓ヲ納ムヘシ

第七條 開業免狀ヲ得タル者ノ氏名本籍ハ内務省ノ醫籍ニ登錄シ時々之ヲ公告スヘシ

第八條 開業免狀ヲ毀損亡失シ又ハ氏名本籍ノ變換ニ由リ免狀ノ書換ヲ願フ者ハ其事由ヲ

記シ地方廳ヲ經由シテ内務省ニ願出ヘシ

第九條 開業免狀ノ書換ヲ願フ者ハ免狀下付ノ節手数料金壹圓ヲ納ムヘシ

第十條 醫師廢業又ハ死亡シタルキハ地方廳ヲ經由シテ其開業免狀ヲ内務省ニ返納スヘシ

第十一條 醫師其業ニ關シ犯罪若クハ不正入行爲アルキハ中央衛生會ノ審議ヲ經内務卿ニ

於テ其業ヲ停止若クハ禁止スルコトアルヘシ

但其事開業免狀ヲ得ルノ前ニ在リト雖モ本條ニ準シ處分スルコトアルヘシ

第十二條 前ニ據リ醫業禁止ノ處分ヲ受ケタル者アルモハ地方廳ニ於テ直ニ其開業免狀ヲ取上ケ之ヲ內務省ニ返納ス可シ其停止ノ處分ニ係ルモノハ幾年月日間停止シタル旨ヲ開業免狀ニ裏書シ廳印ヲ捺シテ之ヲ本人ニ下付スヘシ

第十三條 內務卿ハ醫業禁止ノ處分ヲ爲シタル後ト雖モ本人ノ行狀ヲ勘査シ中央衛生會ノ審議ヲ經特ニ其禁止ヲ解クコトアル可シ

◎第九章 醫術開業試驗規則

○明治十六年十月二十三日太政官第三拾四號布達

今般第三拾五號ヲ以テ醫師免許規則布告相成候ニ付醫術開業試驗規則別冊ノ通り相定メ明治十七年一月一日ヨリ施行ス

但明治十二年(二月)內務省甲第三號布達ハ同日ヨリ廢止ス

第一條 醫術ヲ開業セントスル者ハ此規則ニ據リ試驗ヲ受クヘシ

第二條 內務卿ハ毎年二回醫術開業試驗ヲ舉行スヘシ但試驗ヲ舉行スヘキ地方及ヒ試驗期

日ハ六ヶ月前之ヲ內務卿ヨリ告示ス可シ

第三條 內務卿ハ醫術開業試驗ヲ舉行スル毎ニ官立及ヒ府縣立醫學校病院ニ從事スル者又ハ地方ニ於テ學術名望アル醫師理化學者等ヲ撰ヒ試驗委員ヲ命ス可シ

但齒科醫術開業試驗ニ於テハ齒科醫壹名ヲ試驗委員ニ加フルコトアル可シ

第四條 內務卿ハ主事者ヲ派遣シ試驗一切ノ事ヲ監督整理セシムヘシ

第五條 醫術開業試驗ハ之ヲ二期ニ分テ前期試驗後期試驗トス前後二期ノ試驗ヲ同時ニ受クルコト得ス

但齒科醫術開業試驗ハ全科一時ニ受クルモノトス

第六條 試驗科目ヲ定ムルコト左ノ如シ

前期試驗科目

- 第一 物理學 第二 化學 第三 解剖學 第四 生理學 後期試驗科目
- 第一 外科學 第二 內科學 第三 藥物學 第四 眼科學 第五 座科學 第六 臨

床實驗

第七條 齒科試驗科目ヲ定ムルノ如シ

第一 齒科解剖及生理 第二 齒科病理及治術 第三 齒科用藥品 第四 齒科用器械

第五 實地試驗

第八條 前期試驗ハ一ヶ年半以上後期試験ハ更ニ一ヶ年半以上修學セシ者ニ非レハ之ヲ受クルコトヲ得ス

○明治十七年一月三十一日太政官第貳號布達ヲ以テ本條ヘ左ノ通り但書ヲ追加ス

但齒科醫術開業試験ハ二ヶ年以上修學セシ者ニ非レハ之ヲ受クルコトヲ得ス

第九條 前期試験ヲ受ケントスル者ハ其願書ニ修學ノ履歷書ヲ副ヘ後期試験ヲ受ケントスル者ハ其願書ニ履歷及前期試験及第ノ證書ヲ副ヘ毎年六月十二月中地方廳ニ差出スヘシ
地方廳ハ翌月五日迄ニ其書類ヲ取纏メ内務省ニ進達スルモノトス

但履歷書ニハ其師若シハ開業醫師二名以上ノ保証アルヲ要ス

第十條 地方廳ニ於テ試験出願者中醫事ニ關シ犯罪若シハ不正ノ行爲アリト認ムル者アル

其ハ之ヲ内務省ヘ具狀スヘシ内務省ニ於テハ中央衛生會ノ審議ヲ經其情狀ニ因リ期限ヲ定メ試験ヲ許サハルコトアルヘシ

第十一條 試験問題ハ試験主事者試験委員協議ノ上之ヲ撰定シ試験場ニ臨ミ受験人ヲシテ筆答セシムヘシ

但時宜ニヨリ口答セシムルコトアルヘシ

第十二條 試験主事者ハ試験終ルノ後試験委員ト與ニ其成績ヲ評定シ及第シタル者ニハ直ニ及第證書ヲ與フヘシ

但及第證書ニハ試験主事者試験委員連署スヘシ

第十三條 試験ニ落第シタル者ハ半年ヲ終ルニ非レハ再試験ヲ請フコトヲ得ス

第十四條 醫術開業試験ヲ受クル者ハ試験開場ノ前日迄ニ左ノ手数料ヲ納ムヘシ

前期試験手数料 金三圓 後期試験手数料 金五圓 齒科試験手数料

金五圓

第十五條 受験中疾病及其他ノ事故アリテ試験ヲ中止シ又ハ落第シタル者ト雖モ前條ノ手

敷料ヲ返付セス

○明治十六年十一月十七日内務省乙第四拾六號達

本年第三拾五號布告醫師免許規則第三條ニ據リ試験ヲ要セス免狀ヲ授與スヘキ者ハ東京大學及ヒ左ノ條件ヲ具ヘ當省ノ特許ヲ得タル醫學校ノ卒業證書ヲ有スル者ニ限リ候條右ニ適應スル醫學校有之候向ハ其校則教則及ヒ教員履歷書生徒員數其他學校ニ關スル一切ノ書類取纏メ豫メ當省へ稟議スヘシ此旨相達候事

但明治十五年太政官第四條ノ布達ニ依リ既ニ特許ヲ得タル向ハ此際更ニ稟議ニ及ハス

一三名以上ノ醫學士歐米ノ大學校ニ於テ卒業シタルモノ等（其履歷ニヨリ本條ニ準スルアルヘシ）ヲ以テ教諭ニ充ツルモノ

一生徒ノ員數ニ相當セル助教ヲ置クモノ

一四年以上ノ學期ヲ定メ教則並ニ試験法ノ完備スルモノ

一生徒ノ實地演習ヲ爲スヘキ病院アルモノ

一器械標本ノ具備スルモノ

○明治十七年三月十九日内務省乙第四拾七號達

明治十六年（十月）第三拾五號布告醫師免許規則第六條及ヒ第九條之手數料ハ每一ヶ月取纏

メ明細帳相添當省へ可相納此旨相達候事

○明治十五年八月廿一日司法省丁第四拾貳號達

本年八月第三拾九號公布ニ依リ今般内務卿ヨリ照會ノ趣モ有之候ニ付テハ自今醫師タル者醫業ニ關スル犯罪有之處斷致シ候節ハ其都度該宣告文謄本相添へ内務省へ通知候様可致此旨相達候事

○明治十六年十二月二十八日司法省丁第三拾九號達

本年第三拾五號布告ヲ以テ明治十五年第三拾九號布告被廢候ニ付同年當省丁第四拾貳號達ハ自然消滅ノ處今般内務卿ヨリ更ニ照會ノ趣モ有之候條同省へ通牒方從前ノ通り可取計此旨相達候事

◎第十章 中央衛生會職制

○明治十二年十二月廿七日太政官第五拾四號達

中央衛生會職制及ヒ事務章程別冊ノ通相定候條此旨相達候事
 一本會ハ左ノ人員ヲ以テ之ヲ編成ス（明治十三年四月十日第貳拾七號達ヲ以テ本項ヲ左ノ如ク改正ス）

- 會長 一名
 - 副會長 一名
 - 委員 十一名
 - 醫員 十一名
 - 化學家 二名
 - 工學家 二名
 - 衛生局長 一名
 - 內務書記官 一名
 - 警保局長 一名
- 此項本ト警視官一名トアリシヲ明治十四年太政官第九拾號達ヲ以テ警保局長ト定ム
- 以上十八名ヲ以テ定員トス

- 一 會長及委員ハ特選ニシテ副會長ハ委員中ヨリ投票ヲ以テ之ヲ選定ス
 - 一 會長ハ本會議事ノ章程及ヒ附則ニ從ヒ議事ヲ整頓シ其議定セルモノヲ內務卿ニ具申ス
 - 一 副會長ハ會長缺席ノ時總テ其事務ヲ代理ス
 - 一 委員ハ議事章程及ヒ附則ニ從ヒ諸議案ヲ議スルヲ掌ル
 - 一 書記數員ヲ置キ議事ヲ筆記シ及ヒ文案計算翻譯等ノ事ヲ掌ラシム
- 中央衛生會事務章程

- 第一條 中央衛生會ハ內務卿之ヲ管理シ全國衛生事務ニ關スル諸件ヲ審議スル所トス
- 第二條 布告公達ノ衛生ニ關スルモノハ其發行前官府ノ諮詢ヲ受ケ之ヲ議スルヲ得ヘシ
- 第三條 本會ハ衛生各般ノ事項ヲ地方官ニ尋問シ或ハ臨時會員ヲ各地方ニ派遣シテ檢察セシムルヲ得
- 第四條 本會ニ於テ議定セル事件ハ之ヲ內務卿ニ開申ス
- 第五條 通常會ハ少クモ毎月一回之ヲ開クモノトス臨時會ハ內務卿或ハ會長ノ指圖ニ由テ之ヲ開キ又ハ委員二名以上ノ請求ニ依リ之ヲ開クヲ得

第六條 本會ハ委員半數以上出席スルニ非ラサレハ當日ノ會議ヲ開クコトヲ得ス

第七條 委員二名以上同意ノ所見アレハ之ヲ會議ニ付シ其可ト決スルモノハ本會ノ意見トシテ内務卿ニ建議スルコトヲ得

第八條 本會議決ノ事項中公告スヘキモノハ本會ノ名ヲ以テ之ヲ一般ニ公告ス

第九條 本會議事章程及附則ハ内務卿ノ認可ヲ得テ施行スヘシ

◎第十一章 地方衛生會規則

○明治十二年十二月廿七日太政官第五拾五號達

今般地方衛生會規則左ノ通相定候條此旨相達候事

第一條 本會ハ地方衛生ノ全體ヲ視察シ人民ノ健康ヲ保持増進スルノ目的ニシテ府知事縣令ヲ輔翼スルカ爲メ設立スルモノトス

第二條 本會ハ左ノ人員ヲ以テ之ヲ編成ス

但地方ノ實況ニヨリ本條定限ノ外別ニ會員ヲ要スルキハ内務卿ニ具狀シテ之ヲ増置スルコトヲ得（此但書ハ明治十三年二月十八日太政官第六拾貳號達ヲ以テ追加シタル者コ

保ル也）

醫師三名乃至五名

府縣會議員三名

公立病院院長

公立病院藥局長

衛生課長

警察官一名

第三條 本會ハ府知事縣令ノ管理ニ屬シ其委員ハ知事令之ヲ命ス

但醫師ハ府縣會議員ヲシテ管内ノ開業醫師ヲ公撰セシメ府縣會ヨリ出ス所ノ委員ハ其府縣會ニ於テ之ヲ公撰セシム

第四條 會長ハ府知事縣令之ニ任シ副會長ハ委員中ヨリ投票ヲ以テ之ヲ撰定ス

第五條 公撰員ノ在任ハ滿ニシテ年トナシ滿期毎ニ之ヲ改撰ス

但前任ノ者ヲ再撰スルコトヲ得

第六條 委員ノ外書記一名若クハ二名ヲ命シ本會ノ雜務ヲ處辨セシム

第七條 委員ハ俸給ナシ但開會ノ地ヲ拒ル三里以外ニ住スルモノハ相當ノ旅費ヲ給シ又非職無給ノ者ニハ相當ノ手當ヲ給スルヲ得

第八條 本會ハ少ナクモ毎月一回之ヲ開クモノトス

但臨時又ハ至急ヲ要スル事件アル時ハ會長ノ投集ニ應ジ以テ之ヲ開キ又委員半數以上ノ請求ニ因テ之ヲ開クヲ得

第九條 本會ニ於テ議定スヘキ事件左ノ如シ

一 衛生上ニ關スル布告布達等ヲ該地方ニ實施スルノ方法

二 府縣ニ於テ發行スヘキ衛生上ニ關スル布達ノ草案

三 府知事縣令ヨリ發セル議案并ニ中央衛生會內務省衛生局及郡區町村衛生掛ノ尋問ニ係ル事項

第十條 本會ハ各部區役所ヨリ府縣廳へ上申セル衛生上ノ諸報告等ヲ檢察スヘシ

第十一條 本會ハ地方ニ實施スヘキ衛生事項ニ就キ其考察ヲ府知事縣令ニ建議スルヲ得

第十二條 本會ハ該地方ノ衛生上ニ關スル實況ヲ檢察スルカ爲メ擔當吏員ノ派出ヲ府知事縣令ニ建議スルヲ得

第十三條 本會ノ議事筆記ハ時々之ヲ內務省ニ報告スヘシ

◎第十二章 種痘施術心得書

○明治十八年三月二十四日內務省甲第九號達

明治十三年(九月)內務省乙第三拾六號達傳染病豫防心得書附錄トシテ種痘施術心得書左ノ通追加候條此旨相達候事

種痘術ヲ施ス者ハ種痘ノ適否接種ノ方法痘苗採收及貯蓄ノ法善感ノ鑑別種痘ノ注意等ヲ詳知セサル可カラス其要左ノ如シ

第一 種痘ノ適否

第一條 種痘ハ左ニ掲グル者ニハ施サ、ルヲ可トス

第一 生後七十日ヲ經サル者

第二 種痘ノ爲ニ一時増進スヘキ病患アル者

第三 丹毒流行ノ土地ニ居住スル者

第四 蔓延性ノ皮膚病アル者

第五 熱性病ニ罹リ居ル者

第二條 種痘ニ適スル時期ハ春(三月四月五月)秋(九月十月十一月)二季ヲ以テ最良トス然

レハ四季共ニ之ヲ施シテ妨ナシ

第二 接種ノ方法

第三條 種痘ヲ施スハ上膊(三稜筋抵止ノ部位)ニ於テ各々三針至乃五針(受痘者ノ年齢體

質等ニ隨フ)トシ各針ノ距離曲尺五分以上ニシテ痘疱ノ暈輪互ニ密接セサル様注意スヘシ

第四條 施術ニ先テ針尖ヲ拭淨シ一時ニ數人ニ接種スルキハ一人毎ニ之ヲ拭淨スヘシ

第五條 良性ナル痘漿ヲ採リテ移種スルヲ確實ノ良法トスレバ此法ヲ行フコト能ハサルキハ

貯蓄ノ痘苗ニ成ルヘク新鮮ナル者ヲ撰ヒ用フヘシ但痂皮ハ用ヒサルヲ可トス

第三 痘苗採收及貯蓄ノ法

第六條 痘苗ハ左ニ掲グル者ヨリ採收スヘカラス

一 痘疱ノ成形過度及過大ノ者 發暈非常ニ大ナル者 痂縁又ハ暈部ニ水泡ヲ生スル者

痘疱非常ニ陸起シテ澄明ノ滲液ヲ漏出スル者 一種ノ疑フヘキ色例ヘハ紅藍色ヲ

呈セルカ如キ者

但此等ノ異常痘疱ノ近傍ニ在ル正痘モ亦同シ

二 痘漿ノ血液ヲ混セル者 泡ノ中央ニ在ル痘漿ノ腐敗ニ向ントスル者 痘疱ノ已ニ化

膿ニ傾キシ者 爬搔又ハ摩擦ノ爲ニ痘疱破潰セシ者

三 梅毒腺病及ヒ皮膚病ニ罹リ居ル者 營養不良ノ者

四 丹毒ヲ併發セル者 經過不整ニテ不善感ノ疑アル者(十三條ヲ參觀スヘシ)

五 天然痘ヲ經タル者 再三種ノ者

第七條 痘漿ヲ採ルハ通常接種後第八日(二十四時間ヲ以テ一日ト算ス下皆同シ)ヲ以テ佳

トスト雖時候ノ寒暖及各人ノ性質ニ隨ヒ第七日又ハ第九日ヲ以テ適度トスルコトアリ痘疱

ハ善感良性ノ者ニシテ其含包セル所ノ漿液ハ渾濁セス粘稠露滴ノ如クナルヘシ

第八條 痘漿ヲ採ルニハ痘疱ノ中心ヲ避テ泡面ヨリ斜ニ淺刺シ深ク刺シテ出血セシムヘカ

ラス

第九條 發痘一顆ナル者ノ痘疱ハ其漿液ヲ採ルヘカラス又數顆アルモ其一顆ハ傷クヘカラ

第十條 痘苗ヲ貯蓄シテ接種ノ用ニ供セントスルニハ硝子板間ニ貯ヘテ密封シ又ハ硝子製

毛細管ニ吸入セシメテ其兩端ヲ固封シ日光及寒熱ノ劇度ヲ避ケ貯フヘシ(痘苗ノ貯蓄法

甚宜シキヲ得ルルキハ五箇月間充分ノ効力アリ)

第四 善感不善感ノ鑑別

第十一條 種痘ノ善感ヲ鑑別スルニハ左ノ各項ヲ以テ要點ト爲ス

一 接種後第二日以内ニ成形ヲ始メシヤ否

二 痘疱常形ニシテ其大サ及硬サハ皮下皮上共ニ同一ナルヤ否

三 紅暈ハ常形ナルヤ否

四 經過整然トシテ其時期ヲ誤ラサルヤ否

五 第八日ニ至リテ微熱ヲ發スルヤ或ハ然ラサルモ其他ノ微候ヲ呈スルヤ否

六 赤皮ハ黯褐色又ハ黑色ニシテ其厚サ及硬サハ常度ナルヤ否

第十二條 種痘善感ノ微候ハ左ノ經過ニ就キテ知ルヘシ

接種後第一日第二日ノ間ハ他ノ刺傷ニ異ナルヲ無シ施術後針痕ノ周圍ニ淡紅色ノ小暈ヲ發スレトモ暫時ニシテ消失シ或ハ此暈ヲ見サルコトアリ

第三日ニハ針痕ノ部ニ小ナル紅點ヲ生シ試ニ指頭ヲ以テ之ニ觸ルレハ稍々隆起セルヲ覺

ズ(經過後慢ナル者ハ第四日第五日ニ至リ始テ此紅點ヲ生スルコト有リ)

第四日ニハ紅色ニシテ硬ク且ツ隆起セル圓形若クハ橢圓形ノ小結節ヲ生ス

第五日ニハ結節細小ノ水泡ト爲リ其周圍ニ狭キ紅暈ヲ見ル第六日ニハ水泡稍々増大シ其

邊緣隆起シテ泡ノ中央ニハ陷凹ヲ呈シ泡中ニハ稀薄透明ニシテ稍々帶藍色ナル液ヲ充實シ

周圍ノ紅暈稍々増大ス

第七日ニハ諸症益々増進ス

第八日ニハ痘疱全ク成形ス其大サハ豆大ニシテ周圍ハ焮腫シ微シク疼痛アリ泡中ノ液ハ倍々充實シ紅暈亦著シク増大ス此期ニ當リ(或ハ此期以前)微熱ヲ發シ或ハ全ク熱候ナク顔

面ハ蒼白色ヲ呈スルヲアリ又腋下ニ疼痛ヲ覺ヘ水脈腫起スルコト有リ
 第九日ニハ紅暈更ニ増大シ其色澤モ亦加ル
 第十日ニハ疱液化膿シテ白濁成ハ黃色濃稠液ト爲リ疱ノ中央稍々凸隆ス然レモ其形必ス扁圓ナリ

第十二日ニ至ルマテハ痘疱其形狀ヲ變スルコト無ク此日ヨリ收斂ヲ始メ疱ノ中央ヨリ邊緣ニ向ヒテ次第ニ乾固シ漸ク褐色ニ變シ周圍ノ紅暈モ亦漸ク消退ス

爾後黯褐色又ハ黑色ニシテ堅實ナル厚痂ヲ結ビ初ハ皮膚ニ緊着シテ容易ニ剝離セス結痂後八日乃至十日ニ至リ始テ剝脫ス其剝脫ノ後ニ遺セル痂痕ハ圓形又ハ橢圓形ニシテ淺キ凹窩ヲ爲シ其窩内ニハ更ニ數多ノ小凹點ヲ呈ス

但一回種痘セシ者ニ再三種シテ感染スルコトアルモ其痘類小ニシテ七八日間ニ全ク經過スルコト常トス

第十三條 種痘不善感ノ諸徴ハ左ノ如シ

一 接種後第二日以内ニ成形ヲ始メ常形ヲ達セズシテ直ニ膿ヲ蔓延セル炎症ヲ發シ皮下

ニ硬キヲ覺ヘスノ紅暈ハ不整形ナリ痘疱ハ速ク化膿シ其隆起ノ狀或ハ半球形或ハ圓錐形ト爲リ乾固スレハ黃色ニシテ鬆疎ナル痂皮ヲ結フ(時トシテ第二日後ニ成形ヲ始ムル者アレバ其經過總テ不整ナルヲ以テ自ラ善感ノ者ト區別スルヲ得ヘシ又不善感ノ者ト雖モ腋下ニ疼痛ヲ覺エ微熱ヲ發スルコト無キニ非ス)

二 接種後第一日ニ大ナル赤色ノ疱ヲ生シ速ク漿液ヲ充實シ上皮破レテ膿面ヲ呈シ或ハ瀰潤セル淡色ノ痂皮ト爲ルヲ見ル

三 紅暈速ク増大シテ膿起シ或ハ遂ニ潰瘍ニ陥ル

四 第八日ニ至リ膿疱相合シテ一々潰瘍ト爲リ或ハ一面ノ痂皮ヲ結ヒ其潰瘍又ハ痂皮ノ周圍ヲハ廣ク赤色ヲ呈ス

五 痂皮剝脫ノ後ニ遺セル痂痕ハ深クシテ不整形ヲ呈シ其底面平滑ナリ

第五 種痘ノ注意

第十四條 初種ノ不善感ハ痘苗へ不良ナルカ或ハ其人一時ノ不感性ヲ有セルコト因ル者ナルカ故更ニ三四週ノ後善良ナル痘苗ヲ撰ヒテ再ヒ接種スヘシ

第十五條 種痘ヲ施スニ當リテハ併發症ヲ防キ殊ニ天然痘流行ノ際ニハ接種後第八日ニ至ルマテハ嚴ニ其感染ヲ防禦スヘシ然レモ受痘者已ニ暗ニ天然痘ニ感染シ其潛伏期ニ於テ接種スルノ間々之アリ

第十六條 天然痘流行シ種痘ヲ猶豫ス可カラサル際ニハ第一條各項ニ掲クル者ト雖熱性病ヲ除クノ外ハ總テ接種スヘシ

第十七條 種痘中ハ寒冷ヲ避ケシメ成ルヘク清潔ノ空氣中ニ居ラシムヘシ平常慣習セル食物等ハ總テ禁忌スルニ及ハヌ又別ニ醫藥ヲ要セス

◎第十三章 種痘規則

○明治十八年十一月十一日太政官第三拾四號布告

種痘規則左ノ通制定シ明治十九年一月一日ヨリ施行ス

但明治九年內務省甲第八號及甲第拾六號布達ハ此規則施行ノ日ヨリ廢止ス

第一條 種痘ハ小兒出生後滿一年以内ニ之ヲ行フヘシ若シ不善感ナルトキハ更ニ一週年内ニ再三種ヲ行フヘシ

第二條 種痘ハ善感後ト雖モ五年乃至七年ニ再種ヲ行ヒ再種後五年乃至七年ニ三種ヲ行フヘシ

第三條 天然痘流行ノ兆アルトキハ第一條第二條ノ期限ニ拘ハラヌ排官吏ノ指定シタル期限内ニ種痘ヲ行フヘシ

第四條 種痘ヲ受クヘキ者病氣或ハ事故アリテ第一條第二條第三條ノ時期ニ種痘ヲ行フコト能ハサルトキ病氣ハ醫師ノ診斷書事故ハ親戚又ハ隣保ノ證印ヲ爲シタル證書ヲ副ヘシ長役場ニ届出ヘシ

第五條 種痘ヲ受ケシ者ハ醫師ノ指定シタル日ニ於テ檢診ヲ受ケ痘漿採取ヲ要スルトキハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第六條 種痘濟ノ者ハ醫師ヨリ種痘證ヲ受領シ戶長役場ニ届出ヘシ但天然痘ニ罹リタル者ハ醫師ヨリ其證ヲ受領シ本條ニ準スヘシ

第七條 十六歲未滿ノ者ノ尊長後見人若クハ雇主等ニシテ現ニ其幼者ヲ監督スル者ハ前各條ノ責ニ任スヘシ

貧院育兒院等へ入院ノ者ハ該主長ニ於テ前各條ノ責ニ任スヘシ

第八條 醫師ハ種痘ノ善感不善感ヲ檢診シ種痘證ヲ付與スヘシ

但天然痘ニ罹リタル者ヲ治療シタルトキハ本條ニ準シ其證ヲ付與スヘシ

第九條 第一條第二條條三條第四條第五條第六條及第八條ヲ犯シタル者ハ五錢以上五十錢

以下ノ科料ニ處ス

第十條 府知事縣令ハ種痘明細表ヲ製シ毎年一月七月ノ兩度内務卿ニ報告スヘシ

第十一條 此規則ヲ施行スル方法細則ハ府知事縣令ニ於テ便宜取設ケ内務卿ニ届出ヘシ

右奉 勅旨布告候事

醫藥衛生諸規則終

牛馬賣買規則

○明治五年十一月四日太政官第三百三拾號布告

牛馬賣買渡世之者免許稅ノ儀昨辛未十二月中大藏省ヨリ相達候處今般別紙規則書ノ通相定候條各管内其區々ノ取計無之様可致候事

牛馬賣買渡世之者免許稅ノ儀昨辛未十二月相達候處此度御詮議ノ次第モ有之別紙ノ通規則相定候條是迄相達候免許證札ハ引換相渡シ引上ケ候分ハ各府縣廳ニ於テ取纏メ燒捨其段可申立候其餘ハ規則ニ隨ヒ所置可致事

壬申十月

大藏省

規則

第一條 各管轄所ニ於テ其管下牛馬賣買渡世ノ者取調牛馬壹鼻綱ニ付免許證札壹枚相渡可申事

但シ壹鼻綱ハ牛馬共七匹ニ限り證札壹枚ヲ所持スル者旅行ノキハ七匹以内二枚ヲ所持スル者ハ十四匹ニ限ル可シ其餘准之可申事

牛馬賣買規則

第二條 (明治七年四月二十日太政官第四拾五號布告ヲ以テ左ノ通り改正ス)

一 免許鑑札新規願受候者六月以前ハ全年分七月以後ハ半年分納稅致シ廢業ノ者七月以後ハ全年分六月以前ハ半年分納稅可致事

第三條 免許鑑札萬一燒失流失盜難等ニテ失ヒ候モノ有之其段申出候ハ、事實取調鑑札相渡可申事

第四條 免許鑑札壹枚ニ付一ケ年稅金一圓上納可致事

○明治八年七月七日太政官第百拾五號布告ヲ以テ但書左ノ通り改正ス

但右稅金ハ毎年二月八月兩度ニ半額宛各管廳へ取立租稅寮へ上納可致尤モ新規免許ノ者ハ其都度半額直ニ取立上納可致事

第五條 免許鑑札燒印並ニ押切判ハ雛形ノ通り其管轄所ニテ製造致シ各縣人共へ相渡可申事

但鑑札相渡次第縣人其國郡町村名及ヒ名面詳細取調右鑑札印鑑相添へ當省へ可差出事

第六條 右條取締相立候上ハ向後無鑑札ニテ賣買不相成萬一無鑑札ニテ密々賣買候者有之

相顯ルニ於テハ牛馬共取上免許稅ノ十倍料料可申付事

但密賣買候者他ヨリ見出シ訴出ルニ於テハ其訴主へ取上ケ牛馬拂代金ノ十分ノ二毫美

トシテ被下候事

第七條 取上牛馬拂代並ニ料料金等ノ儀ハ第四條但書ニ照準上納可致事

第八條 此規則施行候ニ付諸入費ハ一ケ年賦職ノ上可申立事

○明治七年十二月三日太政官第百三拾壹號布告ヲ以テ左ノ通り第九條ヲ追加ス

第九條 一 免許鑑札ハ貸借決テ不相成候事

但免許鑑札借受ケ賣買スル者ハ稅則第六條密賣買ノ廉ニ照シ處分可致貸渡候者ハ免許稅五倍ノ料料可申付事

右ノ通規則相定候事

壬申十月

大藏省

牛馬賣買規則終

車稅規則

○明治八年二月廿日太政官第貳拾七號布告

明治六年(一月)第三拾壹號布告僕婢馬車人力車駕籠乘馬遊船諸稅則昨七年十二月三十一日限リ相廢ス尤モ遊船ノ儀ハ本年一月一日ヨリ昨七年(二月)第貳拾壹號布告舩漁船並ニ海川小廻船等船稅規則ニ照準收稅シ車類ノ儀ハ改テ車稅規則左ノ通り相定メ同月同日ヨリ施行候條此旨布告候事

第一則

- 一 馬車貳匹立以上 壹ケ年税金三圓
- 一 同壹匹立 壹ケ年税金貳圓
- 一 荷積馬車 壹ケ年税金壹圓
- 一 人力車貳人乘 壹ケ年税金貳圓
- 一 同 壹人乘 壹ケ年税金壹圓
- 一 牛車 壹ケ年税金壹圓

一 荷積大七八八車

壹ケ年税金壹圓

一 荷積中小車但大六以下

壹ケ年税金拾五錢

第二則

一新調ノ車ハ總テ其都度區戶長へ届出檢印可申受事

但從來所持ノ分ニテ檢印無之牛車荷積車等ハ更ニ檢印可申受事

第三則

一新調ノモノハ六月以前ハ全年分七月以後ハ半年分納稅シ破解ノ者ハ七月以後ハ全年分六月以前ハ半年分納稅候儀ト可相心得事

第四則

一 右税金上納ハ年々兩度ニ區別シ半年分宛區戶長へ取集メ其管轄處へ可相納事

但前半年分ハ其年七月三十一日限リ後半年分ハ翌年一月三十一日限リ其管轄處へ可相

納事

第五則

車稅規則

一 荷積車等ノ内耕作一途ニ相用候分ハ免稅タルヘキ事

第六則

一 諸車類無届ニテ營業スル歟又ハ使用スル者ハ其脫稅高ノ五倍科料タルヘキ事

○明治八年三月二十四日大藏省乙第四拾號達

本年第貳拾七號公布車稅規則中第五條荷積車ノ内耕作一途ニ相用候車類ハ車稅免除ノ檢印(免稅)ヲ爲取締一車毎ニ燒記候上免許致シ候儀ト可相心得此旨相達事

○明治十三年六月十一日大藏省乙第貳拾三號達

船(商船解漁船)等車へ修繕ヲ加へ爲メニ稅額ニ増減ヲ生シタルトハ新調ト認メ更ニ該期ヨリ相當ノ税金徵收候儀ト可相心得此旨相達候事

○明治十三年十月十五日大藏省乙第三拾五號達

自轉車ノ儀各地取扱方區々相成居候趣相聞候處右ハ素ヨリ人力車部中ノモノニ付キ同様課稅可致儀ニ候條爲心得此旨相達候事

車稅規則終

船舶廻漕諸規則

第一章

西洋形船舶檢査規則

○明治十七年十二月二十二日太政官第三拾號布告

西洋形船舶檢査規則別冊ノ通制定シ明治十八年七月一日ヨリ施行ス
右奉 勅旨布告候事 (農商務卿連帶)

(別冊)

西洋形船舶檢査規則

第一條 西洋形船舶(海軍艦船ヲ除ク)ハ此規則ニ遵ヒ檢査ヲ受クヘシ但登錄船免狀ヲ受有

スルニ及ハサハ風帆船ニ就限ニテス

第二條 船舶檢査所設置ノ場所ハ農商務卿之ヲ定ム

第三條 檢査所所在ノ地方ヲ航行スル船舶ノ檢査ハ其最寄檢査所ニ願出ヘシ

第四條 檢査所未設ノ地方ニ航行スル船舶ノ檢査ハ其最寄檢査所ノ地方廳ヲ經テ農商務省ニ願出ヘシ

船舶廻漕諸規則

第五條 登簿船免狀ヲ受有スルニ及ハサル汽船ノ検査ハ其船籍アル地方廳ニ願出ヘシ

第六條 検査官吏ハ農商務卿之ヲ命ス但第五條ノ汽船ニ係ル検査官吏ハ府知事縣令之ヲ命ス

第七條 検査官吏ニ於テ船舶ヲ検査シ航行ニ適當ト認ムルトキハ農商務省ヨリ左ノ事項ヲ記載シタル検査證書ヲ交付ス但地方廳ノ検査ニ係ル者ハ其廳ヨリ之ヲ交付ス

一 番號

一 船名

一 船主氏名

一 定艀場名

一 登簿噸數

一 端船其他必要ノ所屬品

一 航行ニ得ヘキ場所ノ定限

一 證書有効期限

一 汽船ニハ左ノ事項ヲ加フ

一 公稱馬力

一 汽機ノ種類

一 汽罐ノ種類

一 最大汽壓

一 旅客定員

第八條 検査官吏ニ於テ船舶ヲ検査シ航行ニ不適當ト認ムルトキハ其修理ヲ命シ或ハ出航ヲ差止ムヘシ

第九條 検査證書ノ効力ハ其船ノ現狀ニ依リ六箇月十二箇月ニ區別ス

第十條 検査證書ハ船内最モ見易キ場所ヘ掲ケ置クヘシ

第十壹條 検査證書ヲ亡失若クハ毀損シタルトキハ其理由ヲ詳記シ再渡ヲ願出ヘシ

第十貳條 船名船主及ヒ定艀場ヲ變更シタルトキハ農商務省又ハ地方廳ニ願出ヘシ

第十參條 船体若クハ汽機汽罐其他要部ノ修理若クハ變更ヲナシタルトキハ更ニ検査ヲ受

クヘシ

第拾四條 船舶航行ノ用ニ爲ササルニ至リタルトキ又ハ除籍トナリタルトキハ直ニ檢査證書ヲ農商務省又ハ地方廳ニ返納スヘシ

第拾五條 檢査證書ノ有効期限兵ト雖モ檢査官吏ニ於テ必要ト認ムル場合ニ於テハ臨檢スルコトアルヘシ

第拾六條 船舶ノ檢査ヲ受ケスシテ航行シ又ハ無効ノ檢査證書ヲ使用シ又ハ檢査證書ニ記載セル最大汽壓ヲ超過シ或ハ場所ノ定限ヲ越エテ航行シ又ハ檢査官吏ノ命ニ違背シ修繕セシメシテ出航シ若クハ差止ノ命ニ違背シテ出航シタル者ハ三十拾圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第拾七條 檢査證書ニ記載セル端船其他必要ノ所屬品ヲ具ヘス又ハ旅客定員ヲ超過シテ航行シ又ハ第拾三條ヲ犯シタル者ハ拾圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第拾八條 檢査官吏ノ臨檢ヲ拒ミ又ハ第拾條ヲ犯シタル者ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第拾九條 前三條ノ場合ニ於テ正當ノ事由アルモノハ其罪ヲ論セス

第貳拾條 第拾壹條第拾貳條第拾四條ヲ犯シタル者ハ壹圓以上壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス

第貳拾壹條 檢査細則及ヒ施行ノ手續ハ農商務卿之ヲ定ム

○第二章 西洋形商船海員雇入雇止規則

○明治十二年二月廿九日太政官第九號布告

第一條 西洋形商船(蒸氣船ハ拾噸以上風帆船ハ廿噸以上)ニ於テ海員ヲ雇入又ハ雇止ヲ爲ス時ハ總テ此規則ノ條款ニ準據スヘシ

第二條 雇入ノ時ハ其地ニ於ケル浦役場ニ於テ農商務省(本ト内務省ノ所明治十四年九月十三日第四拾三號布告ヲ以テ改正ス故ニ今其改正布告ニ從)ヨリ發スル海員雇入証書用紙ヲ以テ其定約書ヲ作り雇者被ヒ農商務省ト記ス以下倣之)雇者記名調印ノ上浦役人ノ公認ヲ受クヘシ

第三條 但定約書ハ正副二通ニ作り其本書ハ本船ニ保テ置キ副書ハ浦役場ニ止メ置クヘシ

以外ヲ約スルヲ得ヘシ

第四條 雇止ノ時雇者ハ其地ニ於ケル浦役場ニ於テ農商務省ヨリ發スル海員雇止証書用紙ヲ以テ雇止證書ヲ作り記名調印ノ上浦役人ノ公認ヲ受ケ之ヲ其被雇者ニ付與スヘシ

○明治十六年十一月廿日太政官第四拾五號布告

明治十二年(二月)第九號布告西洋形商船海員雇人雇止規則第四條ニ左ノ三項ヲ加ヘ明治十七年七月一日ヨリ施行ス

雇人又ハ雇止ノ時技術免狀ヲ所持スル者ハ浦役人ノ検査ニ供シ且其検査證書申受ヘシ

雇入又ハ雇止ノ公認ヲ受クルキハ手数料トシテ被雇者給金一月分ノ百分一ニ當ル金額ヲ

雇者被雇者ヨリ各其ノ半額ツ、浦役場ニ納ムヘシ

雇入定約書及ヒ雇止証書ヲ亡失毀損シ其寫ヲ乞フ者ハ貳名以上ノ保證人ト連署シテ當初

公認ヲ受ケケル浦役場ニ申出ヘシ浦役人ハ簿冊ニヨリ之ヲ製シ認印ヲ捺シテ交付スヘシ

第五條 雇止ハ雇入地ニ限り行フヘシ故ニ雇入地外ニ於テ滿期ニ至ルモ雇入地ニ歸着スル迄ハ雇入期限内ト看做スヲ得ヘシ

但雇者被雇者雙方ノ協意ヲ以テスル者ハ本條ノ限りニアラス

第六條 左ノ場合ニ於テハ雇入地外ト雇人期限内トニ拘ハラヌ雇者ヨリ雇止ヲ爲スヲ得ヘシ

一 疾病又ハ體質孱弱ノ故ヲ以テ本務ヲ執行シ能ハサル者

一 本船難破其他ノ災厄ニ罹リ進航シ能ハサル時

但以上二項ノ場合ニ於テハ雇者ノ費用ヲ以テ雇入地ニ歸還セシムヘシ

一 第十條ニ掲ケル違約一ヶ月内三回以上ニ至ル者

一 第十一條ヲ犯ス者

第七條 又左ノ場合ニ於テハ雇入地外ト雇入期限内トニ拘ハラヌ被雇者ヨリ其定約ヲ解除

ヲ得ヘシ

一 苛虐ノ取扱ヲ受ケシ時

一 飲食物又ハ給金ノ全額或ハ幾分ヲ給與セザレバ時

但右ノ場合ニ於テハ雇入地ニ歸着ノ旅費ヲ請求スルヲ得ヘシ

第八條 外國ニ於テ雇入若クハ雇止ヲ爲スルハ其國駐留ノ我國領事館ニ於テ農商務省ヨリ發スル川紙ヲ以テ定約書若クハ雇止證書ヲ依リ記名蓋印ノ上領事ノ公認ヲ受クヘシ

但定約書ハ正副二通ニ作り其本書ハ本館ニ保テ置キ副書ハ領事館ニ止メ置クヘシ

第九條 新クニ海員トナル者及ヒ此規則施行以前雇止ト爲リシ者ヲ除クノ外被雇者ハ必ス最後ノ雇止證書ヲ所持スヘシ又雇者ハ最後ノ雇止證書ヲ所持セサル者ハ雇入セザルカラス

第十條 船長ノ指圖ヲ背ク者許可ヲ得スシテ上陸シ又ハ許可ノ時限ヲ過キテ歸航スル者ハ

第十一條 ノ脱船者ニアラス本棧ヲ怠ル者喧嘩口論ヲ爲ス者酩酊スル者私ニ銃器刀鎗或

ハ酒類ヲ船中ニ貯フ者ハ毎回其給金三日分ヨリ多クササル類ヲ違科金トシテ雇主之ヲ收メ且ツ其銃器刀鎗或ハ酒類ヲ取上ルルヲ禁ヘシ

第十一條 船中ニ於テ徒黨ヲ謀ル者船長ヲ劫ス者脱船スル者(雇入期限内ニ逃亡スル者ヲ云フ)ニ其事情ニ因リ百日以内ノ懲役ニ處ス若シ船體船具ヲ毀傷シ又ハ載貨ヲ私用スル

者ハ其實價ヲ償ハサルノ外本條ニ據テ其罪ヲ科スヘシ

第十二條 海員ヲ虐使シ飲食物或ハ給金ノ全額又ハ幾分ヲ給與セサル者ハ其事情ニ因リ百

圓以内ノ罰金ヲ科シ其給與セサル金額ハ年六分ノ利子ヲ加ヘ償還セシムヘシ

第十三條 此規則中第十條第十一條第十二條ヲ除キ其他ノ諸條款ヲ犯ス者ハ其事情ニ因リ五拾圓以内ノ罰金ヲ科スヘシ

○明治十七年三月三十一日農商務省第九號達

客歲十二月第四拾五號布告ヲ以テ明治十二年第九號布告西洋形船海員雇入雇止規則第四條第三項追加相成候ニ就テハ右事務取扱手續左之通相定候條此旨相達候事

海員雇入雇止事務取扱手續

第一條 雇入ノ公認ヲ與フルニ際シ浦役人ハ左項ニ注意スヘシ

第一 船長、運轉手、機關手、技術免狀ノ有無ヲ推問スル

第二 被雇者ニ於テ最後ノ雇止證書ヲ所持スルヤ否ヲ推問スル

第三 被雇者ヲシテ雇入定約ノ旨趣ヲ了解シタルヤ否ヲ推問スル

第二條 浦役人ハ船長、運轉手、機關手、技術免狀ヲ檢査シ真正ナルト認ムルハ農商務省ヨリ發行シタル技術免狀檢査證書ニ該免狀ノ種類及船名、定緊港名等ヲ記シ之ヲ交付

スヘシ

第三條 浦役人ハ被雇者ヨリ最後雇止証書ヲ出サシメ其証書裏面ヘ何年月日何港ニ於テ更ニ何船ヘ雇入トナリタル旨ヲ記入シ且之ニ認印スヘシ但新ニ海員トナリ最後雇止証書所持セサルモノハ此限ニアラス

第四條 被雇者中定約ノ旨趣ヲ了解セサルモノアレハ浦役人コ於テ或ハ之ヲ讀聞セ或ハ解釋シテ充分了解セシムヘシ

第五條 雇入ノキハ勿論雇止ノキト雖モ其證書ノ寫ヲ浦役場ニ保存スヘシ且雇入雇止事務繁劇ノ場所ニ於テハ更ニ海員名簿ヲ備置キ雇者被雇者ノ住所、氏名、乗組船名等ヲ記入シ他日ノ参照ニ供スヘシ

第六條 雇止ノ公認ヲ爲スキハ前定約面ト相違ノ有無ヲ取糺シ若シ當初雇入ノ定約面ト相違ノ廉有之キハ船内日記簿其他ノ書類ニヨリ雇者ヨリ其事實ヲ証明セシメ海員名簿ニ其旨ヲ記入シ而シテ之カ公認ヲ與フヘシ

第七條 甲地浦役場ニ於テ雇入ノ公認ヲ爲シタルモノチ乙地浦役場ニ於テ雇止ノ公認ヲ爲

シタル時ハ郵便其他便宜ノ方法ヲ以テ甲地浦役場ヘ遅クモ一ヶ月以内ニ之ヲ通報スヘシ此場合ニ於テハ甲乙兩浦役場ニ於テハ其雇入証書ノ寫若クハ海員名簿ニ其事ヲ記入スヘシ

第八條 雇入雇止証書中被雇者年齢ハ必ズ生年月日ヲ記セシムヘシ

第九條 雇入雇止証書中書損アルキハ必ズ正誤セシメ浦役人之レコ認印スヘシ若シ書損甚シク字句不分明ナルトキハ更ニ新調セシムヘシ

第十條 雇入期限内脱船又ハ死者アリシコト届出タル時ハ雇入証書中事故摘要ノ部ヘ其事故ヲ記載シ尙ホ其証書ノ寫若クハ海員名簿ニ之ヲ記入スヘシ

第十一條 雇入證書ハ假令ヒ餘白アリト雖モ再度之ヲ使用スルヲ許サス故ニ其餘白ハ總テ斜線ヲ畫スヘシ

第十二條 雇入期限内雇者被雇者ヨリ雇止ノ公認ヲ請フモノアル時ハ規則ニ照シテ其事由ヲ證明シ之カ公認ヲ與フヘシ但正副雇入証書及ヒ海員名簿ニ其事由ヲ記入スヘシ

第十三條 雇入期限内ニ雇者變更スト雖モ更ニ雇入定約ヲ爲サシムルニ及ハス然レモ此場

合ニ於テハ滿期雇止ノ雇者變更ノ事由ヲ正副雇入証書若シハ海員名簿ニ記入スヘシ

◎第二章 船稅規則

○明治十六年四月十七日太政官第拾三號布告

第一章 鑑札 稅率 免稅

第一條 凡ソ船舶ハ此規則ニ依リ課稅スル者トス

第二條 船舶所有主ハ其船舶定繫場ヲ定メ定繫場所在ノ地方廳ニ願出檢査ヲ受ケ鑑札ヲ乞フヘシ

第三條 新規造船シタル者其造船場所在ノ府縣管内ニ定繫場ヲ定メサルハ該廳ニ願出檢査ヲ受ケ假鑑札ヲ乞ヒ定繫場ニ回漕ノ上其地方廳ニ願出本鑑札ト引換ヲ乞フヘシ

第四條 船體ヲ變更シ積量若クハ間敷ニ増減ヲ生スルハ其定繫場所在ノ地方廳ニ願出檢査ヲ受ケ鑑札ノ引換ヲ乞フヘシ

第五條 船舶ヲ賣買譲與シタル者ハ雙方連署ノ上買受讓受主ノ定ムル定繫場所在ノ地方廳ニ願出鑑札ノ引換ヲ乞フヘシ

第六條 船舶ノ稅率ハ左ノ如シ

西洋形蒸氣船 百噸ニ付一年金拾五圓

同 風帆船 同 金拾圓

日本形船積石五十石以上 百石ニ付同 金貳圓

同 積石五十石未満 自船梁 三間迄ハ一年金三拾錢
解漁船小廻船積石ニ長 至艦梁

但三間以上壹間ヲ加フル毎コ金拾五錢ヲ增加ス

遊船 長自船梁 三間迄ハ一年金五拾錢
至艦梁

但三間以上壹間ヲ加フル毎ニ金貳拾五錢ヲ增加ス

第七條 本鑑札又ハ假鑑札ハ航行若クハ回漕ノ時之ヲ本船ニ所持スヘシ

但日本形積石五十石未満ノ船并解漁船小廻船遊船ノ本鑑札ハ其船ニ釘付スヘシ

第八條 解船破船又ハ水火盜難等ニ因リ船舶ヲ失ヒタル者ハ其旨定繫場所在ノ地方廳ニ届

出鑑札ヲ還納スヘシ

第九條 艦札ヲ亡失毀損シタル或時ハ改名代替ノ時或ハ船號ヲ改メ若クハ定繫場ヲ變換シ

タルキハ其旨定繫場所在ノ地方廳ニ届出艦札ノ再渡若クハ引換ヲ乞フヘシ

第十條 左ニ掲グル船舶ハ其稅ヲ免除ス其所有主ハ地方廳ニ届出免稅ノ烙印ヲ乞フヘ

倉庫船 水田ノ耕作ニ用ル船 氷災ノ爲メ陸地ニ備ヘ置ク船

橋梁ニ換ヘ渡場ノミニ用ウル船

船橋ノ組成ニ用ウル船

航海中本船ニ提ケ置ク傳馬船「ハツテラ」船ノ類

第二章 納稅

第十一條 稅金ハ一年ヲ二期ニ別テ十一月一日七月一日現在ノ船舶ヨリ徵收スル者トス其前
半年分ハ二月三十一日限り後半年分ハ七月三十一日限り定繫場所在ノ地方廳ニ上納スヘ

第十二條 新規造船シタル者ハ艦札ヲ受クル時該期ニ係ル稅金ヲ上納スヘシ

第十三條 船體ヲ變更シ積量若クハ間數ニ増減ヲ生シタルキハ次期ヨリ其積量又ハ間數ニ
隨ヒ稅金ヲ納ムヘシ

第十四條 他管下ニ定繫場ヲ定ムル者ハ該地ニ代人ヲ定メ連署ノ上其定繫場所在ノ地方廳
ニ届出納稅ヲ辨セシムヘシ

第十五條 本籍管内ニ定繫場ヲ定メタル者不在ノキハ代人ヲ定メ其地方廳ニ届出納稅ヲ辨
セシムヘシ

第十六條 假艦札ヲ受ケタル船舶定繫場ニ回漕中納稅期限ニ係ルキハ豫メ定繫場所在ノ地
ニ代人ヲ定メ其地方廳ニ届出納稅ヲ辨セシムヘシ

第十七條 此規則ヲ犯シ脫稅ニ係ル者ハ處罰ノ後其稅金ヲ追徵ス

第三章 罰則

第十八條 此規則ヲ犯シ脫稅ニ係ル者ハ其脫稅高五倍ノ科料若クハ罰金ニ處ス

第十九條 免稅船ヲ有稅船ノ用ニ充テタル者ハ貳圓以上五拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十條 第三條第五條第七條第九條第十四條第十五條第十六條ヲ犯シタル者及ヒ第十條

ノ免稅船ニ烙印ヲ受ケサル者ハ壹圓以上壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス
 第二十一條 此規則ニ依リ罰金若クハ科料ニ處スル者ハ刑法ノ不論罪及ヒ減輕再犯加重數
 罪俱發ノ例ヲ用ヒス但刑法第七十五條第七十六條ノ場合ハ此限ニ在ラス

◎第四章 解漁船并海川小廻船等船稅規則

○明治七年二月十八日太政官第貳拾壹號布告

第一條 一各府縣管下ノ人民所有ノ解漁船并海川小廻シ船等之類ハ來ル明治八年以後檢
 査ノ上烙印ヲ標シ候旨ニ付本年十二月中迄ニ管轄廳へ申立檢印相受ケ可申事

第二條 一解漁船并ニ川船ハ積石ノ多少ヲ問ハス其他五十石未滿海船ノ類一艘毎ニ船梁ヨ
 リ船梁マテノ延長間數ニ應シ左ノ通り年々四月中迄ニ税金相納可申事

但曲尺六尺ヲ以テ一間トシ間ニ不滿端數ハ切捨候事

一船梁ヨリ長ニ間造ハ一ケ年 金貳拾錢
 一船梁マテ 以下一間ヲ加フル毎ニ拾五錢ツ、ヲ増加納稅可致候事

第三條 (明治八年三月廿八日太政官第四拾五號布告ヲ以テ左ノ通り改正ス)

一耕作一途ニ相用ヒ候田舟及ヒ水害備ノ爲メ常ニ陸上ニ設ケ置候分又ハ橋梁ニ換ヘ渡場
 ノニニ相用ヒ全ク他ノ稼方ニ不充船并船橋ハ別紙書式ニ倣ヒ願書差出船稅免除ノ檢印相
 受可申事

第四條 一四月前ノ解船破船及ヒ四月後ノ新規造船ハ其年納稅不及候へ其時々相届ケ造
 船ノ分ハ第一則ノ通り檢印請置キ可申事

但讓渡船ノ儀モ其時々届出申可事

第五條 一無檢印ノ船及ヒ船稅免除ノ檢印相受ケ置他ノ稼方ニ相充候船モ有之ニ於テハ其
 船相當稅額五倍ノ罰金可申付事

第六條 一無檢印ノ船及ヒ船稅免除ノ檢印有之船ヲ以テ左ノ稼方致シ候者ヲ訴出候者ハ其
 罰金十分ノ一賞金トシテ給與候事

○明治八年四月十九日太政官第六拾壹號布告ヲ以テ左ノ通り第七條ヲ追加ス

第七條 一バツチアヲ並ニ傳馬船ト唱フルモノ、内西洋形蒸氣船同風帆船及ヒ日本形等ノ
 廻船ハ其屬シ航海中本船へ取載セ候小船ノ分ニ限リ第三則同様願書差出シ船稅免除ノ檢

印相受ケ可申事

耕作松其外船稅免除願書書式

一 船長 船梁ヨリ 何問 何艘

右ハ耕作一途ニ相ヒ用度候間船稅免除之御檢印被成下候様仕度尤モ外稼業ニハ一切相用ヒ

申間敷候仍之此段奉願候以上

何府管下

何年何月幾日 何國何郡何町宿

何之誰印

何 (府) 知事 縣 參事 誰殿

前書之通相違無御座候也

右同町村

戸長 何之誰印

◎第五章 外國形日本船輸出入稅未納内外貨物廻漕規則

○明治八年二月七日太政官第貳拾號布告

第一條 日本郵便船會社其他日本船ニテ日本海廻漕免許ヲ得タル外國形船舶ニ限り自今國內各開港場ニ輸入稅未納ノ外國貨物並ニ貨主外國人ニテ輸出稅未納ノ內國貨物廻漕差許候ニ就テハ從來内外交涉密賣買ノ儀ハ嚴禁ノ處尙ホ右ニ類スル所業有之候テハ不相濟儀ニ付廻漕規則ヲ設クル在ノ如シ

第二條 凡ソ外國形ノ日本船舶ハ都テ出入港手數並ニ諸貨物積積船卸共各開港場ニ於テハ稅關ノ所轄トス

第三條 前條ノ船滯港中ハ稅關ヨリ監吏乘勤スヘシ

第四條 前條ノ船貨物ヲ船積シ或ハ船卸スルハ日出ヨリ日没マテニ限ルヘシ若シ夜中密ニ貨物ヲ積卸スルキハ其現品ヲ沒收シ且其品價同額ノ罰金ヲ其船長或ハ其會社ニ課スヘシ

但日没ヨリ日出マテハ船中ノ艙口ヲ固封シ置クヘシ若シ勝手ニ開封スルキハ其船長或ハ其會社ニ金六拾圓ノ罰金ヲ課スヘシ

第五條 甲港ヨリ乙港ニ廻漕スル前條ノ船ニ未納稅内外貨物ヲ積入レ乙港ニ輸送セント欲スルルハ其貨主或ハ其引受人ヨリ差出書各稅關ニ用ウルニ貨物ノ品種箇數記數番號元價等詳細相認メ積送ノ儀稅關へ願出貨物檢査濟ノ上積送免狀ヲ受ケ積入ルヘシ若シ此手數ヲ經シテ積入ル、キハ其現品ヲ沒收ス故ニ其船長或ハ會社タル者ハ必ス右免狀ヲ點視シ之レニ照ラシテ其品ヲ積入ルヘシ若シ無免狀ノ貨物ヲ船積セハ事ノ成否ヲ問ハス其會社或ハ其船長へ其品價同額ノ罰金ヲ課スヘシ

第六條 甲港ニ碇泊スル外國船ヨリ都合ニヨリ直チニ貨物ヲ船移シ乙港ニ積送ラント欲スルルハ其貨主或ハ其引受人ヨリ船舶廻漕ノ差出書各稅關ニ用ウルニ貨物ノ品種箇數記數番號等詳細相認メ船移ノ儀稅關へ願出右免狀ヲ受ケ船移スヘキ儀ナレハ其船長或ハ會社タル者ハ右免狀ヲ點視シ之レニ照ラシテ其品ヲ船移スヘシ若シ無免狀又ハ免狀外ノ貨物ヲ船移スルルハ其現品ヲ沒收シ且ツ其品價同額ノ罰金ヲ其船長或ハ其會社ニ課スヘシ

第七條 前條ノ船舶ヨリ輸出稅未納内國貨物ヲ外國船へ積移スルルハ事ノ成否ヲ問ハス其貨物ヲ沒收シ且其會社或ハ其船長ニ其船移シ又ハ船移セント謀ラハ事ノ成否ヲ問ハス其貨物ヲ沒收シ且其會社或ハ其船長ニ其

品價同額ノ罰金ヲ課スヘシ

第八條 前條ノ船貨物積入レ甲港ヲ出港セント欲スルルハ其船長或ハ其會社ヨリ第一條ノ如ク積送貨物ノ總目錄二枚一枚ハ甲港稅關へ置キ一枚ハ乙港稅關へ送達ス一ヲ認メ稅關へ差出シ出港免狀ヲ受ケ出港スヘシ若シ此手數ヲ經シテ出港スルルハ總目錄ニ記載スヘキ品價同額ヲ罰金トシテ其船長或ハ其會社ニ課スヘシ

但汽船ハ出港前一時帆船ハ出港前二十四時ヲ隔テ、此手數ヲ爲スヘシ

第九條 前條ノ船甲港ヨリ乙港ニ通港中風順ニヨリ不開港場へ入津スルル輸送入稅未納ノ外國貨物或ハ貨主外國人ニソ内國品ヲ船卸スヘカラス若シ船卸スルルハ密商スルト否トチ

問ハス其現品ヲ沒收シ且其品價同額及ヒ金一千圓ノ罰金ヲ其船長或ハ其會社ニ課スヘシ
第十條 前條ノ船乙港ニ入港セハ其稅關へ第二號書式ノ如ク未納稅内外貨物ノ輸入總目錄一並チ差出スヘシ尤モ此手數ハ入港下碇後休日ヲ除キ四十八時間ニ爲スヘシ此時間ヲ過ルルハ一日毎ニ金六拾圓ノ罰金ヲ課スヘシ

第十一條 前條ノ輸入貨物總目錄中若シ誤脫アルル覺知セハ休日ヲ除キ二十四時間ニ更正

スルコトヲ得ヘシ若シ此期限ヲ過キ更正スルキハ金拾五圓ノ罰金ヲ課スヘシ

第十二條 前條ノ輸入貨物總目錄ヲ甲港ヨリ乙港ニ廻達アリシ積送貨物總目錄ニ照會シ過不足アルキハ其事由ヲ糾明シ條理判然セサレハ不足ノ貨物ハ甲乙兩港間ニ於テ密商セシ者ト看做シ其品物同價ノ金額并ニ金一千圓ノ罰金ヲ其船長或ハ其會社ニ課スヘシ若シ貨物過ナルキハ其現品ヲ沒收シ且其品價同額ヲ罰金トシテ其船長或ハ其會社ニ課スヘシ

第十三條 前條ノ船入港手數ノ上未納稅内外貨物ヲ陸揚スルキハ其貨主或ハ其引受人ヨリ差出書各稅關ニ用フニ貨物ノ品種箇數記號番號元價等詳細相認メ陸揚ノ儀稅關へ願出貨物檢査濟ノ上陸揚免狀ヲ受ケ陸揚スヘシ若シ無免狀或ハ免狀外ノ貨物ヲ船卸セハ事ノ成否ヲ問ハス其貨物ヲ沒收ス故ニ其船長或ハ會社タルモノハ右免狀ヲ點視シ之ニ照シテ其品ヲ船卸スヘシ若シ無免狀或ハ免狀外ノ貨物ヲ船卸シ若クハ船卸セント謀ラハ事ノ成否ヲ問ハス其會社或ハ船長へ其品價同額ノ罰金ヲ課スヘシ但外國貨物ハ輸入稅上納ノ上陸揚免狀ヲ受ケ陸揚スヘシ

第十四條 前條ノ船船便利ニ依リ此規則ニ關係スル貨物ヲ互ニ船移スルキハ稅關へ願出免許ヲ受クヘシ若シ無免狀又ハ免狀外ノ貨物ヲ船移スルキハ其現品ヲ沒收シ且ツ其品價同額ヲ罰金トシテ雙方ノ船長或ハ雙方ノ會社ニ課スヘシ

第十五條 各港稅關ハ祝日祭日及ヒ日曜日ヲ除クノ外毎日午前十時ニ開キ午後四時ニ閉スヘシ故ニ此規則ニ揭示シタル時限ト稅關ノ開閉時限トヲ計リ以テ其期限ヲ愆マルヘカラス

第十六條 此他會社或ハ船長タル者貨主又ハ代人ニ與スルト否トヲ問ハス故ラニ税金ヲ脱セント謀リ若クハ其他諸般ノ方畧ヲ以テ脫稅ヲ謀ル者アレハ金壹千圓ヨリ多カラサル罰金ヲ課スヘシ若シ其事過失ニ出テ犯則ニ涉ル者アレハ此規則ニ照ラシテ罰スヘシ

第十七條 總テ事犯則ニ涉ル者其二犯俱發スル者ハ重キニ就テ處分スヘシ

第十八條 若シ此ノ規則ヲ變更スルコトアレハ一ヶ月前之ヲ布告スヘシ

第一號書式 未納稅品輸出目錄

記號番號	簡	數	品	名	斤	量	或	等	貨	主	姓	名
内	國	品										

國 品

右ハ當港ヨリ某港ニ廻漕仕候爲メ當港ニ於テ當某九船ニ積受候未納稅品書面ノ通聊カ相違無之且途中不開港場ニ於テ決シテ一個タリハ船卸仕間敷候以上

某會社總代

年月日

姓名印

某九船長

姓名印

某港稅關長官誰殿

第二號書式

未納稅品輸入目錄

記號番號	箇	數	品	名	入斤	量	等	或	貨主	姓名
外國品										
內國品										
外國品										

右ハ某港ヨリ當港ニ廻漕仕候タメ當某九船ヲ以テ積來候未納稅品書面之通聊カ相違無之且途中不開港場ニ於テ一個タリハ船卸仕候儀決シテ無之候以上

某會社總代

年月日

姓名印

某九船長

姓名印

某港稅關長官誰殿

◎第六章 廻漕貨物取扱規則

○明治八年十二月四日太政官第百八拾四號布告

- 第一條 一廻漕貨物ノ荷造リハ濡沾減損或ハ漏脫等ノ難ヲ防クヘキ様務テ堅固ニシテ其品柄又ハ荷造ノ模様ニ依リテハ錠鎖或ハ封印スヘシ
- 第二條 一穀物鹽類ノ俵物酒醬流液ノ樽物等總テ減損漏脫シ易キモノハ積入ノ時必ス船主貨主ノ間ニ特殊ノ約束ヲ爲スヘシ

第三條 一船主ハ荷造ノ祖槩ナルカ錠鎖或ハ封印ナキヲ以テ第一條ノ難ヲ防キ難シト思惟スルトキハ貨主ハ其趣ヲ通知シテ之ヲ堅固ナラシメ或ハ錠鎖封印セシメ又第二條ノ物品ヲ托セラル、其ハ特殊ノ約定ヲ爲スヘキヤ否ヤヲ訊問スヘシ

第四條 一貨主ハ第三條ノ通知或ハ訊問ヲ得ルモ之ヲ堅固ナラシメス或ハ錠鎖封印セス又其約定ヲ爲ササルキハ濡沾減損或ハ漏脱等ノ難ヲ運送中ニ生スルハ船主ニ對シ其辨償ヲ要スル權利ナカルヘシ

第五條 一廻漕運賃ハ發船ノ甲地ニ於テ波戶場或ハ船主ノ倉庫等船主其貨物ヲ受取ルヘキ適當ノ地ト定メタル場所ヨリ着害ノ乙地ニ於テハ波戶場或ハ其船主ノ倉庫等ノ其貨物ヲ引渡スヘキ適當ノ地ト定メタル場所迄ノ運送費ヲ稱スルモノニシテ甲乙地ニ於テ其定メタル場所ノ外之ヲ取集メ及ヒ配達スルノ費用ヲモ合スルモノニアラス故ニ其取扱ヒ配達ヲモ船主ニ托スルキハ貨主ハ廻漕本賃ノ外ニ相當ノ取集及ヒ配達賃ヲ拂ハサルヘカラス

第六條 一前條乙地ニ着船スルキハ船主ヨリ貨主ニ其貨物ヲ渡スヘキ旨ヲ報告スヘシ若シ貨主ノ都合ニ依リ其時日ヲ過キテ之ヲ受取ラサルキハ其後ニ至リ危險損害ヲ生スルハ船主ハ其責ニ任セサルヘシ

主ハ其責ニ任セサルヘシ

但其報告スヘキ日時ハ必ラス貨主ノ受取得ヘキ適宜ノ時間ヲ以テスヘシ若シ不適宜ノ時間ヲ以テスルキハ之ヲ報告セサルト同般ト見做スヘシ然ルキハ之ニ生スル危險損失ハ船主ノ責ヲ免カルヘカラス

第七條 一前條ノ如ク其報告時限ヲ過ルキハ船主ハ之ニ生スル危險損失ハ其責ニ任セスト雖用必ス危險損失ヲ生セサル様之ヲ倉庫ニ納メ或ハ番人ヲ附ケ又ハ雨覆等ノ備ヲナシ勉メテ保護ノ手立ヲ爲スヘシ然ルキハ相當ノ倉敷料番人賃其他之ニ屬スル費用ヲ貨主ヨリ拂ハシムヘシ

第八條 一廻漕運賃ハ第五條ニ記載セル甲乙約定地ノ全運航賃ナルニ因リ其全運賃ヲ畢ヘサル間ハ貨主ハ之ヲ拂フヲ拒ムノ理アリ又幾百石何千斤ニ付此運賃若干ト約定セシヨ其全量中幾分ノ不足ヲ生スルキハ貨主ハ其全運賃ヲ拂フヲ拒ミ得ヘシ然レハ其全量幾百俵何千箇ヲ運送セシムルモ其一俵一箇ニ付運賃幾許ト約定セシキ其全量ノ如何ヲ問ハス之ヲ受取リタル俵數箇數ニ就テ約定運賃ヲ拂ハサルヘカラス又封印ヲ檢シ外包ノ異狀

ナキヲ以テ之ヲ受取後其包中ノ物品ニ不足或ハ損傷アルモ其辨償ヲ船主ニ責ムルヲ得ヘカラス

第九條 一船主ハ其約定ヲ履テ安全ニ其貨物ヲ運送スルヲ本分ノ義務トス故ニ第一條及ヒ

第二條ニ遵ヒタル貨物或ハ正ニ請取シ旨ヲ証シタル貨物ノ全數中ニ損害不足ヲ生スル等ノ事アルモ其貨物ノ原價ニ從テ之ヲ辨償スヘシ

但海上難船ノ災厄ニ罹ルモノハ危險受負法或ハ海上平均法ノ別種ニ屬シテ此限ニアラス

第十條 一運賃ハ船主貨主ノ協議ニ依リテ甲地又ハ乙地ニ於テ受拂フヘシ然レモ之ヲ乙地

ニ於テ賣拂フモ其貨物ト引換テ以テスヘシ若シ貨物ヲ受取りタル後チ其拂方ヲ怠ルモハ船主ハ其受取ルヘキ貨額ニ對シ相當ノ利息ヲ課シテ要請スルヲ得ヘシ

◎第七章 危害品積込規則

○明治六年八月九日太政官第貳百九拾貳號布告

危害ヲ生スヘキ物品ヲ漫リニ船積致シ候テハ他ノ物品ヲ傷害シ甚タシキハ全船ヲ失ヒ人命

ヲ損シ不容易儀ニ付左ノ條件之法則ヲ定メ當明治六年十月一日ヨリ令施行候條此旨布告候事

一火藥硝石硫黃ノ類及ヒ發火シ易キ製藥品其他油脂醬液並ニ腐敗シ易キ性質ニシテ他物ヲ損害スヘキ物品船積致シ候モ其品名ヲ表包ノ外部ニ書キ記シ或ハ其送狀ニ記載致シ船

主船長又ハ運漕會社危難請合會社等ノ承諾ヲ得テ後チ差出スヘシ若シ其手數無之尋常ノ荷物ト詐リ之ヲ船積致シ或ハ船積セント謀ルモノハ金五百圓以內ノ罰金ニ處スヘキ事

一尋常ノ品物トシテ差出シタル荷物ノ內ニ前條ノ如キ危害品可有之ト見受候モ船主船長運漕會社ハ何時チ限ラス何地チ論セス直ニ發包シテ之ヲ視查スルノ權利可有之事

但爲視查發包シタル荷物中ニ危害品無之モ船主會社等ノ入費ヲ以テ故ノ如ク荷造可致然レモ其荷物中ニ危害品有之モ是等ノ入費都テ荷主ヨリ可拂事

一危害品ヲ船積セサル以前運漕會社又ハ危險請合會社ノ倉庫ニ於テ見出スモハ之ヲ安全ノ場所ニ移シ置キ直ニ其管轄廳ハ裁判所ヘ可届出事

但安全ノ場所ニ之ヲ移スノ費用ハ荷主ヨリ辨償可致事

一此ノ危害品ヲ既ニ船積シタル後ニ見出シ之ニテ安全ノ場所ニ保テ難キハ船中ニ於テ
三人以上ノ保証人ヲ立テ之レヲ海中ニ投棄シ着港上直チニ其次第書及ヒ荷主ノ姓名ヲ其
地ノ管轄廳或ハ裁判所ヘ可届出事

但投棄シタル荷物及從是生スル荷主ノ損失ヲ辨償スルニ不及事

一船長及ヒ運漕會社等荷主ト申合セ此ノ危害品ヲ尋常ノ荷物トシテ船積ミシ或ハ船積ミセ
ント謀ルモノハ金五百圓以内又之レヲ見出スト雖官ニ訴ヘ出サルハ金貳百圓以内ノ
罰金ニ處スヘキ事

船舶廻漕諸規則終

鐵道略則

○明治五年五月四日太政官第百四拾六號布告

第一條 賃金ノ事

何人コ不限鐵道ノ列車コテ旅行セント欲スル者ハ先賃金ヲ拂ヒ手形ヲ受取ル可シ然ラサ
レハ決シテ列車ニ乗ル可カラズ

第二條 手形檢査及ヒ渡方ノ事

手形檢査ノ節ハ改テ受ケ取集ノ節ハ渡スヘシ若シ檢査ノ節手形ヲ出サス或ハ取集ノ節手
形ヲ渡サル者ハ更ニ最初發車ノ「ステーション」客ノ乗下リ荷物ノ積ミ下リシヲ爲ス所
ヲ云ヨリノ賃金ヲ拂ハシムヘシ尤途中ヨリ乘來リシ者ニテ其確証判然タルハ其乘リタ
ル場所ヨリノ賃金ヲ拂ハシムヘシ

第三條 途中「ステーション」ニテ乘組并コ手形ノ事

途中「ステーション」ニ於テ列車中餘地ノ有無ニ應シテ乘リ組ムコトヲ得ヘシ若シ其手形ヲ
買取リシ總人數ヲ容ルヘキ餘地ナキ時ハ其中ニテ最遠キ地ニ赴ク手形所持ノ人丈ク先ツ

乗組ムヲ得ヘシ若シ又同里程ノ地ニ赴ク客數人アルトキハ其手形ノ番號ノ順序ヲ以テ乗ルヲ得ヘシ

第四條 偽欺ノ者扱方ノ事

何人ニ限ラス賃金ヲ拂ハス列車ニテ旅行セント計リ或ハ遂ニ旅行シ又ハ其拂ヒシ賃金高相當ノ車ニ乗ラスシテ更ニ上等ノ車ニ乗組ミ又ハ既ニ車ヨリ下ルヘキ場所ヲ過キ増賃金ヲ拂ハスシテ遠キ場所ニ至リ遂ニ其賃金ヲ免レント計リ又ハ既ニ拂ヒタル賃金ニテ到ルヘキ場所ニ到リナカラ車ヨリ下リ去ルヲ肯ヒス其外如何ナル仕方ニテモ賃金拂方ヲ逃ントスル者ハ夫々法ニ隨テ罰スヘシ

第五條 列車運轉中出入禁止ノ事

總シテ列車ノ運轉中ニ出入スルヲ又ハ車内旅客ノ居ルヘキ場所ノ外ニ乗ルヲ禁ス

第六條 疥癩等ノ病人ヲ禁止スル事

疥癩及ヒ諸傳染病ヲ煩フ者ハ乗車ヲ禁ス若シ此等ノ病人車中ニ在テハ見當リ次第鐵道掛ノ者ヨリ車外并ニ鐵道構外ヘ退去セシムヘシ

第七條 吸煙并ニ婦人部屋男子出入禁止ノ事

何人ニ限ラス「ステーション」構内吸煙ヲ禁セシ場所並ニ吸煙ヲ禁セシ車内ニテ吸煙スルヲ許サズ且婦人ノ爲メニ設アル車及ヒ部屋等ニ男子妄リニ立入ルヲ許サズ若シ右等ノ禁ヲ犯シ掛リノ者ノ戒メナ用ヒサル者ハ車外并ニ鐵道構外ニ直ニ退去セシムヘシ

第八條 醉人及不行狀人扱方ノ事

何人ニ限ラス總シテ列車乗組中又ハ「ステーション」并ニ鐵道構内ニテ醉ニ乘シ妄狀ヲ現ハス者又ハ不良ノ行狀ヲ爲ス者ハ鐵道掛リノ者ヨリ車外及ヒ鐵道構外ヘ直ニ退去セシムヘシ

第九條 鐵道ニ關スル物品ヲ毀損スル時ノ事

何人ニ限ラス猥リニ「ステーション」其他鐵道構内ニ標識揚示セル書附等ヲ剝シ或ハ破リ又ハ列車ノ番號札ヲ取除キ或ハ車燈ヲ消シ又ハ各車ノ諸器械倉庫建家牆棚其他鐵道一切ノ附屬品ヲ毀損スル者ハ都テ法ニ隨テ所置スヘシ

第十條 機關車等へ乗込ヲ禁スル事

機關方并ニ火夫ノ外ハ其筋ノ許シテ得スシテ機關車又ハ炭水車ニ乘リ或ハ乗ラント爲ス可カラヌ且ツ車長及ヒ車掛リノ者ノ外其筋ノ許シテ得スシテハ荷物車又ハ旅客ノ爲メニ設ケサル車ニ乘リ又ハ乗ラント爲スヘカラス若シ此禁ヲ犯シ鐵道掛リノ者ノ制止ヲ用ヒサル者ハ直チニ其場ヨリ退去セシムヘシ

第十一條 鐵道地所ヘ妄リニ立入者取扱方ノ事

何人ニ限ラス「ステーション」又ハ鐵道構内ヘ妄リニ立入者ハ鐵道掛ノ者ヨリ即刻構外ヘ立去ラシムヘシ

第十二條 旅客ノ荷物紛失毀損取扱ノ事

旅客手廻リ荷物其外所持ノ品タリトモ總テ之カ爲ニ別段ニ賃金ヲ拂ヒ其請取證書ヲ取置カサレハ若シ紛失毀損等アルトモ政府ニ於テ關係セサルヘシタトヒ賃金ヲ拂ヒ證書ヲ取置トモ其紛失毀損等ヲ償フハ只旅客自用衣服ノミニ止リ且ツ賃金モ五拾圓ヲ過クルコトナシ

第十三條 金高及ヒ大切ノ物品紛失毀損ニ關不關ノ事

金銀貨紙幣郵便切手爲替會社通用券手形約定證書金銀請拂證書地所建築家活券諸繪圖書畫古器金銀玉石鐵金及諸彫鏤細工物時計類其餘衣類或ハ玩物ノ粧飾ニ混作ノ品類及ヒ硝子器類陶器漆器酒類繻絹布生熟糸等ノ品物運送方ニ付テハ其品柄并價高等ヲ明白ニ其掛ヘ申立テ増賃金ヲ拂ヒ紛失毀損等請合シ分ノ外總テ政府ニ於テ之ヲ償ハス

第十四條 牛馬獸類運送ノ事

牛馬及ヒ其他ノ獸類ヲ運送スルコ其持主或ハ送り人ヨリ其獸類ノ價ヲ運送掛ヘ申出相當ノ増賃金ヲ拂ヒ請合證書ヲ取置クヘシ若シ増賃金ヲ拂ハス請合ヲ爲サ、ル分ハ如何程高價ノ獸類紛失損害アルモ牛一疋金貳拾圓以上馬一疋或ハ乳牛一疋ニ付金五拾圓以上羊或ハ豚一疋ニ付金五圓以上ヲ政府ニ於テ償フコトナシ

第十五條 砲發ヲ禁スル事

何人ニ限ラス車内ハ勿論鐵道線及ヒ其他構内ニテ砲發スルヲ禁ス

第十六條 爆發質アル危害物運輸ヲ禁スル事

鐵道寮ヨリ追テ公告スルマテハ火藥及ヒ「ピトローリヤム」「ケロシンチイ」「トルベシダ

イ 石炭油硝性並ニ爆發質燃燭質等ノ物品ハ運輸セサルヘシ
等ヲ云

第十七條 荷物目錄ヲ渡スヘキ事

運送ノ諸荷物ヲ鐵道掛ノ者ヘ引渡シ又ハ請取ノ度毎ニハ右荷主或ハ宰領人ヨリ其品柄數
量及ヒ姓名ヲ記シテ掛リノ者ヘ差出スヘシ

第十八條 物品並ニ畜類損害償方定限ノ事

鐵道ニテ運送スル物品並ニ畜類紛失損害アリトモ鐵道掛リノ怠惰疎漏ヨリ起リシニ非レ
ハ政府ニ於テ之ヲ償フコトナシ

第十九條 荷物運送賃金ノ事

何人ニ限ラス荷物運賃ノ催促ヲ受ケ尙ホ拂ハサルキハ其荷物ノ全部又ハ部分ヲ留置キ若
シ又其荷物既ニ他所ニ運送セシトハ其後同人附屬ノ荷物鐵道掛リヘ送來ルコトキハ之ヲ留
置キ同人ヘ告知ラセメル上ニテ滞金高程ノ品ヲ入札公賣シ其滞金ト諸入費トヲ引取殘金
殘品ヲ同人ヘ渡スヘシ又時宜ニ依リ右ノ取計ヒヲ爲サス法官ニ訴ヘテ質金並ニ入費等ヲ
取立ルコトモアルヘシ

第二十條 規則ニ隨ハサル者ノ事

何人ニ限ラス諸事前條ノ規則ニ隨ハスンハ乗車及ヒ荷物ノ運送ヲ許サ、ルヘシ

第二十一條 規則等變革布達ノ事

此規則中變革及加除アルキハ遍ク告達スヘシ

第二十二條 荷物運送引取方ノ事

諸荷物ノ運送ヲ引請ルコトハ列車中餘地ノ有無ニ應スヘシ

第二十三條

此規則ヲ施行スルカ爲メニ夫々法官ニ訴ヘ犯罪人罰シ方等ノ裁判ヲ乞フ手順ハ鐵道頭或
ハ鐵道支配人ノ間ニテ其取扱アルヘシ

第二十四條

旅客並ニ荷物ノ運賃ハ時宜ニ隨ヒ變革アルト雖モ其變革毎ニハ二週日前ニ告達スヘシ尤
鐵道頭鐵道支配方及ヒ運輸頭取ノ間ニ於テ前條ノ如キ告達ナク臨時常例ヨリ下等ノ運賃
ヲ以テ別ニ列車ヲ仕立ルコトモアルヘシ

第二十五條

此規則來ハ五月七日ヨリ施行スヘシ

右之條々此度確定候事

○附錄 鐵道犯罪罰例

○明治六年三月十三日太政官第百壹號布告

(明治十二年三月廿八日太政官第拾貳號布告禁鋼ヲ
禁獄ニ改正ス故ニ今其改正ニ從ヒ直ニ禁獄ト記ス)

第一條 鐵道掛ノ者總テ鐵道上ニ關スル事務取扱ヒ中醉ニ乘シ無狀ヲ現ハスニ於テハ貳拾

五圓以內ノ罰金ニ處ス若シ其職掌怠惰輕忽ニ依リ鐵道旅客ノ危難トモナルヘキ取扱アル

トキハ其事情ニ依リ五百圓以內ノ罰金又ハ三月以內ノ懲役或ハ禁獄ニ處ス

第二條 (明治十二年三月二十八日太政官第拾貳號布告ヲ以テ左ノ通り改正ス)

規則第四條ニ記スル所ノ不法ヲ爲ス者ハ貳拾五圓以內ノ罰金或ハ三十日以內ノ禁獄ニ處

ス

第三條 規則第五條ノ禁ヲ犯ス者ハ拾圓以內ノ罰金ニ處ス

第四條 規則第六條ノ禁ヲ犯ス者ハ拂ヒタル賃金ヲ沒シ貳拾五圓以內ノ罰金ニ處ス

第五條 規則第七條ノ禁ヲ犯ス者ハ拂ヒタル賃金ヲ沒シ拾圓以內ノ罰金ニ處ス

第六條 規則第八條ニ記スル所行ヲ爲ス者ハ拂ヒタル賃金ヲ沒シ貳拾五圓以內ノ罰金或ハ

三十日以內ノ禁獄ニ處ス

第七條 規則第九條ニ記スル所ノ不法ヲ爲ス者ハ五拾圓以內ノ罰金又ハ六週間以內ノ懲役

或ハ禁獄ニ處ス

第八條 規則第十條ノ禁ヲ犯ス者ハ廿五圓以內ノ罰金ニ處ス

第九條 (明治十二年三月二十八日太政官第拾貳號布告ヲ以テ左ノ通り改正ス)

規則第十一條ノ禁ヲ犯ス者ハ貳拾五圓以內ノ罰金或ハ三十日以內ノ禁獄ニ處ス

第十條 規則第十五條ノ禁ヲ犯ス者ハ貳拾五圓以內ノ罰金ニ處ス

第十一條 (明治十二年三月二十八日太政官第拾貳號布告ヲ以テ左ノ通り改正ス)

規則第十七條ニ記スル所ノ諸荷物書其外ヲ故ラニ出サス或ハ故ラニ欺僞ノ品物書ヲ出

ス者ハ三月以內ノ懲役又ハ禁獄或ハ其品物壹噸千七百斤毎ニ貳拾五圓以內ノ罰金ニ處ス

壹圓以下ハ拾圓以内尤モ一罰ノ贖金高五百圓ニ過キス

第十二條 道附屬品ヲ毀損スル者ハ第七條ニ照ラシ罰ヲ科スルノ外其毀損物ノ代價ヲ償ハシムルコトヲ要スルヘシ但其償金ノ追徴モ鐵道寮ヨリ法官ヘ乞フキハ法官ニ於テ追徴スヘシ

○明治十六年七月十日大政官第貳拾三號布告

明治五年(五月)第百四拾六號布告鐵道略則及同六年(三月)第百壹號布告鐵道犯罪罰例ハ私設鐵道モモ適用ス

第八條 鐵道ノ設備ニ關スル事項ハ鐵道寮ヨリ法官ヘ乞フキハ法官ニ於テ追徴スヘシ

第九條 鐵道ノ設備ニ關スル事項ハ鐵道寮ヨリ法官ヘ乞フキハ法官ニ於テ追徴スヘシ

第十條 鐵道ノ設備ニ關スル事項ハ鐵道寮ヨリ法官ヘ乞フキハ法官ニ於テ追徴スヘシ

鐵道略則終

議會諸規則

◎第一章 府縣會規則

○明治十三年四月八日大政官第拾五號布告

明治十一年(七月)第十八號布告府縣會規則左ノ通り改正候條此旨布告候事

第一章 總則

第一條 府縣會ハ地方稅ヲ以テ支辨スヘキ經費ノ豫算及ヒ其徵收方法ヲ議定ス

第二條 府縣會ハ通常會ト臨時會トノ二類ニ別ツ其定期ニ於テ開ク者ヲ通常會トナシ臨時ニ開ク者ヲ臨時會トナス

第三條 通常會臨時會ヲ論セズ會議ノ議案ハ總テ府知事縣令ヨリ之ヲ發ス

第四條 臨時會ハ其特別會議ヲ要スル事件ニ限リ其他ノ事件ヲ議スル得ス

第五條 府縣會ノ決議ハ府知事縣令認可ノ上之ヲ施行スヘキ者トス若シ府知事縣令其議決ヲ認可スヘカラズト思慮スルハ其事由ヲ內務卿ニ具狀シテ指揮ヲ請フヘシ

○明治十四年二月十四日大政官第四號布告ヲ以テ左ノ一項ヲ追加ス

前項ノ場合ニ於テ府知事縣令ハ時宜ニ依リ之ヲ再議ニ付スルヲ得再議ノ後猶其議決ヲ認
可スヘカラスト思慮スルキハ内務卿ノ指揮ヲ請フコト前項ニ同シ

第六條 府縣會ハ毎年通常會議ノ初メニ於テ地方税ニ係ルノ前年度ノ出納決算ノ報告書ヲ
受ケ府知事縣令ニ説明ヲ求ムルヲ得若シ異見アルキハ議長ノ名ヲ以テ直チニ内務大藏
兩卿ニ上申スルヲ得

○明治十五年十二月二十八日太政官第六十八號布告ヲ以テ本條ニ左ノ一項ヲ追加ス

出納決算ノ報告書ニ付府縣會ヨリ説明ヲ求ムルトキハ府知事縣令若シハ其代理人之ヲ説
明スヘシ

第七條 (明治十五年二月十四日太政官第拾號布告ヲ以テ左ノ通り改正ス)

通常會期中議員ノ内二人以上ノ發議ヲ以テ其府縣内ノ利害ニ關スル事件ニ付キ建議ヲ爲
サントスル者アラハ先ツ議會ノ許可ヲ得テ之ヲ會議ニ付シ可決スルキハ其會ノ所見トシ
議長ノ名ヲ以テ直チニ内務卿ニ建議シ又ハ府知事縣令ニ建議スルヲ得

但シ臨時會ニ於テハ其會議ヲ要シタル事件ニ限り建議スルヲ得

第八條 府縣會ハ府知事縣令ヨリ其府縣内ニ施行スヘキ事件ニ付キ會議ノ意見ヲ問フコト
ルキハ之ヲ議ス

第九條 府縣會ハ議事ノ細則ヲ議定シ府知事縣令ノ認可ヲ得テ之ヲ施行スルヲ得

府縣會ハ議員ノ内招集ニ應ゼス又ハ事故ヲ告ケテ參會セサル者ヲ審査シ其退職者ヲ
ルヲ決スルヲ得

○明治十四年二月十四日太政官第四號布告ヲ以テ左ノ一項ヲ追加ス

府知事縣令ト府縣會トノ間ニ於テ法律ノ見解ヲ異ニシ又ハ權限ヲ爭フコトアルキハ雙方ヨ
リ其事由ヲ具狀シ政府ノ裁定ヲ請フヘシ此場合ニ於テ府知事縣令ハ其議事若シハ會議ヲ
中止スルヲ得

第二章 選舉

第十條 府縣會ノ議員ハ郡區ノ大小ニ依リ每郡區ニ五人以下ヲ撰ブ

○明治十五年二月十四日太政官第拾號布告ヲ以テ左ノ通り追加ス每郡區議員定數ノ外補缺
員トシテ十名以下ヲ増撰スルヲ得

第十一條 議長副議長ハ議員中ヨリ公撰シ之ヲ府知事縣令ニ報告シ府知事縣令ハ之ヲ内務卿ニ報告スヘシ

議長副議長及ヒ議員ハ俸給ナシ但シ會期中滞在日當及ヒ往復旅費ヲ給ス其額ハ會議ノ議決ヲ以テ之ヲ定ム

第十二條 書記ハ議長之ヲ撰ビ庶務ヲ整理セシム其俸給ハ會費ノ中ヨリ之ヲ支給ス

第十三條 府縣會ノ議員タルヲ得ヘキ者ハ滿二十五歳以上ノ男ニシテ其府縣内ニ本籍ヲ定メ滿三年以上住居シ其府縣内ニ於テ地租拾圓以上ヲ納ムル者ニ限ル但シ左ノ各款ニ觸ル者ハ議員タルヲ得ス

第一款 風癲白痴ノ者

第二款 (明治拾五年二月十四日太政官第拾號布告ヲ以テ左ノ通改正ス)

舊法ニ依リ一年以上懲役及ヒ國事犯禁獄ノ刑ニ處セラレ滿期後五年ヲ經サル者

新法ニ依リ公權ヲ剝奪及ヒ停止セラレタル者又ハ一年以上輕重禁錮ノ刑ニ處セラレ

主刑滿期後五年ヲ經サル者

第三款 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ辨償ヲ終ヘサル者

第四款 (明治十五年二月十四日太政官第拾號布告ヲ以テ左ノ通り改正ス)

官吏教導職及ヒ陸海軍諸卒現役ノ者

第五款 府縣會ニ於テ退職者トセラレタル後四年ヲ經サル者

第十四條 議員ヲ撰舉スルヲ得ヘキ者ハ滿二十歳以上ノ男子ニシテ其郡區内ニ本籍ヲ定メ其府縣内ニ於テ地租五圓以上ヲ納ムル者ニ限ルヘシ

(明治十五年二月十四日太政官第十號布告ヲ以テ但書左ノ通り改正ス)

但シ前條ノ第一款第二款第三款第五款ニ觸ル者及ヒ陸海軍々人現役ノ者ハ撰舉人タルヲ得ス

第十五條 議員ヲ撰舉セントスルキハ府知事縣令ヨリ某月間ニ撰舉會ヲ開クヘキ旨ヲ布令シ郡區長ハ豫メ撰舉ノ投票ヲ爲スヘキ日ヲ定メ少クハ十五日前ニ之ヲ郡區内ニ公告スヘシ

第十六條 撰舉ノ投票ハ豫定ノ日ニ郡區廳ニ於テ之ヲ爲シ郡區長之ヲ調査シ撰舉會中ノ取

締ヲ爲スヘシ但シ便宜ニ因リ郡區廳外ニ於テ選舉會ヲ開クヨク得

第十七條 撰舉人ハ豫メ郡區長ヨリ付與シタル投票用紙ニ自己及ヒ被撰舉人ノ住所姓名ヲ

記シ豫定ノ日之ヲ郡區長ニ出スヘシ其投票多數ヲ得タル者ヲ以テ當撰人トシ同數ナラハ

年長ヲ取り同年ナラハ剛ヲ以テ之ヲ定ム

但シ投票ハ代人ニ托シ差出スモ妨ケナシ

第十八條 投票スルノ後郡區長ハ撰舉人名簿ニ就テ投票ノ當否ヲ查シ又被撰舉人名簿ニ就

テ當否人ノ當否ヲ查ス若シ法ニ於テ不適當ナル者アルカ或ハ當撰人自ラ其撰ヲ辭スルキ

ハ順次投票ノ多數ヲ得タル者ヲ取ル

第十九條 當撰人ノ當否ヲ査定スルノ後郡區長ハ其當撰人ヲ郡區廳ニ呼出シ當撰狀ヲ渡シ

當撰人ハ請書ヲ出スヘシ

但シ當撰人各請書ヲ出シタル後郡區長ハ其姓名等ヲ郡區内ニ公告スヘシ

第二十條 一人コシテ數郡區ノ撰ニ當ルキハ其何レノ郡區ニ屬スヘキハ當人ノ好ニ任スヘ

第二十一條 議員ノ任期ハ四年トシ二年毎ニ全數ノ半ヲ改撰ス第一回二年期ノ改撰ヲ爲ス

ハ抽籤法ヲ以テ其退任ノ人ヲ定ム

第二十二條 議長副議長ノ任期ハ二年トシ議員ノ改撰毎ニ之ヲ公撰スル

第二十三條 前二條ノ場合ニ於テハ前任ノ者ヲ再撰スルヲ得

第二十四條 (明治十五年二月十四日太政官第拾號布告ヲ以テ本條中轉任ノ字ヲ轉籍ノ字

ニ改メ而シテ但書ヲ追加ス即チ左ノ如シ)

議員中第十三條ニ掲クル諸款ノ場合ニ遭遇スルカ其府縣外ニ轉籍スルカ其他總テ欠員アルキハ更ニ之ニ代ル者ヲ撰舉ス

但シ補缺員アルトキハ順次投票ノ多數ヲ以テ之ヲ取り尙缺員アルキハ本條末文ノ手續ニ據ル

第三章 議則

第二十五條 議員半數以上出席セサレハ當日ハ會議ヲ開クヲ得ス

第二十六條 會議ハ過半數ニ依テ決ス可否同數ナルキハ議長ノ可否スル所ニ依ル

第二十七條 府知事縣令若カハ其代理人ハ會議ニ於テ議案ノ旨趣ヲ辨明スルヲ得

但シ決議ノ數ニ入ルコトヲ得ス

第二十八條 會議ハ傍聽ヲ許ス但府知事縣令ノ要メニ依リ又ハ議長ノ異見ヲ以テ傍聽ヲ禁スルヲ得

第二十九條 議員ハ會議ニ方リ充分討論ノ權ヲ有ス然レモ人身上ニ付テ褻貶毀譽ニ涉ルコトヲ得ス

第三十條 議場ヲ整理スルハ議長ノ職掌トス若シ規則ニ背キ議長之ヲ制止シテ其命ニ順ハサル者アルトハ議長ハ之ヲ議場外ニ退去セシムルヲ得其強暴ニ涉ル者ハ警察官吏ノ處分ヲ求ムルヲ得

第四章 關閉

○明治十五年十二月二十八日太政官第六拾八號布告ヲ以テ第三十一條第三十二條左ノ如ク改正ス

第三十一條 府縣會ハ毎年一度十一月ニ於テ之ヲ開ク其關閉ハ府知事縣令ヨリ之ヲ命ス會

期ハ三十日以内トス但區部郡部會ヲ開ク地方ニ於テハ七日以内延期スルコトヲ得

第三十二條 通常會期ノ外會議ニ付スヘキ事件アルトハ府知事縣令ハ臨時會ヲ開クコトヲ得其

會期ハ七日以内トス但該會ヲ要スル事由ヲ直チニ內務卿ニ報告スヘシ

第三十三條 會議ノ論說國ノ安寧ヲ害シ或ハ法律又ハ規則ヲ犯スニアリト認ムルトハ府知

事縣令ハ會議ヲ中止セシメ內務卿ニ具狀シテ其指揮ヲ請フヘシ

○明治十五年十二月廿八日太政官第六拾八號布告ヲ以テ本條ハ左ノ三項ヲ追加ス

府縣會ニ於テ若シ法律上議定スヘキ議案ヲ議定セス又ハ會議内ニ於テ議案ヲ議決シ終ラ

サルトキハ府知事縣令ハ更ニ其議定ヲ要セス內務卿ニ具狀シ其認可ヲ得テ之ヲ施行スル

コトヲ得

第一項ノ場合ニ於テ內務卿ハ府縣會ヲ停止スルコトヲ得而シテ更ニ開會ヲ命スル迄ノ間ハ

府知事縣令ニ於テ地方税ノ經費豫算及徴収方法ヲ定メ內務卿ノ認可ヲ得テ之ヲ施行スル

コトヲ得

議員招集ハ應セサレ者半數ヲ過キ議會ヲ開クヲ得サルコトアルトハ府知事縣令ハ其事由ヲ

内務卿ニ具狀シ指揮ヲ請フヘシ

第三十四條 (明治十四年二月十四日太政官第四號布告ヲ以テ本條中「閉會ヲ命シ又ハ」ノ七字ヲ削除シ而シテ第二項ヲ追加ス即チ左ノ如シ)

會議中國ノ安寧ヲ害シ或ハ法律又ハ規則ヲ犯スヲアリト認ムルハ内務卿ハ何レノモトニ問ハス議員ノ解散ヲ命スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ前議員ノ未シ議定セサル議案アルハ後任議員ヲシテ之ヲ議定セシムヘシ

第二十五條 内務卿ヨリ解散ヲ命シタルモ其解散ヲ命シタル日ヨリ九十日以内ニ更ニ議員ヲ改撰スヘシ

○明治十三年十一月五日太政官第四拾九號布告

本年(本月)第四拾八號ノ布告アルニ依リ本年(四月)第拾五號布告府縣會規則ヘ左ノ通追加ス此旨布告候事

第五章 常置委員

第三十六條 府縣會ハ其議員中五人以上七人以下ノ常置委員ヲ撰任スヘシ

○明治十五年二月十四日太政官第拾號布告ヲ以テ本條ヘ左ノ通り追加ス

常置委員定數ノ外數名ヲ増撰シ缺員アルハ順次投票ノ外數ヲ以テ之ヲ補充スルヲ得
區部會郡部會ヲ開設シタル府縣ニ在テハ區郡各部ニ之ヲ撰任スヘシ

○明治十五年十二月二十八日太政官第六十八號布告ヲ以テ左ノ如ク改正ス

第三十七條 常置委員ハ府縣會ノ議定ニ依リ事業ヲ執行スルノ方法順序及豫備ノ支出ニ付府知事縣令ヨリ諮問アルモ其意見ヲ述フ常置委員ハ地方稅ヲ以テ支辨スヘキ事業ニシテ臨時急務ヲ要スル場合ニ於テハ其經費ノ豫算及徵收方法ヲ議決シ追テ府縣會ニ報告スルヲ得

第二十八條 常置委員ハ通常府縣會議ノ初メ委員會議ニ於テ議決シタル事件ノ要領ヲ報告シ且ツ通常會ト臨時會トヲ論セス府知事縣令ヨリ發スヘキ議案ヲ前以テ請取り會議ニ向テ其意見ヲ報告スヘシ

第二十九條 常置委員會議所ハ府縣廳内ニ置キ定日ニ會議スヘシ

第四十條 (明治十五年二月十四日太政官第拾號布告ヲ以テ本條中常置委員ノ下「諮問」ノ二字ヲ增加ス)

常置委員ノ諮問會議ハ別ニ議案書ヲ用ユルヲ要セズ

第四十一條 (明治十五年二月十四日太政官第拾號布告ヲ以テ左ノ通り改正ス)

諮問會ハ府知事縣令ヲ以テ議長トナシ其他ノ會議ハ委員中ヨリ之ヲ撰舉スヘシ

第四十二條 常置委員ハ半数以上出席セサレハ當日ノ會議ヲ開クヲ得ス會議ハ過半数ニ依

テ決メ可否同數ナルモハ議長ノ可否スル所ニ依ル

第四十三條 常置委員會議ノ議事ハ書記ヲシテ筆記セシムヘシ

第四十四條 府知事縣令ハ主務ノ僚屬ヲ委員會議ニ出シ其會議ニ係ル事件ニ付辨明ヲ爲サ

シムルヲ得

第四十五條 常置委員會議ハ傍聽ヲ許サズ

第四十六條 (明治十五年二月十四日太政官第拾號布告ヲ以テ本條中「ニシテ」ノ下「議員

ノ改撰毎ニ必ズ改撰ス但」ノ十三字ヲ增加ス)

常置委員ノ任期ハニシテ年トシ議員ノ改撰毎ニ之ヲ改撰ス但期限ニ至リ再撰スルヲ得

第四十七條 (明治十五年二月十四日太政官第拾號布告ヲ以テ議長ヲ府知事縣令ノ五字ニ

改ム)

常置委員會議所ノ書記ハ府縣ノ屬官中ヨリ府知事縣令之ヲ撰任ス

第四十八條 常置委員ハ三十圓以上八十圓以下ノ月手當及ヒ往復旅費ヲ給ス其額ハ府縣會

ノ議決ヲ以テ定ム

第四十九條 常置委員ノ月手當旅費其他委員會議所ノ費用ハ地方稅ヨリ支給ス

○明治十四年二月十四日太政官第六號布告

府縣會ハ其議定スヘキ事件中細目ニ係ル事項ヲ以テ區町村會若クハ水利會ノ議決ニ付スルヲ得ヘシ此旨布告候事

○明治十四年二月十四日太政官第八號布告

東京府京都府大坂府神奈川縣區郡都會規則左ノ通り相定メ明治十三年(五月)第貳拾六號及ヒ第貳拾七號布告廢止候條此旨布告候事

第一條 三府及ヒ神奈川縣ニ於テハ府縣會ヲ分テ區部會郡部會トナシ區部郡部ニ分別シタル事件ヲ議定セシム

第二條 區部會郡部會ニ於テ議定スヘキ事件ト府縣會ニ於テ議定スヘキ事件トハ府縣會ニ於テ之ヲ議定ス

第三條 府縣會規則第十條ノ定限外ニ於テ區部議員ノ増加ヲ要スルキハ府知事縣令ヨリ内務卿ニ具狀シ其認可ヲ得テ其定限ヲ殊ニスルヲ得

第四條 府縣會ハ區部郡部議員各半數以上出席スルニアラサレハ其日ノ會議ヲ開クヲ得ス

第五條 府縣會ノ議定ニ屬スル事件ニ付テハ區部郡部常置委員會同シテ諮問ヲ受ケ又ハ議決スヘシ

但區部郡部常置委員各半數以上出席スルニアラサレハ其日ノ會議ヲ開クヲ得ス

第六條 (明治十五年二月十四日太政官第拾貳號布告ヲ以テ削除ス故ニ略ス)

第七條 (同上故ニ略ス)

第八條 明治十三年度以前ニ係ル地方税ノ中區郡連帶支辨セラルモノハ其決算ヲ府縣會報ニ

報告シ區郡ニ分別セルモノハ其決算ヲ各別ニ區部會郡部會ニ報告スヘシ

○明治十五年二月十四日太政官第拾貳號布告ヲ以テ左ノ通り第九條ヲ追加ス

第九條 區部ニ係ル戶割ハ區部會ノ決議ヲ經テ府知事縣令ヨリ内務大藏兩卿ニ具狀シ政府ノ裁可ヲ得テ家屋税ト爲スヲ得

○明治十五年十二月二十八日太政官第七拾號布告

府縣會議員 會議ニ關スル事項ヲ以テ他ノ府縣會議員ト聯合集會シ又ハ往復通信スルコトヲ許サス

其集會スルモノ何等ノ名義ヲ以テスルモ府知事縣令ニ於テ此禁令ヲ犯ス者ト認ムルトキハ直ニ解散ヲ命スヘシ

前項ノ場合ニ於テ解散ノ命ニ從ハサルモノハ集會條例第十三條ニ依テ處分ス

○明治十三年九月廿八日太政官無號達

府縣會規則ノ儀ニ付左ノ二件爲心得相違候事

一 (本項ハ府縣會規則第十條ニ追加相成候ニ付自然消滅シヌル旨十五年三月廿九日内務

省ノ伺定アルヲ以テ罷ス

一 (議長副議長共欠席スルハ議員中ニ於テ臨時假議長ヲ公選シ其日ノ會日ヲ開クモ妨ケナシ)

○明治十三年十二月二日內務省乙第四拾八號達

本年第四十九號ヲ以テ府縣會規則追加公布相成候ニ付左ノ條件爲心得相違候事

一 (此一項ハ同年乙第五十二號達ヲ以テ取消シ更ニ左ノ通り改正ス)

一 常置委員ハ來十四年通常會開會前ニ於テ撰任スヘシ

一 十三年度中常置委員ノ月手當又往復旅費ハ委員ヲ撰舉セシムル臨時會ニ於テ議定セシムヘシ

一 郡區經濟ヲ異ニスル府縣ニ在テハ定員内ニ於テ其郡區撰出ノ人員ヲ定ムルヲ得

一 常置委員補欠ノ爲メ相當ノ豫備員ヲ撰ヒ置クモ妨ケナシ

一 第四十一條ニ據リ議長ハ府知事縣令之ヲ務ムト雖モ本務ノ都合ニ依リ書記官之レカ代理ヲ爲スヲ得

一 第四十六條ノ通委員ノ任期ハ二ケ年タルヘシト雖モ若シ議員本分ノ任期ヲ終リタルモノ

ハ其本分ノ任期ト共ニ委員ノ任期モ終リタルモノトス

一 常置委員會議ノ細則ハ該會ニ於テ議決シ府知事縣令認可ノ上施行スヘキモノトス

◎第二章 區町村會法

○明治十七年五月七日太政官第拾四號布告

明治十三年(四月)第拾八號布告區町村會法左ノ通改正ス

區町村會法

第一條 區町村會ハ區町村費ヲ以テ支辨スヘキ事件及其經費ノ支出徵收方法ヲ議定ス

第二條 區町村會ノ會期議員ノ員數任期改選及其他ノ規則ハ府知事縣令之ヲ定ム

第三條 區會ハ區長之ヲ招集シ其議案ヲ發ス町村會ハ戶長之ヲ招集シ其議案ヲ發ス

第四條 區會ノ評決ハ區長之ヲ施行シ町村會ノ評決ハ戶長之ヲ施行ス若其評決ヲ不適當ナ

リトスルハ其施行ヲ止メ府知事縣令ニ具狀シテ指揮ヲ請フヘシ

第五條 區長ニ於テ區會郡區長戶長ニ於テ町村會ノ議事若シ法ニ背キ又ハ治安ヲ害スルコ

トソリト認ムルキハ其會議ヲ中止シ府知事縣令ニ具狀シテ指揮ヲ請フヘシ

第六條 府知事縣令ニ於テ區町村會ノ議事若シ法ニ背キ又ハ治安ヲ害スルコトアリト認ムルキハ何時タリトモ區町村會ヲ停止シ又ハ之ヲ解散シテ改撰セシムルコトヲ得

第七條 前條ノ場合ニ於テ停止又ハ解散ヲ命シタルキハ更ニ開會ヲ命シ又ハ改撰スル迄ノ間區長戸長ハ經費ノ支出徵收方法ヲ定メ府知事縣令ノ認可ヲ得テ施行スルコト得

第八條 區町村ニ於テ議員ヲ撰舉セス又ハ議員招集ニ應セスレテ會議ヲ開クヲ得ス及議定スヘキ議案ヲ議定セス又ハ會期內ニ於テ議案ヲ評決シ終ラサルキハ前條ノ例ニ依ル

第九條 議員ヲ撰舉スルヲ得ヘキ者ハ滿二十歲以上ノ男子ニシテ其區町村ニ住居シ其區町村內ニ於テ地租ヲ納ムル者ニ限ル但府縣會規則第十三條第一款第二款第三款ニ觸ル、者及陸海軍々人現役ノ者ハ撰舉人タルコトヲ得ス

第十條 議員タルコトヲ得ヘキ者ハ滿廿五歲以上ノ男子ニシテ其區町村ニ住居シ其區町村內ニ於テ地租ヲ納ムル者ニ限ル但府縣會規則第十三條第一款第二款第三款第四款ニ觸ル者ハ議員タルコトヲ得ス

第十一條 區會ノ議長ハ區長町村會ノ議長ハ戸長ヲ以テ之ニ充ツ區長戸長若シ事故アルキハ區長戸長ニ於テ議員中ヨリ議長ヲ指定スルコトヲ得

第十二條 府知事縣令其管轄內ニ於テ町村會ヲ開設シ得ヘカラサル狀況アルヲ認ムルキハ内務卿ニ具狀シテ指揮ヲ請フヘシ

第十三條 府知事縣令ハ數區町村ニ關涉スル事件アルキ其區域ヲ定メテ聯合區町村會ヲ開設スルコトヲ得

第十四條 府知事縣令ハ水利土功ニ關スル事項ニシテ區町村會若シハ聯合區町村會ニ於テ評決スルヲ得サルモノアルキ特ニ其區域ヲ定メテ水利土功會ヲ開設スルコトヲ得

第十五條 聯合區町村會及水利土功會ハ總テ本法ニ準據ス其區域區長戸長數人ノ所轄ニ涉ルモノハ府知事縣令便宜郡區長ヲシテ之ヲ管理セシム但戸長ヲシテ其評決ヲ施行セシムルコトアルヘシ

◎第三章 勸業諮問會規則

○明治十六年五月十六日太政官第拾三號布達

各地方ノ便宜ニ從ヒ左ノ條項ニ照準シテ勸業諮問會并勸業委員ヲ設置スルヲ得

第一條 諮問會ハ各府縣勸業事務ニ付府知事縣令ノ諮問ニ備フルモノトス

第二條 諮問會員ハ府知事縣令ニ於テ管内農商工事ニ名望アル者ヲ選ンテ之ニ充ツ其人員并處務ノ順序等總テ府知事縣令適宜ニ之ヲ定ムヘシ

第三條 諮問會員ノ旅費日常ハ地方稅中勸業費ヲ以テ支辨スヘシ

第四條 勸業委員ハ區町村若シハ聯合區町村ニ於テ勸業ノ事ヲ擔任シ又ハ(區郡)長戸長ノ諮問ニ備フルモノトス

第五條 勸業委員ノ人員擧舉方法及ヒ處務ノ順序等ハ區町村會又ハ聯合區町村會ニ於テ之ヲ評定シ府知事縣令ノ裁可ヲ受クヘシ

第六條 區町村若シハ聯合區町村ニ於テ農業會商業會工業會又ハ農商工ヲ併セタル勸業會其他同業會ヲ設置スルルハ勸業委員ヲシテ會員メラシムルヲ得

第七條 府知事縣令ニ於テ勸業委員ノ設置及ヒ第六條ノ各會設立ヲ要用ト認ムルハ誘導シテ之ヲ設置セシムルヲ得此場合ニハ農商務卿ニ稟議シテ認可ヲ請クヘシ

第八條 勸業委員ノ旅費日當及第六條ノ各會諸費ハ區町村及ヒ聯合區町村ノ協議費ヲ以テ支辨シ又ハ關係各業者ニ於テ協議支辨スルヲ得但有志者ヲ以テ組織スル者ハ此例ニアラズ

第九條 農商務卿及ヒ主務ノ官署ハ各地方勸業上ノ件ニ付諮問會又ハ第六條各會ノ意見ヲ問フコトアルヘシ

諮問會又ハ第六條ノ各會ハ勸業上公益ノ件ニ付農商務卿及ヒ主務ノ官署ニ意見書又ハ報告書ヲ呈スルヲ得

○附錄

◎第一節 地方稅規則

○明治十三年四月八日太政官第拾六號布告

明治十一年(七月)第拾九號布告地方稅規則左ノ通改正候條此旨布告候事

第一條 地方稅ハ左ノ目ニ從ヒ徵收ス

一 限租三分一以內 (本ト五分一以內トアリシヲ明治十三年第(四拾八號布告ヲ以テ三分一以內ニ改ム)

- 一 營業稅並雜種稅
- 一 戶數稅

第二條 明治十五年一月二十日太政官第貳號布告ヲ以テ本條及ヒ第三條ヲ改正シ同年十二月二十八日太政官第六拾九號布告ヲ以テ第三條第二十項ヲ改正シ同十七年五月七日太政官第拾三號布告ヲ以テ第三條第十項ヲ改正ス即チ左ノ如シ

營業稅雜種稅ノ種類ハ別段ノ布告ヲ以テ之ヲ定ム

第三條 地方稅ヲ以テ支辨スヘキ費目左ノ如シ

- 一 警察費
- 一 警察廳舎建築修繕費
- 一 土木費
- 一 區町村土木補助費
- 一 府縣會議諸費
- 一 衛生及ヒ病院費

一 教育費

- 一 區町村教育補助費
- 一 郡區廳舎建築修繕費
- 一 郡區吏員給料旅費及ヒ廳中諸費
- 一 救育費
- 一 浦役場及難破船諸費
- 一 諸達書及揭示諸費
- 一 勸業費
- 一 戶長以下給料旅費
- 一 地方稅取扱費
- 一 府縣廳舎建築修繕費
- 一 府縣監獄費
- 一 府縣監獄建築修繕費

府縣廳ニ屬スル爲替方給料爲
換手數料現金遞送等ノ費用

以上費目互ニ流用スルヲ許サス
一 豫備費

豫算外ニ生シタル事件ノ費途
及豫算ノ臨時不足ニ充ツル者

第四條 (明治十七年十二月八日太政官第貳拾九號布告ヲ以テ本條第一項左ノ如ク改正ス其
年四月ヨリ翌年三月迄ヲ一週年度トナシ府知事縣令ハ前年十月迄ニ地方稅ヲ以テ支辨ス
ヘキ經費ノ豫算并地方稅徵收ノ豫算ヲ立テ翌年度ノ定額トナシ其府縣會ノ議決ヲ取り其
年二月ヲ以テ内務卿及大藏卿ニ報告スヘシ

○明治十五年十二月二十八日第六拾九號布告ヲ以テ第四條第五條左ノ如ク追加改正ス
地方稅ヲ以テ支辨スヘキ事件數年ヲ期シテ施行スルモノハ初年ニ於テ其年期間各年度ノ
經費豫算ヲ定メ府縣會ノ議決ヲ取り府知事縣令ヨリ内務卿ニ具狀シ認可ヲ以テ其年期間
之ヲ施行スルヲ得

第五條 非常ノ費用ハ(豫算)立ツルヲ得サル天災時變ノ費用豫備費ヲ以テ給足セサルモ
ノヲ云フ)別ニ賦課スルヲ得ルト雖モ其府縣會ノ議決ヲ取り内務卿及ヒ大藏卿ニ報告ス
ヘシ(其急施ヲ要スル云々以上ハ明治十四年二月十四日太政官第五號布告ヲ以テ削除ス)

前年度經費算決ノ場合ニ於テ已ムヲ得サル事故アリテ費目中不足ヲ生スルモノアルハ
府知事縣令ハ府縣會ノ議決ヲ取り其補充費ヲ徵收スルヲ得

第六條 地方稅徵收ノ期限ハ府知事縣令適宜ニ之ヲ定ムヘシ

第七條 (明治十四年二月十四日太政官第五號布告ヲ以テ左ノ通り改正ス)

府知事縣令ハ一週年度間ノ出納ヲ計査シ精算帳及ヒ計表ヲ製シ翌年通常會議ノ初メニ於
テ之ヲ府縣會ニ報告シ然ル後内務卿及ヒ大藏卿ニ報告スヘシ

第八條 (明治十四年二月十四日太政官第五號布告ヲ以テ削除ス故ニ畧ス)

第九條 囑囑ノ地方稅ニ係ル經費ハ府縣會ノ決議ヲ經テ府知事縣令ヨリ内務卿ニ具狀シ其
裁定ヲ得テ本屬府縣ノ經費ト之レヲ分別スルヲ得

○明治十三年十一月五日太政官第四拾八號布告中第三條左ノ如シ

第三條 府縣土木(即チ河港道路堤防橋梁建築修繕)費中官費下渡金ハ來ル十四年度ヨリ
廢止ス

○明治十三年四月八日太政官第拾七號布告

明治十一年(十二月)第三拾九號地方稅中營業稅雜種稅ノ種類及ヒ制限左ノ通改正候條此旨
布告候事

明治十五年太政官第三號布告ヲ以テ第一條第二條第五條第九條一改正シ第三條第六條第七
條ヲ削除ス

第一條 營業稅ヲ課スヘキ種類左ノ如シ但國稅アル者ハ課稅ノ限リアラス
商業

工業

第二條 雜種稅ヲ課スヘキ種類左ノ如シ

- 料理屋 待合茶屋 遊船宿 芝居茶屋 飲食店ノ類湯屋
- 理髮床
- 備人受宿
- 遊藝師匠 遊藝稼人 相撲 俳優 幫間 藝妓類ノ市場
- 演劇其他興行遊覽所

遊技場 射的吹矢ノ類
人寄席

船解漁船川船及五馬車人力車荷積馬車荷積大七
船拾石未滿海船八車荷積中小車荷積牛車ノ類

但國稅ノ額ヲ超過スヘカラス

氷車

乘馬

屠畜

漁業採藻ノ類

但漁業稅採藻稅ハ各地從來ノ慣例ニ依リ之ヲ徵收スヘシ若シ其慣例ヲ改正シ又ハ新

稅ヲ賦課セントスルモノハ府縣會ノ決議ヲ經テ府知事縣令ヨリ內務大藏兩卿ニ具狀

シ政府ノ裁可ヲ受クヘシ

第三條 (削除)

第四條 府知事縣令ハ府縣會ノ決議ヲ以テ第一條第二條類目中ニ於テ賦課スル者ヲ取捨ス

ルヲ得

第五條 府知事縣令ハ其賦課スベキ各業ノ盛衰ヲ視察シ府縣會ノ決議ヲ以テ各個ノ稅額ヲ查定スベシ

第六條 (削除)

第七條 (削除)

第八條 第四條第五條ニ於テ確定シタル課目課額ハ府知事縣令ヨリ內務大藏兩卿ニ報告スベシ

第九條 第一條第二條課稅種類ノ外地方特別ノ課稅ヲ要スルモノハ府縣會ノ決議ヲ經テ府知事縣令ヨリ內務大藏兩卿ニ具狀シ政府ノ裁可ヲ受クベシ

◎第四章 租稅怠納者處分規則

○明治十年十一月廿一日太政官第七十九號布告

租稅未納ノ者ハ從來怠納金ヲ徵シ本人身代限ヲ以テ取立ル等ノ處分モ有之處自今右處分ヲ廢止シ更ニ左ノ通區別相立處分致スベシ此旨布告候事

第一條 徵收期限(每期ヲ云)後三十日ヲ過テ尙國稅ヲ上納セサル時ハ之ヲ賦課シタル財產ヲ公賣シテ徵收スベシ若シ其財產他人ニ賣與讓與シタル時ハ之ヲ買受讓受タル者ヨリ完納セシムベシ

但書入質入(地所質入)ハ其規則ニ從フノ財產ニ未納稅アル時其債主ニ於テ辨納スベシト申立ル者ハ其意ニ任セ公賣ヲ行ハス

第二條 營業稅ヲ上納セザル時ハ其營業ヲ停止ス其製造品アル者ハ之ヲ公賣シ次ニ其器物ニ及ホスベシ

但釀造稅モ本條ニ據テ處分スベシ

第三條 府縣稅民費モ此規則ニ準シテ處分スベシ但各別ニ財產ヲ指定シテ賦課セサル民費徵收ニ付テハ土地家屋ヲ除キ他ノ財產ニ付先

取特權アリトス

第四條 凡租稅不納ニ付財產ヲ公賣セントスル時ハ地方官ニ於テ處分シ先ツ公賣ニ關スル入費ヲ引去リテ後國稅府縣稅民費ヲ徵シ剩餘アル時ハ之ヲ本人ニ還付ス若シ不足アル時

國稅府縣稅ハ官ノ損失ニ歸シ民費ハ該區ノ損失ニ歸ス
 但該財產ニ付テ區戶長役所ノ帳簿ニ記載アル債主アル時ハ其殘金ヲ順次其債主ニ給付ス

附則

此布告ニ矛盾スル布告布達ハ廢止ス

○明治十一年十月廿一日太政官第三十四號布告ヲ以テ左ノ二條ヲ追加ス

第五條 (明治十四年二月二十四日太政官第十五號布告ヲ以テ本條ヲ削除ス故ニ略ス)

第六條 財産公賣ノ際買受望人無之節該財産ハ之ヲ官沒スヘシ

○明治十七年五月十七日太政官第十五號布告

區町村會ニ於テ評決シタル區町村費及ヒ水利土功會ニ於テ評決シタル土木費ノ怠納者ハ總テ明治十年(十一月)第七十九號布告ニ據リ處分スヘシ若シ財産公賣ノ際買受望人ナキ片ハ官沒ノ手續ヲ爲サス郡區長又ハ戶長ニ於テ之ヲ管掌シ會議ノ評決ヲ取り府知事縣令ノ認可ヲ得テ處分スヘシ

但明治十四年四月第貳十四號布告ハ廢止ス

○明治十六年三月廿四日太政官第拾六號達

明治十年(十一月)第七十九號布告第一條但書ノ場合ニ於テハ債主ニ其未納稅アル旨ヲ通知シ債主之ヲ辨納セサル時ニ公賣ヲ行フヘキ儀ト可心得此旨相達候事

議會諸規則終

同業組合準則

○明治十七年十一月二十九日農商務省第三拾七號達

同業者組合ヲ結ビ規約ヲ定メ營業上福利ヲ増進シ濫悪ノ弊害ヲ矯正スルヲ圖ル者不勘候處
往々其目的ヲ達スルヲ能ハサル趣ニ付今般同業組合準則相定候條向後組合ヲ設ケ規約ヲ作
リ認可ヲ請フ者アルキハ此準則ニ基ツキ可取扱此旨相達候事

但認可ノ都度當省ニ届出ツヘシ

第壹條 農工商ノ業ニ従事スル者ニシテ同業者或ハ其營業上ノ利害ヲ共ニスル者組合ヲ設
ケントスルキハ適宜ニ地區ヲ定メ其地區内同業者四分ノ三以上ノ同意ヲ以テ規約ヲ作り管
轄廳ノ認可ヲ請フ可シ

第貳條 同業組合ハ同盟中營業上ノ弊害ヲ矯メ其利益ヲ圖ルヲ以テ目的ト爲ス可シ

第三條 同業組合ノ規約ニ掲クヘキ事項ハ左ノ如シ

第壹項 組合ヲ組織スル業名及組合ノ名稱

第貳項 組合ノ地區及事務所ノ位置

第三項 目的及方法

第四項 役員ノ撰擧法及權限

第五項 會議ニ關スル規程

第六項 加入者及退去者ニ關スル規程

第七項 費用ノ徵收及賦課法

第八項 違約者處分ノ方法

右ノ外組合ニ於テ必要トナス事項

第四條 組合ノ設アル地區内ニ於テ組合員ト同業ヲ營ム者ハ其組合ニ加盟スヘシ

但事業ノ規模及趣向ヲ異ニスルカ爲メ加盟シ難キカ或ハ加盟ヲ拒ムヘキ事情アルキハ管轄廳ニ申出テ其認定ヲ請フシ

第五條 同業組合ハ同業組合ノ資格ヲ以テ營利事業ヲ爲スヲ得ス

第六條 同業組合ハ總テ其事業及費用決算表ヲ毎年管轄廳ニ報告ス可シ

第七條 規約ヲ改正スルキハ更ニ認可ヲ請フ可シ

第八條 分立又ハ合併スルキハ更ニ規約ヲ作り認可ヲ請フ可シ

第九條 同業組合ニ於テ聯合會ヲ設ケ其規約ヲ作ルキハ管轄廳ノ認可ヲ請フ可シ

但其聯合ニ府縣以上ニ渉ルキハ開會地管轄廳ヲ經由シテ農商務省ノ認可ヲ請フ可シ

○附錄

◎第一節 蠶絲業組合準則

○明治十八年十一月二日農商務省第四拾壹號達

蠶絲業組合準則左ノ通相定候條該準則ニ基キ組合爲相立其規則認可ノ上取締所ニ係ルモノハ當省へ可届出此旨相違候事

第一條 蠶絲業ニ從事スルモノハ郡區又ハ町村ノ區畫ニヨリ組合ヲ設置スヘシ

但自用ノミニ供スル者ハ此限ニ非ス

第二條 組合ノ名稱ハ何(府縣)下何(郡區、町村)蠶絲組合ト稱スヘシ

第三條 組合ハ左ノ目的ヲ以テ規約ヲ定ムヘシ

第一項 繭ハ春夏秋若シハ黃白ノ種類又ハ大陽殺蒸殺燥殺等混消シタルモノヲ賣買セサ

ル事

- 第二項 製絲ニ最モ良好ナル種類ヲ育養スル事
- 第三項 桑樹ノ栽培蠶兒ノ養法ヲ全良ナラシムル事
- 第四項 繭ノ貯藏法ヲ完全ナラシムル事
- 第五項 蠶卵ノ検査法ヲ設ケ蠶病ヲ豫防スル事
- 第六項 繭荷造ノ上ハ其組合ノ名稱及製造者若クハ取扱人ノ姓名ヲ記入シタル標章ヲ付シ賣買スル事
- 第七項 一柵ハ勿論一認若クハ一柵中良否混雜等ノモノヲ製造販賣セサル事
但等級ヲ区分シテ一柵トナシタルモノハ此限ニアラス
- 第八項 生絲ノ製造及結束ニ不正ノ重量ヲ付シ賣買セサル事
- 第九項 繰取アル揚雙ヲ用ヒ尺度ヲ一様ナラシムル事
- 第十項 生絲ノ結束及認ノ量目ヲ一様ナラシムル事
- 第十一項 提造嶋田折返造等ノ生絲ヲ揚返サスシテ其儘改造賣買セサル事

- 第十二項 生絲検査法ヲ設ケ其精粗ヲ監別シ及ヒ製造上ノ弊害ヲ矯正スル事
- 第十三項 生絲荷造ノ上ハ其組合ノ名稱及製造者若クハ取扱人ノ姓名ヲ記入シタル標章ヲ付シ賣買スル事

- 第四條 各組合ハ委員ヲ設ケ組合中ノ事務ヲ擔任セシムヘシ
- 第五條 組合員ハ必其組合ノ證票ヲ携帯スヘシ但證票ニハ管轄地方廳ノ檢印ヲ受クヘシ
- 第六條 組合委員ハ時々組合内ノ實況ヲ検査スヘシ
- 第七條 各府縣下便宜ノ地ニ取締所ヲ置キ各組合ヲ統轄シ組合規約ノ實施ヲ監査スヘシ
- 第八條 取締所ノ役員ハ各組合ノ委員中ヨリ互撰スヘシ
- 第九條 組合及取締所ニ關スル費用収支ハ各組合員集議ヲ以テ之ヲ定ムヘシ
- 第十條 全國中便宜ノ地ニ蠶絲組合小支部ヲ設各地方蠶絲組合取締所ノ氣脈ヲ聯通スヘシ
- 第十一條 蠶絲組合中央部ノ規約ハ管省ノ認可ヲ受クヘシ
- 第十二條 蠶絲組合中央部ノ役員ハ各地方蠶絲取締所ノ役員中ヨリ互撰スヘシ
但時宜ニヨリ役員外ノ者ト雖モ之ヲ撰舉スルヲ得

第十三條 蠶絲組合中央部ノ費用収支ハ各地蠶絲組合取締所役員ノ集議ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第十四條 右各條ノ外組合ニ於テ必要ト爲ス事項ハ適宜ニ其規約ヲ設クル事ヲ得

◎第二節 茶業組合準則

○明治十八年三月三日内務省農商務省第四號達

近來着色偽似ノ茶ヲ製出シ又ハ不良茶ヲ混淆シテ販賣候者有之趣右者正業者ノ妨害ト可相成ハ勿論人身ノ健康ニモ相關リ候儀ニ付各管内ニ於テ茶業ニ従事スル者ハ左ノ茶業組合準則ニ基キ組合爲相立其規約認可ノ上農商務省へ可届出此旨相達候事

第一條 茶業ニ従事スル者ハ製造者ト販賣者トヲ問ハス郡區又ハ町村ノ區畫ニヨリ組合ヲ設置スヘシ

但自用茶ノミヲ製スル者ハ此限りニアラス

第二條 組合ノ名稱ハ何縣府下何郡區町村茶業組合ト稱スヘシ

第三條 組合ハ左ノ目的ヲ以テ規約ヲ定ムルシ

第一項 他物若クハ惡品ヲ混淆シ或ハ着色スル等總テ不正ノ茶ハ製造賣買セサル事

第二項 乾燥法及ヒ荷造方ヲ完全ニスル事

第三項 製茶荷造ノ上ハ必組合ノ名稱及ヒ製造人、販賣人ノ姓名ヲ記スル事

第四條 各組合ハ委員ヲ設ケ組合中ノ事務ヲ擔任セシムヘシ

第五條 組合員ハ必ス其組合ノ證票ヲ携帯スヘシ

但證票ニハ府縣廳ノ檢命ヲ受ク可シ

第六條 組合委員ハ時々組合内ノ實況ヲ檢査スヘシ

第七條 各府縣下便宜ノ地ニ取締所壹箇所ヲ設ケテ各組合ヲ統轄スヘシ

第八條 取締所ノ役員ハ各組合ノ委員中ヨリ互選スヘシ

第九條 組合及ヒ取締所ニ關スル費用ハ各組合員ノ協議ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第十條 右各條ノ外組合ニ於テ必要ト爲ス事項ハ適宜ニ其規約ヲ設ルヲ得

○明治十七年十二月九日農商務省第三拾八號達

本年當省第四號達茶業組合準則第十條ヲ第十四條ニ繰下ケ左ノ四箇條追加候條此旨相達候

事

第十四條 全國中便宜ノ地ニ中央茶業組合本部ヲ設ケ各地茶業組合取締所ノ氣脈ヲ聯通スヘシ

第十一條 中央茶業組合本部ノ規約ハ農商務卿ノ認可ヲ受シヘシ

第十二條 中央茶業組合本部ノ役員ハ各地茶業組合取締所ノ役員中ヨリ互選スヘシ

○明治十八年一月一日農商務省第貳號達ヲ以テ左ノ但書ヲ追加ス

但時宜ニヨリ役員ノ者ト雖モ之ヲ選舉スルヲ得

第十三條 中央茶業組合本部ノ費用ハ各地茶業組合取締所役員ノ協議ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第十四條 右各條ノ外組合ニ於テ必要ト爲ス事項ハ適宜ニ其規約ヲ設ルヲ得

◎第三節 驛傳營業取締準則

○明治十七年十一月二十六日農商務省第三拾五號達

明治八年五月三十日陸運會社解社以後驛傳取締上一定ノ規則不相立候處行旅ノ不便運輸ノ不利不少候趣ニ付今般左ニ驛傳營業取締準則相示候條右準則ニ基キ驛傳營業取締規則取設

ケ農商務卿ヘ届出ツヘシ此旨相達候事

但該取締規則取設ケテ要セスト認ムルキハ其事由詳細申出ツヘシ

第一條 驛傳營業取締ノ爲メ驛ニ據リ該營業人(陸運受負人馬繼立及旅人宿營業并ニ陸運

稼業人)ヲ便宜分割シテ其組合ヲ爲サシムヘシ但驛ニ據ル能ハサルモノハ別ニ其組合ト

爲スヲ得ヘシ

第二條 驛ニハ組合營業人ヲシテ驛傳取締所ヲ設立セシムヘシ但驛ニ據ラサル組合ニ於テ

ハ驛外ノ地ニ設立セシムヘシ

第三條 驛傳取締所ハ驛傳營業ノ取締ヲナシ又驛傳營業ヲ兼ヌルヲ得ヘシ

第四條 驛傳營業組合ニハ驛傳取締人ヲ置カシムヘシ

第五條 驛傳取締人ハ其組合及驛傳取締所ノ事務ヲ掌理スヘキモノトス

第六條 驛傳取締人定員選舉方法及事務條項ハ管轄廳ニ於テ便宜之ヲ定ムヘシ

第七條 各組合營業人ニハ規約書ヲ設ケシメ認可ノ上農商務省ニ届出ツヘシ

第八條 組合營業人規約書ニハ左ノ項ヲ記セシムヘシ

同業組合準則

一 諸賃錢定額

一 驛傳取締所及組合費用并ニ驛傳取締人手當等收支方法

一 驛傳取締所及組合事務條項

一 前諸項ノ外營業上必要ノ件

第九條 驛傳營業人組合及驛傳取締所ノ費用并ニ驛傳取締人ノ手當等ハ組合營業人ニ負擔セシムルヲ得ヘシ

第十條 驛傳營業人ニシテ組合外ノ地ニ到リ營業スルキハ其地組合規則ニ從ハシムヘシ

第十一條 驛傳營業人ニ非サル者ニハ賃錢若クハ手數料ヲ受テ驛傳營業ヲ爲サシムヘカラス

第十二條 此準則ニ據テ定ムル驛傳營業取締事務條項ノ外各種驛傳營業人取締細則ヲ設クヘシ

第十三條 此準則ニ基キ警視總監府知事縣令ニ於テ取設ケタル取締規則ニ違背シタルモノハ違警罪ヲ以テ罰スルノ外營業ヲ停止シ又ハ禁止スヘシ

同業組合準則終

監獄則

○明治十四年九月十九日太政官第八拾壹號達

明治五年達監獄則及ヒ本年(三月)第拾三號達在監人給與規則同(七月)第六拾四號達在監人雇丁錢規則ヲ合セテ別冊ノ通監獄則相定候條此旨相達候事

但明治十五年一月一日以後施行ノ刑法治罪法ニ關涉スル條件ハ同日ヨリ施行スヘシ

監獄則目錄

第一編

第一章 汎則

第二章 監署ノ規程

第三章 監獄ノ構造

第二編

第一章 役法 附時限

第二章 工錢

監獄則

第三章

徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ヲ受タル囚徒押送

第四章

假出獄免幽閉ノ者ニ貸與スル屋舎

第三編

第一章

給與

第二章

疾病 附死亡

第三章

書信

第四章

接見

第五章

差入品

第四編

第一章

教誨

第二章

賞懲

第三章

懲罰

監獄則

第一編

第一章 汎則

第一條

監獄ヲ別テ左ノ六種ト爲ス

一 留置場

裁判所及ヒ警察署ニ屬スル者ニシテ未決者ヲ一時留置スルノ所トス但時宜

ニ由リ拘留ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘留スルコトヲ得

二 監倉

未決者ヲ拘禁スルノ所トス

三 懲治場

懲治人ヲ懲治スルノ所トス

四 拘留場

拘留ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘留スル所トス

五 懲役場

懲役ノ刑及ヒ禁錮ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘禁スルノ所トス

六 集治監

徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ニ處セラレタル者ヲ集治スルノ所トス

北海道ニ在ル本監ハ徒刑流刑ニ處セラレタル者ヲ集治ス

第二條

監獄ハ内務卿ノ管轄ニ屬ス但陸海軍ノ管轄ニ屬スルモノハ此限ニ非ラス

第三條

集治監ハ内務卿之ヲ直轄ス留置場監倉懲治場拘留場懲役場ハ警視總監又ハ府知事

東京府 縣令之ヲ管理ス

第四條 此獄則ハ特ニ陸海軍ノ獄則ヲ以テ處スヘキ者ニ適用スルコトヲ得ス

第五條 內務卿ハ毎年其所屬官吏ヲシテ各監獄ヲ巡閱セシムヘシ

警視總監府知事縣令ハ毎年三四次所轄ノ監獄ヲ巡閱スヘシ裁判官檢察官ハ時々其裁判所

ニ屬スル監倉ヲ巡閱スヘシ

府縣會議員ハ臨時其府縣監獄ヲ巡閱スルコトヲ得

第六條 在監人ト稱スルハ未決已決ノ者及ヒ第十九條三十條ニ記載シタル者ヲ云フ

第七條 在監人ヨリ司獄官吏ノ處置ニ對シ若シ苦情ヲ訴ヘントスルトキハ第五條第一項第

二項ニ記載シタル官吏巡閱ノ際封書又ハ口述ヲ以テ申告スルコトヲ得

第二章 監署ノ規程

第八條 司獄官吏在監人ヲ管束スルハ一ニ和平ヲ秉リ罰例ニ照シテ犯則者ヲ決責スルノ外

恣ニ責罰スルヲ得ス

第九條 典獄監守長ハ日夜不時ニ監房ノ内外ヲ視察シ或ハ物件ヲ査閱シ其他囚徒ノ假情ヲ

生シ脱越等ノ事ナカラシムルヲ要ス

第十條 新ニ入監スル者アルトキハ典獄先ツ拘引狀拘留狀收監狀又ハ所刑宣告書等ヲ査閱

シテ之ヲ領シ其領收ノ證ヲ引致シ來タル者ニ交付ス其文書無クシテ引致セラレタル者ヲ入

監スルヲ得ス未決者ノ中共犯人アルトキハ其監房ヲ別異シ談話通聲ヲ禁シ法廷ニ引致ノ

時モ同往セシムルヲ得ス

已決囚ハ第十六條ニ記載シタル差別ニ從ヒ其監房ヲ別異ス

第十一條 入監ノ婦女乳兒三歲ヲ滿未滿ヲ攜帶セント請フ者アルトキハ之ヲ許ス

第十二條 斯ニ入監スル者アルトキハ名籍ノ樣本ニ照シ其要項ヲ詳録シ一小房內ニ於テ通

身ヲ搜檢シ利器其他ノ物件ヲ夾帶スルヲ拒クヘシ懲治人ノ監舍ニ入ルトキモ亦同シ

第十三條 總テ監房ニ入ル、物品ハ典獄一々之ヲ精驗シ其危險ノ虞アルモノハ一切之ヲ禁

スヘシ

第十四條 總テ入監人ノ携有スル財貨物件ハ悉ク點檢シテ其名數ヲ簿冊ニ記載シ典獄一々

證印シテ之ヲ領置シ釋放ノ時還付スヘシ但點檢ノ際匿セン貨物ハ沒收ス

若シ其領置ノ貨物ヲ以テ親屬ヲ扶助シ其他正當ノ費用コ充ント請フトキハ之ヲ許ス

第十五條 在監人書籍ヲ看ント請フトキハ新聞紙及ヒ時事ノ論說ヲ記載スルモノヲ除キ脩身又ハ營業ニ必要ナルモノ、ミナ許スヘシ

第十六條 已決囚ハ各刑名ニ從テ其監房ヲ別異シ又其中ニ就テ左ニ記載シタル者ヲ別異ス
一 十六歳未滿ノ者ト滿十六歳以上ノ者

二 滿十六歳以上二十歳未滿ニシテ再犯以上ノ者ト同上ノ年齢ニシテ初犯ノ者
三 初犯ノ者ト再犯以上ノ者

第十七條 要犯疑獄ニ係ル者ヲ拘禁スル未決監ニ於テハ其氏名ヲ呼ハス番號ヲ以テ之ニ換フヘシ但着衣外襟ニ白布ヲ縫着シ其番號ヲ墨書シ監房ヲ出入スル毎ニ皂布ヲ以テ覆面シ當眼ノ所ニ小孔ヲ穿テ其犯者ヲシテ共ニ拘禁ノ身タルヲ窺探スルヲ得サラシム

第十八條 放恣不良ノ者ヲ懲治場ニ入レ矯正歸善セシメント其尊屬親ヨリ願出ルトキハ第二十條第一項ノ例ニ照シテ處分スヘシ

矯正歸善ノ爲メ懲治場ニ入ルヘキ者年齢ハ滿八歳以上滿二十歳以下ヲ限トス

第十九條 懲治人ト稱スルハ左ニ記載シタル者ヲ云フ

一 刑法第七十九條第八十條第八十二條ニ從ヒ懲治場ニ留置スル幼年ノ者及ヒ瘖啞者
二 尊屬親ノ情願ニ由テ懲治場ニ入レタル者

第二十條 前條二款ニ記載シタル懲治人ハ戶長ノ證票ヲ具スルコ非レハ入場ヲ許サス但在場ノ時間ハ六箇月ヲ一期トシ二年ニ過ルヲ得ス

入場ヲ請ヒシ尊屬親ヨリ懲治人ノ行狀ヲ試ル爲メ宅舍ニ帶往セント請フトキハ其情狀ニ由リ之ヲ許スヘシ

第二十一條 懲治人ハ左ノ年齢ニ從ヒ其居房ヲ別異ス

一 十六歳未滿ノ者ト十六歳以上ノ者
二 滿十六歳以上二十歳未滿ニシテ再ヒ懲治場ニ入シ者ト同上ノ年齢ニシテ初テ入場スル者

第二十二條 在監人ヲ他監ニ移ストキハ其名籍又ハ處刑ノ宣告書其他必用ノ文書及ヒ領致ノ貨物ヲ具シテ送致スヘシ其發遣ノ途中ニ在テノ行狀ハ押送官吏之ヲ記述シテ典獄ニ知

會スヘシ

在監人ヲ裁判所又ハ他監ニ押送スルトキハ戒具ヲ用ヒ男ト女ヲ別ツヘシ但懲治人ハ戒具ヲ用ヒス

第二十三條 典獄ハ看守長及ヒ看守ヲシテ常ニ在監人ノ行狀ヲ録サシメ賞罰ヲ行フノ考據トナスヘシ

第二十四條 賞表ヲ與ヘタルトキハ賞譽簿ニ其氏名及ヒ賞詞ヲ記載シ被奪シタルトキハ之ヲ削除スヘシ但其賞罰ヲ行ヒタル旨ヲ囚徒ニ示スハ第二十六條ノ例ニ依ルヘシ

第二十五條 特赦アリタルトキハ速ニ其旨ヲ内務卿ニ申報スヘシ

第二十六條 特赦ヲ受タル者アルトキハ免役日若クハ日曜日ノ午後ニ在テ他ノ囚徒ヲ集メ其旨ヲ聽カシメ仍ホ之ヲ揭示スヘシ

第二十七條 假出獄ヲ許サレタル者ニハ其證票ヲ與ヘ警察廳傳ヲ以テ其居住セントスル地ニ押送スヘシ
監署ニ領置セシ金錢ハ出獄者ニ携帶セシメス其金員ヲ録シテ共ニ其地ノ警察官六十條第

二項ニ記載ニ送致スヘシ
シクル官吏

第二十八條 假出獄免幽閉ヲ受タル徒刑流刑ノ者其刑期間ハ典獄ニ於テ營業ノ方法ヲ指示シ其來署ヲ要スルトキハ召喚スルコトヲ得

第二十九條 在監人中能ク獄則ヲ守ル者ヲ撰テ傳告者誘工者トナス傳告者ハ官吏ノ命令ニ在監人ニ傳ヘシメ誘工者ハ工場ニ在テ服役者ヲ勸誘セシム但傳告者誘工者ハ滿六箇月以上其用務ヲ繼續セシムルヲ得ス

傳告者及ヒ誘工者ハ私ニ在監人ヲ使役シ若クハ凌辱スルノ所爲アルヲ許サス
第二十條 刑期滿限ノ後頼ルヘキ者ナキ者ハ其情狀ニ由リ監獄中ノ別房ニ留メ生業ヲ營マシムルヲ得

第三十一條 刑期滿限ノ者ヲ解スルハ滿期ノ翌日午前第十時ヲ過クヘカラス
第三十二條 死刑ノ執行ハ午前第十時ヲ過クルヲ得ス其執行中ハ看守ヲシテ嚴ニ刑場ノ門戸ヲ護ラシムヘシ

其遺骸ハ死相ヲ驗シタル後仍ホ二分時ヲ過キサレハ埋葬若クハ下付スルヲ得ス

第三十三條 死刑者又ハ死亡者アルトキハ其年月日時ヲ記シ典獄ヨリ本籍ノ戸長及ヒ近地ノ親屬若クハ故舊ニ通知スヘシ其監署ニ領置シタル貨物ハ親屬ニ下付ス若シ親屬ナキトキハ遺骸ヲ領取シタル故舊ニ之ヲ下付ス但死者ノ身ニ纏ヒタル衣服ハ此限ニ在ラス親屬遠地ニ在テ物品ヲ送付スルコト入費ヲ要スルモノハ其物品ヲ販賣シテ代價ヲ送付スルコトヲ得但送費ハ親屬ノ自辨トス

若シ其物件又ハ代價ヲ受クヘキ者ナキ時ハ之ヲ沒收ス

第三十四條 在監人逃走スル者アル時領置ノ貨物ハ前條ノ例ニ依テ處分スヘシ但沒收ハ逃走ノ日ヨリ滿一個年ヲ經ルノ後ニ非レハ之ヲ處分スルコトヲ得ス

領置ノ工錢ハ第五十七條ニ照シテ處分スヘシ

第三十五條 監獄ノ近境ヨリ發火シテ罹災ノ虞アルトキハ司獄官吏其形勢ヲ量リ在監人ヲ他所ニ押送シ其災ヲ避シムヘシ

水火風災其他激甚ナル變災ニ際シ在監人ヲ押送スルノ邊ナキトキハ要犯疑獄ニ係ル者ヲ除クノ外一時解放スルヲ得

第三十六條 留置場監倉懲治場拘留場懲役場ハ每府縣ニ置キ集治監ハ適當ノ地ニ之ヲ置クモノトス

留置場監倉懲治場拘留場懲役場一區畫内ニ在ルモノハ墻壁ヲ以テ之ヲ區畫スヘシ

第三十七條 未決監已決監及ヒ懲治場ハ男監女監ノ別ヲ嚴劃スヘシ

甲ノ監房ニ在ル者ト乙ノ監房ニ在ル者ト彼是交談シ又ハ物件ヲ交遞スルノ便ヲ得サラシムヘシ各監房ノ鑰匙ハ其製式ヲ同シク甲乙適用スルヲ要ス

第二十八條 密室ハ監倉ニ設ケ他人ト交通スルヲ得サラシムヘシ密室ハ已決監ニ設ケ暗ニ空氣ヲ通セシメ電モ光線ヲ通セシメサルヲ要ス

密室密室ハ一室一人ヲ限トス

第二十九條 接見室ハ監倉ノ首部ニ設ケ其壁面ニ方三尺ノ口ヲ開キ之ニ縱横ノ格子ヲ依メ格子ヨリ三尺許ヲ距リ柵欄ヲ設ケ在監人ハ格子内ニ立シメ外人ハ格子外ノ柵欄ニ倚ラシムヘシ但懲治人ノ接見室ハ此例ヲ用ヒス

第四十條 燈火ハ監房外ニ置キ障碍スルノ虞ナカラシムヘシ

第四十一條 死刑場ハ監獄ノ一隅ニ設ケ墻壁ヲ以テ外見ヲ防クヘシ

第二編

第一章 役法 附時限

第四十二條 定役ニ服スル者ノ作業ハ刑名ニ因テ之ヲ斟酌シ毎囚一日ノ科程ヲ定メテ服役セシム滿十二歳以上十六歳未滿ノ者滿十六歳以上ノ者及ヒ病後ノ疲勞若クハ身體ノ虛弱ニ因リ勞作ニ勝ヘサル者ハ體方ニ應シ作業ノ科程ヲ寬恕ス若シ已ムヲ得ス外役ニ服セシムルトキハ鉄鎖ヲ用テ二囚毎ニ聯絆シ笠ヲ用テ晴雨ヲ其面ヲ掩ハシム但外行ノ囚役ハ一組十人以上十五人以下ト定メ看守一人押丁二人以上ヲシテ之ヲ監セシム外役ノ囚徒道路往來スル時ハ務メテ他人通行ノ妨ト爲ラサラシムルヲ要ス

第四十三條 毎日囚徒ヲシテ役ニ就カシムルニ際シ悉ク之ヲ監房外ニ整列セシメ看守長及ヒ看守點檢ヲナスヘシ歸監セシムル時モ亦同シ

第四十四條 左ニ記載シタル日ハ服役ヲ免ス父母ノ喪ニ遭フ者モ亦一日免役ス

一月一日

一月二日

元始祭

孝明天皇祭

紀元節

春季皇靈祭

神武天皇祭

秋季皇靈祭

神嘗祭

天長節

新嘗祭

十二月三十一日

第四十五條 囚徒ノ專習スヘキ工業ハ授業手若クハ工業殊等ノ囚ヲシテ之ヲ導カシム其刑期一年以下ノ者ニハ習熟シ易キ工業ヲ授クルヲ要ス

第四十六條 定役ニ服セサル囚徒ト雖ハ典獄之ヲ勸誘シテ其將來ノ生業ヲ計リ攝生又ハ親屬扶助ノ爲メ勞作セント請フコ至ラシムルヲ要ス其工業ノ種別ヲ定ムルハ典獄ノ指示ニ依ル

未決監ニ在ル者坐作ノ業ヲ爲サント請フトキハ亦同シ

第四十七條 懲治人ニハ教誨ニ充ル爲メ服役時間表ニ準シ七時ニ過キサル時間 休憩時 農業 間ヲ除

若クハ工藝ヲ教ヘ力作セシムヘシ

時限

第四十八條 未決者及ヒ定役ニ服セサル已決囚ハ毎朝日出ノ頃ニ起床シ各其監房ヲ掃除シ
罪リ喫飯セシム又毎日一時間以内監房外ニ於テ運動ヲ許ス

第四十九條 定役ニ服スル者ハ毎朝日出ノ頃ニ起床シ各其監房ヲ掃除シ畢テ喫飯セシム其
起床ヨリ約子一時間ヲ經テ役ニ就カシメ午前一時前後ニ至テ湯若シハ水ヲ與ヘ正午十二
時ニ至リ休役ス飯後暫時休憩シ再ヒ就役日没前罷役セシム其時間ハ別表ニ之ヲ定ム但時
宜ニ由リ其時間ヲ伸縮スルヲ得

起床還房及ヒ就役其他ノ動止ヲ令スルハ鈴若クハ柝ヲ以テシ全監一齊ニ動止セシム

第五十條 科程ヲ終リタル者ハ時限ニ拘ハラズ罷役セシム
午飯ニ就カシムルノ際科程ノ大半ヲ爲シ得タルヤ否ヲ驗視スヘシ
若シ偷懶ニシテ怠役スル者ハ飯後ノ休憩ヲ許サス

第二章 工錢

第五十一條 定役ニ服スル囚徒現役一百日ヲ經レハ始テ各自ノ工錢ヲ科定シ之ヲ十分シ重
罪囚ニハ其一分輕罪囚ニハ其二分ヲ與ヘ餘分ハ之ヲ監署ニ收ム

定役ニ服セサル囚徒及ヒ未決監ニ在ル者並ニ第十九條第一款ニ記載シタル懲治人ニシテ
作業スル者ノ工錢ハ十分シテ其三分ヲ監署ニ收メ其七分ヲ與フ定役ニ服スル囚徒ニシテ
日當ノ科程ヲ畢テ仍ホ作業スル者科程外ノ工錢モ又同シ

第五十二條 第十九條第二款ニ記載シタル懲治人ニシテ其尊屬親ヨリ衣食費ヲ自辨スル者
ノ工錢ハ其全分ヲ與ヘ衣食費ヲ自辨スルヲ能ハサル者及ヒ第三十條ニ記載シタル者ハ工
錢ノ内ヨリ衣食費ヲ扣除シ餘分ハ之ヲ與フ

第五十三條 在監人ニ與フヘキ工錢ハ監署ニ領置シ毎月ノ首ニ於テ其前月ノ總計金額ヲ本
人ニ知ラシムヘシ

第五十四條 各種ノ工錢ハ其地普通ノ傭工錢ヲ準トシ各自ノ技能ニ應シ一日若干錢ト定ム
ヘシ

第五十五條 監署ニ領置ノ工錢ハ本人ノ請ニ由リ親屬ニ贈與スルヲ許シ又ハ書籍其他必要

ノ物品及ヒ第六十九條ニ從ヒ食物ヲ購ヒ之ヲ給スルヲ得

第五十六條 在監人死亡シ監署ニ領置ノ工錢アルトキハ第三十三條ノ例ニ照ラシテ處分ス
ヘシ

第五十七條 在監人若シ逃走シタルキハ已決囚ノ工錢ハ之ヲ沒收ス
未決者及懲治人ノ工錢ハ其親屬ニ下付ス親屬無レハ之ヲ沒收ス

第三章 徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ニ處セラレタル囚徒押送

第五十八條 徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ニ處セラレタルモノアルトキハ其宣告書ノ謄書ヲ具シ
テ内務卿ニ申報シ其指揮ニ從ヒ警察遞傳ヲ以テ集治監ニ押送スヘシ

北海道集治監ニ於テ管束スヘキ徒流刑ノ囚徒ハ本監官吏ノ臨時派出シタル地マテ押送ス
ヘキモノトス

第五十九條 北海道ニ在ル集治監ハ毎歲三四次官吏ヲ派出シ前條第二款ノ例ニ從ヒ押送シ
タル徒刑流刑ノ囚徒ヲ受取ヘシ

第六十條 徒刑流刑ノ囚徒ヲ押送スル時ハ戒具ヲ用ヒ男囚ト女囚トヲ別ツヘシ遞船中ニ在

テハ戒具ヲ用ヒサルモ妨ナシ

第四章 假出獄免幽閉ノ者ニ貸與スル屋舎

第六十一條 假出獄免幽閉ヲ受タル徒刑流刑ノ者其地ニ居住スヘキ家ナキトキハ屋舎ヲ貸
與スヘシ

屋舎ヲ構造スルハ將來市街村落ヲ創置スルノ便ヲ計畫スルヲ要ス

第六十二條 假出獄免幽閉ヲ受ケタル徒刑流刑ノ者其配偶者又ハ其他ノ親屬ヲ招キ同居セ
ント請フトキハ典獄將來營生ノ方法ヲ取亂シ之ヲ許否スヘシ

前項ノ請ヲ許ストキハ其配偶者又ハ其他ノ親屬現住スル地ノ戸長ニ通告スヘシ
其徒刑流刑ノ者嫁娶ヲ爲サントスルトキハ監署ニ申告セシメ典獄之ヲ許否スヘシ

第三編

第一章 給與

第六十三條 已決囚ノ獄衣類ハ總テ之ヲ貸與ス

第六十四條 未決者ノ衣類ハ總テ自辨トス臥具ハ之ヲ貸與ス若シ臥具ヲ自辨セント請フ者

其ノ之ヲ許ス貧困ニシテ衣類ヲ自辨スルヲ能ハサル者ニハ之ヲ貸與ス

第六十五條 已決囚ノ獄衣ハ赭色トシ懲治人ノ衣服ハ淺葱色トス

第六十六條 獄衣ハ總テ筒袖トシ長短二種ニ別ツ男ノ通常服ハ長衣就役衣ハ短衣トシ女服ハ總テ長衣トス

獄衣ノ外襟ニハ白布ヲ縫右シ之ニ番號ヲ墨書スヘシ

第六十七條 在監人ニ貸與スル衣類雜具

通常服 通常服ハ...

一 單衣

一 裕

一 綿入衣

一 襦袢

一 單短衣

一 單短衣

一 裕短衣

一 綿入短衣

一 襦袢

一 股引

一 雜具

一 漕圓

一 蚊張

一 莞筵

一 枕

一 帶長尺

一 襖長尺

一 手巾

一 鏡

一笠

以上ノ貸與品ハ地方ノ便宜ニ依リ之ヲ斟酌取捨シ淋瀝補綴シテ其用ニ充ルヲ得

第六十八條 在監人一人一日ノ食糧

一 下白米十分ノ四挽割麥十分ノ六 七合 強キ力業ニ服スル者

一同 五合 輕キ力業ニ服スル者

一同 四合 工役ニ服セサル者及ヒ滿十歳以上ノ未決者

一同 三合 十歳未満ノ幼者

一茶 金壹錢五厘以下

地方ノ便宜ニ依リ稗ノ類ヲ以テ麥ニ代用スルヲ得

第六十九條 工業ニ勉勵シテ食費ヲ拂フヘキ工錢ヲ得ル者及ヒ其幾倍ヲ得ル者等ニハ其請

得ス 二由リ領置シタル工錢ヲ以テ食物ヲ購ヒ之ヲ給スルコトヲ得但一日金三錢ヲ過ルコトヲ得

定役ニ役セサル者コハ其請ニ由リ領置シタル工錢ヲ以テ食物ヲ購ヒ之ヲ給スルコトヲ得

但一日金五錢ヲ過ルコトヲ得ス

第七十條 在監人日用ノ雜費 淋瀝補綴又ハ飲用ノ薪炭 一人一日金壹錢貳厘以下トス 其他一身ニ係ル日常諸費

第七十一條 監房常備ノ器具

一貯水器并ニ飲器 木製

一唾壺 同

一便器 木製大小二種但監房ニ附圖ノ接續スルモノニハ此器ヲ用ヒス

一小箒 草ノ種類ヲ以テ製作セシ軟カナルモノ

一洗手盆 木製

第七十二條 浴湯ノ定度ハ毎年六月ヨリ九月マテハ五日毎コ一次十月ヨリ五月マテハ十日

毎コ一次トス

第七十三條 已決囚及ヒ懲治人ノ髮ハ常コ之ヲ短薙シ髻鬚アル者ハ常ニ剃除セシム但未決

者ハ此限ニ在ラス

婦女ノ梳髮ハ膏ヲ用ヒテ裝飾スルヲ許サス

第七十四條 衣類雜具其他ノ物品ハ種質ニ由リ時々熱湯ヲ用ヒテ之ヲ滌ヒ臭氣ヲ去リ蟲害ヲ防リテ要ス但病者ノ物品ト混一シテ之ヲ晒洗スヘカラス

第二章 疾病 附死亡

第七十五條 在監人疾病ニ罹レハ病狀ノ輕重ヲ料リ其監房若クハ病室ニ於テ醫療セシム懲治場ニ在ル者ハ情狀ニ由リ其親屬ニ交付スルコトヲ得

第七十六條 病者ノ攝養ニ効アル飲食物又ハ温ヲ取ル湯婆等ヲ用ルコトヲ要スルトキハ醫師ヲシテ其旨ヲ證明セシメ典獄之ヲ考檢シテ許否スヘシ

第七十七條 傳染病侵襲ノ兆アルトキハ其消毒豫防ヲ慎重ニスヘシ若シ在監人中傳染病者アルトキハ直ニ病性及ヒ感染ノ形狀ヲ詳悉シ醫師ノ診察書ヲ副へ各其所屬長官ニ報告ス

死亡

第七十八條 在監人死亡シタルハ典獄看守長醫師并莅テ之ヲ驗屍スヘシ未決者又ハ已決囚ニシテ別故アリ再ヒ訊問ニ係ル者死亡シタルトキハ之ヲ其裁判所ニ申

報スルコトヲ得

第七十九條 死者ハ親屬若クハ故舊第三十三條ニ記載シタル時限三時二十四時以内ニ在テ

遺骸ノ下付ヲ請フトキハ之ヲ許シ其者ヲシテ簿冊ニ署名押印又ハ花押セシムヘシ

遺骸ヲ請フ親屬故舊ナキトキハ棺ニ入テ假葬ス其上ニ氏名標ヲ建ツヘシ其標ハ約子面三寸長三尺五寸トス

第三章 書信

第八十條 已決囚其親屬故舊ニ書信ヲ贈ルハ六個月間ニ一次トシ一通ニ過ルコトヲ得ス但其他官司ノ訊問等ニ由テ書信ヲ要スルトキ又ハ親屬故舊ヲ回答セシム請ヒ司獄官更ニ於テ法律ニ觸ルコトナク且必用ト認メタルトキハ此限ニ在ラス

第八十一條 未決者ニ係ル書信ハ定限ナシ但像審判事又ハ檢事ハ檢閱を経ルニ非レハ贈答セシムルヲ得ス

第八十二條 懲治人及ヒ幼年ノ已決囚其親屬故舊ニ贈ル書信ハ一個月一次トシ一通ニ過ルコトヲ得ス

第八十三條 在監人ノ發スル書信ハ典獄之ヲ檢閱スヘシ若シ書中忌諱ニ渉ル等ノ文意アルトキハ通信ヲ許サズ

第八十四條 外人ヨリ在監人ニ贈リ來タル書信ハ典獄之ヲ檢閱シ適正ノ事項ヲ陳ヘ又ハ選善ノ諭示ヲ主トシタルモノニ限り之ヲ本人ニ付與ス若シ在監人改悛ヲ妨ルモノト認ルトキハ之ヲ付與セズ

第八十五條 信書ヲ檢閱スルハ先ツ直行ヲ順讀シ次ニ逆讀斜讀又ハ橫讀シ嫌疑ノ文意アルヤ否ヲ詳査スヘシ

第八十六條 在監人ヨリ發スル書信ハ必ス書信紙ヲ用ヒシメ典獄之ヲ緘シ封皮ニ其受領スヘキ者ノ住所氏名ヲ書シ某監獄署ト記シ之ヲ遞送ス但郵便稅ハ自辨セシム

親屬故舊若シハ辨識人ノ信書ハ監獄署ニ宛之ヲ差出サシムヘシ

第四章 接見

第八十七條 在獄人ニ接見セント請フ者アルトキハ典獄カツ之ニ面接シテ其氏名族籍營業等ヲ訊ヒ其緣由ヲ詳悉シ已ムヲ得サルノ事狀アリテ形跡ノ疑フヘキコトナキトキハ之ヲ許

シ看守長看守并檢テ面會セシム但密室ニ在ル者ハ接見ヲ許サズ
面會ノ時間ハ三十分時ヲ過ルヲ得ス若シ面會ヲ請ヒシ旨趣ニ違フ談話ヲナシタルトキハ直ニ之ヲ停止ス

第八十八條 死刑ノ執行及ヒ徒刑流刑獄監ノ刑ヲ受タル囚徒ヲ集治監ニ押送ノ以前親屬故舊其囚徒ニ面會セント請フトキハ前條第一項ノ例ニ依テ之ヲ許ス但面會時間ハ五十分時ヲ過ルヲ得ズ

第五章 差入品

第八十九條 未決者及ヒ懲治人ニ其親屬故舊ヨリ書籍用紙衣服臥具又飲食物炊煮ヲ要セサルモノニシテ一人一食ノヲ贈ラント請フキハ之ヲ許ス

但酒又ハ煙草其他攝生ニ害アルモノハ此限ニ在ラス

第九十條 已決囚ニハ書籍用紙ノ外一切差入品ヲ許サズ

第九十一條 假出獄免幽閉ヲ受タル徒刑流刑ノ者屬親故舊ヨリ金錢衣服夜具等ノ寄贈ヲ受スルトキハ其旨ヲ典獄ニ申告セシムヘシ

第四編

第一章 教誨

第九十二條 已決囚及ヒ懲治人教誨ノ爲メ教誨師ヲシテ悔過遷善ノ道ヲ講セシム

第九十三條 教誨ハ免役日又ハ日曜日ノ午後ニ於テ其講席ヲ開クモノトス

第九十四條 懲治人ヨハ毎日三四時間讀書習字算術度量圖書等ノ科目中ニ就キ之ヲ教フヘキモノトス

キモノトス

學科ハ懲治場ノ教場ニ於テ之ヲ研究セシメ其學業ノ進歩ヲ表スル爲メ就學ノ年月卒業ノ科目學業ノ優劣及ヒ行狀ノ良否氏名年齢等ヲ簿冊ニ記載シ巡閱官吏ノ檢閲ニ供シ又ハ其尊屬親ニ示スヲアルヘシ

第九十五條 各監房内ニ左ノ諸款ヲ揭示シ傍訓釋義シテ解シ易カテシムヘシ若シ文字ヲ識ラサル者アレハ入監ノ時ヨリ二十四時内ニ於テ之ヲ讀ミ聽カスヘシ

揭示

一在監人ハ常に教令ヲ遵守スヘシ

一平日互ニ和順ヲ主トシ教誨聽聞ノ席ニ就クトキハ慎テ容止ヲ正フスヘシ 未決監コハ此款ヲ除ク

一毎朝父母若クハ其墳墓所在ノ方位ニ向テ禮拜スヘシ

一毎朝常用ノ諸器具ヲ清潔ニシテ之ヲ排列シテ點檢ヲ受ケ及ヒ席壁圍廁等ヲ掃除スヘシ

一窓壁若クハ物件ヲ汚損シ不淨器ノ外ニ唾キ貯水ヲ濫用スルヲ禁ス

一監外ニ出タル時其途上ニ於テ同往ノ者ト交談シ及ヒ手ヲ交ヘ或ハ路人ニ聲語スルヲ禁ス

ス

一夜間ハ最モ鎮靜ヲ主トシ說話或ハ發聲又ハ濫リニ起歩スルヲ禁ス但晝間ト雖モ放歌喧

噪又ハ高聲ヲ誦讀スルヲ禁ス

一許可ヲ得サル物品ヲ監房ニ置キ或ハ勝負ヲ競ヒ若クハ賭博類似ノ惡戯ヲナシ或ハ同房ノ者ニ汚辱ヲ被ラシメ猥褻ニ渉ルカ如キ所爲アルヲ禁ス

一服役中其作業ニ關セサル他事ヲ交談シ及ヒ休憩ノ時間部外ノ工場ニ至ルヲ禁ス 未決監ニハ此款ヲ除ク

一許可ヲ得スシテ來食其他ノ物俵ヲ受與貸借スルヲ禁ス

一 監房ニ於テ異常ノ事アレハ晝夜ニ拘ラス直ニ看守所ニ通聲スヘシ

一 日没後ハ發病スルモ其症急劇ナルニ非レハ翌朝ニ至テ醫療ヲ乞フヘキモノトス若シ劇症ナルトキハ直ニ看守所ニ通聲スヘシ

一 獨居ノ者卒カコ病ヲ發シタルトキハ監房ヨリ看守所ニ架スル所ノ響器細ヲ引キ以テ之ヲ報スヘシ

一 病者アルトキハ同房ノ者共ニ介保ニカテ致スヘキハ勿論其看病人ヲラシムル者ハ切實ニ之ヲ看病スヘシ

一 水火風震等ノ際解放ニ遭フ者ハ其解放ノ時ヨリ二十四時内ニ監獄署又ハ警察署ニ其旨ヲ申出ツヘシ

右ノ諸款ニ違フ者及ヒ違フ者アルヲ知テ告ケサル者又ハ官吏ヨリ犯者ヲ問フニ當リ之ヲ舉ケサル者ハ其情狀ヲ盡リ處分スヘキモノナリ

年月日

某監獄署

第二章 賞罰

第九十六條 已決囚獄則ニ遵守シ且改悛ノ行爲著キ者ト典獄ニ於テ確認スルトキハ之ヲ賞

優スヘシ

第九十七條 賞優セシ者ニハ賞優セシ毎ニ之ヲ表スル爲メ獄衣ノ左袖ノ肩臂間ニ方ニ手尺ノ淺葱色ノ布ヲ縫着スヘシ

第九十八條 賞表ハ假出獄免幽閉又ハ特赦ヲ具狀スルノ考據ト爲ヌヲ得

第九十九條 賞表ヲ得タル者ニハ二個月ニ一次親屬故舊ニ接見及ヒ通信スルヲ許ス

第一百條 已決囚若シ在監人ノ逃走ヲ密告又ハ捕得シ或ハ監獄ニ係ル水火災ヲ防禦シ人命ヲ救援シタル者アレハ金貳拾五錢以下ヲ賞與シ其實金ハ監署ニ領置シ本人ノ請ニ由リ必用品又ハ食物ヲ購求スヘシ但第九十七條ノ賞表ヲ與フルノニ在ラス

第一百一條 未決監ニ在ル者前條ノ勞動アルトキハ之ヲ録シテ檢察官及ヒ裁判官ノ參考ニ供スヘシ

第一百二條 懲治人第百條ニ適シタル勞動アルトキハ金貳拾五錢以下ヲ以テ適宜物品ヲ購ヒ之ヲ與フヘシ

第三章 懲罰

第二百三條 已決囚獄則ヲ犯スホハ其輕重ヲ量リ左ノ例ニ從テ處罰ス

一 絶信 親屬故舊ト書信接見ヲ絶ス

二 屏禁 晝夜他ノ監房又ハ工場ト隔絶シタル監房ニ獨居セシメ服役時限表ニ照シテ坐

作ノ役ヲ科ス

三 減食 常食ノ半若クハ其三分ノ二ヲ減シ鹽湯二品ノ外茶ヲ與ヘズ

四 閉室 閉室ニ入レ常食ノ半若クハ其三分ノ二ヲ減シ鹽湯二品ノ外茶ヲ與ヘズ仍ホ臥

具ヲ禁ス

第二百四條 絶信屏禁ハ有限若クハ無限ト爲シ減食閉室ハ七晝夜ヲ限トス

減食閉室七晝夜ニ滿ルモ改悛ノ狀ナキトキハ一旦之ヲ免シ更ニ科スルヲ得

第二百五條 懲治及ヒ十六歳未滿ノ已決囚獄則ヲ犯ストキハ其輕重ヲ量リ左ノ例ニ從テ處

罰ス

一 獨居 晝夜一室ニ獨居ニシム

二 減食 常食ノ半以内ヲ減ス但茶ヲ減スルノ限コ在ラス

第二百六條 獨慎ハ七晝夜以内減食ハ三日以内トス

第二百七條 未決者及ヒ拘留ノ刑ヲ受ケシ者教令ニ順ハス或ハ同監ノ者ヲ煽惑シ又ハ其他ノ

規則ヲ犯ストキハ所犯ノ輕重ヲ量リ第二百三條第百五條ニ準擬シ減食スルコトヲ得

第二百八條 賞表ヲ有スル者處罰ヲ受マルトキハ賞表一個又ハ數個ヲ褫奪ス

第二百九條 無期徒刑ノ囚徒逃走シ若クハ獄舍獄具ヲ毀壞シ又ハ暴行脅迫ヲ爲シ其他重罪輕

罪ヲ犯シタルトキハ三月以上五年以下兩脚又ハ一脚ニ鉄ヲ施シ仍ホ鉄丸ヲ屬シタル鉄索

ヲ其鉄ニ貫キ腰間ニ綴帶セシメ綴帶ノ所ニ下鍵ス但監房ニ在ルモ晝間ハ之ヲ施スモノト

ス

若シ再ヒ重罪ヲ犯シタルトキハ五年以上十年以下前項ノ例ニ照シテ處罰ス

鉄丸ノ量ハ二百目以上二貫目以下トシ被罰者ノ體力ニ應シテ之ヲ施ス丸ハ索尾ニ屬シ地

上ヲ轉ハスモノトス其外役ニ服スルトキハ鉄丸ヲ除キ二人聯絆ノ法ニ從フ

第二百十條 減食或ハ閉室ノ罰ニ處スヘキ者アルトキハ醫師ヲシテ診視セシメ身體ニ妨ナキ